

オン・ブックス好評既刊

- ①ポップス英語で盛りだくさん 神崎浩
- ②小三治楽語対談 柳家小三治他
- ③ステレオハンドブック 長岡鉄男
- ④実力派歌手入門 有川新二
- ⑤音楽史とっておきの話 武川寛海
- ⑥ピアノのおけいこ 天池真佐雄
- ⑦子どもをテレビからとりもどせ 園部三郎
- ⑧にほんの絵かきうた 水田栄一
- ⑨こうすれば楽譜が読める 西原弘志
- ⑩カラヤン・カタロク303 黒田壽一
- ⑪相倉久人のジャズは死んだか 相倉久人
- ⑫ミュージシャンの三面記事 青木誠彦
- ⑬モダン・ジャズ決定盤 大和明・岡崎正通
- ⑭ベートーヴェンの虚像をはぐ 武川寛海
- ⑮棒振りラプソディ 石丸寛
- ⑯あ・昭和歌謡史 ON BOOKS編
- ⑰あ・昭和歌謡史 ON BOOKS編
- ⑱黒人ブルースの現代 三井徹
- ⑲これがクラシックだ 諸井誠
- ⑳バロック名曲名盤100 菅川達夫
- ㉑ピアノ名曲名盤100 諸井誠
- ㉒相倉久人の音楽雑学事典 相倉久人編
- ㉓歌で知るアメリカ 東理夫・神崎浩
- ㉔ゼロからのオーディオ 岡山好直
- ㉕続モダン・ジャズ決定盤 大和明・岡崎正通
- ㉖美しい声の出し方、つくり方 塩原慎大朗
- ㉗交響曲名曲名盤100 諸井誠
- ㉘ステレオ選びこころポイント 土屋純
- ㉙ロック決定盤 北中正和・かまろ
- ㉚スタンダード・ポピュラー名盤107 ON BOOKS編
- ㉛日本童謡集 河内紀・小島美子
- ㉜ギター教室たぐいまれレッスン 小池剛
- ㉝管弦楽協奏曲名曲名盤100 門馬直美
- ㉞レコード収集こころポイント かまろ
- ㉟エレキ・ギター入門 高田泰男
- ㊱音楽ちょっといい話 W・ヘニヒ・井口百合香
- ㊲音楽ファンのためのオーディオ 保柳健
- ㊳アコースティック・ギター入門 高田泰男
- ㊴シンセサイザーこころポイント 古山俊一
- ㊵続音楽史とっておきの話 武川寛海
- ㊶ヤル気を引き出すピアノのレッスン 大村典子
- ㊷日本のフォーク&ロック史 田川律
- ㊸珍談歌謡オケとっておきの話 日・ヴィカース・井口百合香
- ㊹ポピュラー・ジャズ実用語辞典 坂元輝・菅原秀
- ㊺名曲ガイド101 志島栄八郎
- ㊻室内楽名曲名盤100 大木正興・大木正純
- ㊼ジャズ・ヴォーカル名曲名盤161 山口弘滋
- ㊽おさかい家のためのピアノ名曲ガイド 繁下和雄共編
- ㊾コンピュータ・ミュージック入門 古山俊一
- ㊿レック・ゴー・プラスバンド 兼崎唯一 菅原秀
- ①これがコンパクト・ディスクだ 笠本修治
- ②ぼくらのライブハウス 岩永文夫
- ③これで大丈夫ドイツ音楽 出口真理子
- ④ジャズこころ聴きどころ 大和明
- ⑤鈴木淳のカラオケ個人教授 鈴木淳
- ⑥落ちこぼれをなくす楽しいピアノレッスン 新井千香美
- ⑦シンセサイザー・アンサンブル入門 高田泰男
- ⑧諸井誠のクラシック試聴室 諸井誠
- ⑨オーディオ羅針盤 菅野冲彦
- ⑩コンパクト・ディスクベスト100 三井徹
- ⑪ジャズ・ヴォーカル決定盤 山口弘滋
- ⑫大学ラプビー勝利の歌 木富皓音
- ⑬大作曲家の死因を探る E・W・ハイネ・市原和子
- ⑭ビデオとビデオディスクプレーヤーの選び方 林正儀

Beethoven  
 Streichquartett F-dur op.18 No.1  
 Streichquartett G-dur op.18 No.2  
 Sinfonie-Quartett, Berlin



室内楽名曲名盤100

ON BOOKS 100 SERIES

# 室内楽名曲名盤100

オーケストラ作品のような華やかさはないが、個々のプレイヤーの技量とアンサンブルの妙を存分に楽しめるのが室内楽の魅力。ハイドンからメシアンまでの名曲ガイドと名盤紹介。

大木正興 | 大木正純



大木正興  
 大木正純

ON BOOKS  
 音楽之友社

対象の細部を一点一画  
 おろそかにしない批評  
 篠田一士 ● 文芸評論家



●大木さんが亡くなって、本当に惜しい人を失ったと残念でならない。ぼくより2つ年上ということもあって、大木さんの感じ方、考え方の内裏も自分なりに理解できる場所が多く、それだけに、口惜しい思いは一入である。

●むかし、ぼくは大木さんの批評をタタキ大工のそれに擬したことがある。もちろん、貶辞でなく、讃め言葉なのだが、対象の細部を一点一画おろそかにせず、こうと思い定めたものは固く信じて疑わないという姿勢は、30年におよぶ大木批評を一貫する、得がたい美德だった。

●大木さんの遺著となったこの室内楽の手引きは、まさに本領安堵、著者、読者、ともによるこびとすべきである。

カバーの裏をごらんください  
 ON BOOKS カバー裏情報  
 主要弦楽四重奏団・トリオ一覧

ハイドン、モーツァルトからメシアン、の四重奏曲まで

●大木正興 ●昭和20年千葉果出身。東大美学科卒業後、一時出版社に勤務したが、やはりカエルの子というべきか、いつのまにか父と同じ道を進んでいた。その真面目な執筆の姿勢は親ゆずり、現在少数ながら若手音楽評論家として活躍している。趣味の将棋は初段格。



●大木正興 ●東京都出身。東大美学科を卒業。昭和25年から音楽評論の道に入る。感じたまを率直に飾らぬ言葉で語る氏の論評は、広く読者や演奏家から支持されてきた。一方、音楽の普及にも尽力を傾け、オーケストラの地方公演の解説役、各種音楽関係の団体や協会の役員も引き受けていたが、室内楽運動にかけた情熱は特別で、なかでもわが国トップクラスのソリストによる、日本室内楽協会、の設立と運営に当たっては、自ら裏方となって心血を注いできた。また、スポーツマンで、若い頃は野球の選手としてならし、晩年はスキーや登山を楽しんでいたが過労もとで肝炎を病み入院。本書の脱稿間際の昭和58年6月10日に亡くなった。折しも激しい雨と雷の最中であつた。享年58歳。著書に「室内楽のたのしみ」音楽会批評集(上・下)。



定価 750円 ISBN4-276-35047-6 C0273 ¥750E

## ●世界の名クワルテット・トリオ

### アマデウス弦楽四重奏団 Amadeus Quartet

一九四二年結成のイギリスのSQ。メンバーの3人までがウィーン系で、その名のとおりモーツァルトを中心にシューベルト、ブラームス等ウィーン風のスタイルのものが得意。ほかにドヴォルザークやロマン派の音楽にもその本領を発揮する。結成以来不動のメンバーで、いまや円熟の境地を迎えている。

### アルバン・ベルク弦楽四重奏団 Alban Berg Quartet

一九七〇年ウィーン・アカデミーの教授によって組織。作曲家アルバン・ベルク未亡人から正式にこの名称をもらう。心情組曲が彼らのデビュー盤として高く評価されたことから、現代音楽のスペシャリストというイメージもあるが、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンの古典でもすぐれた演奏をきかせる。

### イタリア弦楽四重奏団 Quartetto Italiano

一九四五年結成。当時は新イタリア弦楽四重奏団と呼んでいたが、五年より現在の名称となる。イタリア人特有の、持ち前の明るく澄みきった音色と流麗な演奏スタイルに加え、近年はウエテランらしく精神性豊かな円熟味を増してきた。

### ヴィア・ノヴァ四重奏団 Quatuor Via Nova

一九六二年に結成されたフランスのSQ。弦楽四重奏曲に新しい生命を与え、新しい作品が生まれるきっかけをつくり、この書法に一般の人々をなじませ、新しい道を拓き、新しい音楽的生命を作り出すというのが彼らのモットー。さすがにフランス近代ものはすばらしく、それも伝統にとられない自由で情熱的な演奏として高く評価されている。

### ウィーン弦楽四重奏団 Das Wiener Streichquartett

一九六四年ウィーン・フィルに所属のメンバーによって結成。バリリ、ボスコフスキー、ウエラー、ウィーン・コンツェルトハウスという歴代のウィーン・フィルのメンバーによる四重奏団の伝統を受け継ぎ、いわゆるウィーン風な演奏様式に加え、彼らの現代的感覚が加わり、いまや円熟の域。

### ウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団 Wiener Kanzenhaus Quartett

一九四四年ウィーン・フィルのメンバーによって結成。ウィーン・コンツェルトハウスのホールで定期演奏会を開いていたことからこの名がある。ウィーンの正統的な演奏法、格調高い演奏の中にもあたたか味のある家庭的な雰囲気は一種独特。六七年に解散。

### ジュリアード弦楽四重奏団 Juliard String Quartet

一九四六年ジュリアード音楽院の教授によって結成されたが、現在はメンバーも若返った。デビュー当時から精緻で尖鋭なアンサンブルは定評あるところで、この伝統は今も生き続けているが、近年は情緒的な表現を志向しているように、その円熟した演奏は再度のバルトークのレコードで発揮している。

### スメタナ弦楽四重奏団 Smetana Quartet

一九四五年、当時ブラハ音楽院の在学生によって結成されたが、現在は二回は年代がわりしている。自国の作曲家スメタナ、ヤナーチエクらの演奏は他の追随を許さないが、ペーターヴェンやシューベルトも高い評価を得ており、度々の来日でファンも多い。

### タートライ弦楽四重奏団 The Tatrai Quartet

一九四六年ハンガリー室内管弦楽団の指揮者

ヴァイオリニストのウィルモシュ・タートライによって組織されたハンガリーのSQ。四八年バルトーク国際コンクールの優勝でその名が世界的になり、七〇年パリのバルトーク・フェスは大成を取めた。息の合った結束力と個々の自覚性があふれる彼らの演奏は深い感動を与える。

### 東京クワルテット Tokyo String Quartet

桐朋学園を経てジュリアード音楽院に学んだ4人によって結成。一九七〇年第19回ミュンヘン国際コンクールに優勝して二階世界に名声を上げた。完璧な技巧も深い洞察力、力強い表現力は高い音楽の完成度となっており、バルトークはじめ現代音楽の分野でもそれが好結果を生んでいる。

### バリリ四重奏団 Barilli Quartet

一九四九年ウィーン・フィルのコンサート・マスター、ワルター・バリリを中心に結成された。バリリの洗練された格調高い音楽性がこのクワルテットにそのまま反映、純度の高いアンサンブルとウィーン流の気品のあるスタイルは、今なおオールド・ファンには忘れられない。

### バルトーク弦楽四重奏団 The Bartok Quartet

一九五七年リスト・フレンチ音楽院の学生4人で結成されたハンガリーのSQ。バルトークのディック未亡人からバルトークの名を正式に冠せられ、ハンガリー室内楽の伝統を見事に継承し、その繊細で精緻なアンサンブルは、バルトークはいうにおよぶずウィーン古典派やドイツ・ロマン派にもその実力をフルに発揮する。

### パレナシ弦楽四重奏団 Quatuor Paréni

パリ音楽院出身の4人で一九四四年に結成。一九五五年パリにおけるバルトーク連続演奏会は、非ハンガリー人による新鮮な演奏として一大センセーションを起こした。持ち前のデリケートなニュアンスとあいまいさのない表現は、フランスものに二層の輝きを与える。

### ハンガリア弦楽四重奏団 The Hungarian String Quartet

一九三五年名ヴァイオリニストのゾルタン・セーケイによって結成されたハンガリーの名門。セーケイがバルトークと親交があったこともあり、バルトークを最も得意としていた。その淡々とした語り口と人間味あふれる演奏は独特のもの味があった。

### ブダペスト弦楽四重奏団 Budapest String Quartet

一九一八年ブダペスト王立歌劇場のヴァイオリニストが中心になって結成。明確で厳しい緊張を秘めたその演奏スタイルは、のちの弦楽四重奏団の規範となり、四重奏の演奏史上、先駆者として不朽の名を残した。六九年に消滅。

### ブッシュ弦楽四重奏団 Busch Quartet

一九一九年名ヴァイオリニスト、アドルフ・ブッシュによって組織されたドイツの名クワルテット。一九二〇年代から三〇年代にかけて世界最高の弦楽四重奏団として楽壇に君臨。四重奏の演奏史上に一時代を画した。中でもペーターヴェンにおいては精神性を重視した解釈をとり、きき手に深い感動を与えた。四〇年ブッシュがアメリカに去り、消滅した。

### ベルリン弦楽四重奏団 Berliner Streichquartett

一九六五年ベルリン国立歌劇場のカール・ズスケを中心に結成された東独を代表するSQ。ズスケ四重奏団として活動していたが七〇年に現在の名に改称。その演奏スタイルはまさにドイツ正統派という言い方がぴったりで、がっちりした構築性と濃厚なアンサンブル、それに現代的な感覚が加わった彼らのペーターヴェンやモーツァルトは特に定評がある。

### ボロディン弦楽四重奏団 Boodin Quartet

一九四四年モスクワ音楽院出身者によって結成。当初モスクワ音楽院四重奏団と称していたが、五五年国家からボロディンの名を与えられた。密度の高いアンサンブルと執情あふれるダイナミックな演奏が魅力で、シオスタコヴィチ全集は彼らの記念碑的レコード。

### メロス・クワルテット Malos Quartett Stuttgart

一九六五年に結成された西ドイツのSQ。メロスの名は第一ヴァイオリンのメルヒャー(Melcher)のMelch。第二ヴァイオリンとウイオラのフォス(Voss)兄弟の〇〇を組み合わせたもの。古典とロマン派とが現代とか、一時期の音楽のみにこだわることを選ばない」という彼らの考えどおり、ハイドンから20世紀の音楽まで幅広いレパートリーをもっている。

### ヤナーチエク弦楽四重奏団 Janacek Quartet

一九四七年ブルノ音楽院のヴァーチャ・チェルニーの門下生4人によって結成。スケールが大きくダイナミックな演奏をきかせる反面、繊細さもあわせもち、そのまじりあるアンサンブルと訴えかけの強い表現方は一種独特な味わいがある。

### ラサール弦楽四重奏団 La Salle Quartet

一九四六年ジュリアード音楽院在学中の4人によって結成されたアメリカのSQ。自己の様式を作品に押しつけるのではなく、その作曲家の様式が演奏を決定する、というのが彼らの主張。その言葉どおり、適格な楽譜に対する洞察力と高度の技術の上に立った彼らの演奏は、古典から現代まで曲の核心に迫った表現と評価が高い。五八年以来メンバーはアマティの楽譜を使用している。

### カザルス・トリオ Cazals Trio

スペインが生んだ巨匠チェリストのパブロ・カザルス(一八七六—一九七二)を中心に、フランスの名ピアニスト、アルフレッド・コルトー(一八七二—一九六二)それにフランスの名ヴァイオリニスト、ジャック・ティボ(一八八〇—一九五二)の3人が一九〇五年に結成した歴史的なトリオ。このトリオは不定期ながら一九一八年ごろまで約32年間も続き、熱気にあふれたそのロマン性豊かな音楽は、当時パリ音楽界の話題のまどであった。

### スーク・トリオ Suk Trio

チェコのヴァイオリニスト、ヨーゼフ・スークを中心に一九一五年に結成。ピアノはヤン・パネシク、チェロはヨーゼフ・フツフロ(一時：ミロシユ・サードロ)。スークの潔癖で気品ある風格をそのまま反映し、精緻なアンサンブルと、ハツタリのない血のかよった純度の高い音楽をきかせる。

### チエコ・トリオ Czech Trio

ゴアニストのヨゼフ・パレニチエクを中心に一九四〇年に結成。ヴァイオリンはアレクサンダー・ブローツェク、チェロがサツシヤ・ヴェチトモフ。当時はミロシユ・サードロ。同じチエコのトリオながらスーク・トリオの影にかかれてやや地味な存在だが、歴史も古く、その緻密なアンサンブルとウエテランらしい音楽づくりはなかなか味わいがある。

### ボザール・トリオ Beaux Arts Trio

一九五四年タンズルウッドのバークシャー音楽祭でデビューし、翌五五年正式に結成したアメリカのトリオ。ヴァイオリンがインズドル・コーエン(当初はダニエル・ギレー)、ピアノがメナヘム・プレスラー、チェロがバーナード・グリーンハウス。いわゆる巨匠同士のトリオとは違って、スケールの大きさはないが、それぞれが室内楽の豊かな経験を生かしたウエテランらしい、きわめて純度の高いすぐれたアンサンブルをきかせる。

# 室内楽 名曲名盤100

大木正興|大木正純

**ON**  
BOOKS

目次

室内楽の歴史  
室内楽の発展  
室内楽の演奏  
室内楽の鑑賞  
室内楽の録音  
室内楽の演奏者  
室内楽の指揮者  
室内楽の楽譜  
室内楽の楽器  
室内楽の演奏会  
室内楽の録音会社  
室内楽の演奏場  
室内楽の演奏時間  
室内楽の演奏場所  
室内楽の演奏人数  
室内楽の演奏楽器  
室内楽の演奏曲種  
室内楽の演奏スタイル  
室内楽の演奏文化  
室内楽の演奏教育  
室内楽の演奏研究  
室内楽の演奏批評  
室内楽の演奏市場  
室内楽の演奏産業  
室内楽の演奏社会  
室内楽の演奏未来



協力

- 日本コロムビア株式会社
- 株式会社CBS・ソニー
- キングレコード株式会社
- 日本フォノグラム株式会社
- ポリドール株式会社
- RVC株式会社
- テイテク株式会社
- 徳間音楽工業株式会社
- 東芝EMI株式会社
- ビクター音楽産業株式会社
- ロンドンレコード株式会社
- カメラータ・トウキョウ

はじめに

本書はおなじみ「名曲名盤」シリーズの室内楽曲編である。このジャンルの古今の名作を例によっておよそ百曲選び出し、作品について簡単なコメントを加えるとともに、それぞれの代表的な名盤を紹介している。ただし既刊の「バロック名曲名盤一〇〇」(皆川達夫著)との重複を避けてバッハ、ヘンデルらの作品は素通りした。一方、無伴奏ヴァイオリン(あるいはチェロ)曲は便宜上「器楽曲」に分類される場合が多いが、本書ではその中からも重要なもの数曲を取り上げている。さらにレコードの選択に関しては、原則として一九八三年現在で入手し得るものに限定することにした。

書き方はほぼ前例に倣っているが、レコードについて比較的詳しくふれているのがこの本のひとつの特徴と言えるかもしれない。それは、いまさらいわゆる楽曲解説をするまでもない名高い曲が収録作品の大半を占めているためでもあるが、それ以上に、ありきたりの形容詞で片付けてしまうにはあまりにも惜しい名演奏がたくさんあるからでもあった。また、作品についてはそれぞれを単独にみるのではなく、本書を通読することによって室内楽曲の歴史的な流れをこく大づかみではあるが概観できるよう配慮したつもりである。

ところで、本来ならこの本は父・大木正興が全面的に執筆するはずであった。ところが選曲も終わりにいよいよ書き始めようかという段になって本人が病に倒れ、しかも数カ月の治療を重ねてもなお仕事に復帰するめどがつきにくい状態が続いたことから、予定を変更してこの「共著」という形がとられたのである。もちろん父の書き下ろしの原稿は望むべくもなかったが、幸い七、八年前のレコード芸術誌の付録に大木正興著「最新レコード名鑑・室内楽曲編」という上下二巻の小冊子があった。そこでこれをいわば底本に、必要に応じて私が加筆、訂正するという段取りが決まったのだ。そして、それがど

うにか脱稿にこぎつけ、まさにこのはしがきを書こうとしていた矢先に、父は長い闘病生活の苦しみから解放されて、永遠に帰らぬ人となったのである。

そのような状況であったから、私としてもこれが父の最後の著書になるかも知れぬという思いが心のどこかであって、でき得る限り父の文章はそのまま生かしたいという気持が強かった。とは言うものの読者も御自分の身に置き換えてみればおわかりのように、親子と言えどももの考え方や趣味は必ずしも一致するものではない。私の場合も、父の文章のどうしても納得できない部分、あるいは気に入らない言い回しなどは削らないわけにはゆかなかった。また、担当の音楽之友社出版部、福沢光臣さんの御意見で、私の個人的な体験や独断に満ちた考えなども若干付け加えた。そのような場合も含めて、文中にたくに筆者とあるのは私、大木正純のことであるので了解されたい。ともあれ、このような事情で共著とならざるを得なかったのは私にとって残念であり、また父の読者に対しては心から申し訳なく思う次第である。

室内楽というジャンルは実に奥が深く、味わいが尽きない。本書が読者の方々の室内楽に対する愛情と認識を深める一助になればそれに勝る喜びはないが、しかし私の正直な心境は、先発投手があっさり去ってしまったマウンドにウォーミング・アップもなしで上がった新人投手のようなもので、果たして満足なリリーフができたかはなほだ心もとない。しかも何ぶん時間がなく、思い違いもあるかも知れないし、また新しい資料を検討する余裕がなかったのも心残りである。その点も含めて御意見や御批判を頂ければ幸いである。未熟の筆者ゆえ、福沢光臣さんにはたいへんなお手教と、それ以上に御心配をおかけしてしまった。この場を借りてお礼とお詫びを申し上げます。

一九八三年六月

大木正純

## 室内楽名曲名盤100 目次

はじめに：3

### ● ハイドン

弦楽四重奏曲第一七番へ長調《セレナード》

：12

弦楽四重奏曲第六七番ニ長調《ひばり》：14

弦楽四重奏曲第七七番ハ長調《皇帝》：16

### ● モーツァルト

ヴァイオリン・ソナタ第二四番ハ長調：18

ヴァイオリン・ソナタ第二八番ホ短調：20

ヴァイオリン・ソナタ第三四番変ロ長調：22

ヴァイオリン・ソナタ第四〇番変ロ長調：24

ピアノ四重奏曲第一番ト短調：26

フルート四重奏曲（全四曲）：28

オーボエ四重奏曲へ長調：30

弦楽三重奏のためのデイヴェルティメント

：32

弦楽四重奏曲第一五番ニ短調：34

弦楽四重奏曲第一七番変ロ長調《狩》：36

弦楽四重奏曲第一九番ハ長調《不協和音》：38

弦楽五重奏曲第三番ハ長調：40

弦楽五重奏曲第四番ト短調：42

クラリネット五重奏曲イ長調：44

### ● ベートーヴェン

ヴァイオリン・ソナタ第五番へ長調《春》：46

ヴァイオリン・ソナタ第九番イ長調《クロイツェル》…48

チェロ・ソナタ第三番イ長調…50

チェロ・ソナタ第四番ハ長調…52

チェロ・ソナタ第五番ニ長調…54

《魔笛》の主題による七つの変奏曲…56

弦楽三重奏のためのセレナード…58

ピアノ三重奏曲第七番変ロ長調《大公》…60

弦楽四重奏曲第四番ハ短調…62

弦楽四重奏曲へ長調《ラズモフスキー第一番》…64

弦楽四重奏曲ホ短調《ラズモフスキー第二番》…66

弦楽四重奏曲ハ長調《ラズモフスキー第三番》…68

弦楽四重奏曲第一〇番変ホ長調《ハーブ》…70

弦楽四重奏曲第一番へ短調《セリオーン》…72

弦楽四重奏曲第一二番変ホ長調…74

弦楽四重奏曲第一三番変ロ長調／大フーガ…76

弦楽四重奏曲第一四番嬰ハ短調…78

弦楽四重奏曲第一五番イ短調…80

弦楽四重奏曲第一六番へ長調…82

七重奏曲変ホ長調…84

●バガニーニ

二十四のカプリッチョ《奇想曲》…86

●シューベルト

アルペジオーネ・ソナタ…88

ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ《全三曲》…90

ピアノ三重奏曲第一番変ロ長調…92

弦楽四重奏曲第一三番イ短調《ロザムンデ》…94

弦楽四重奏曲第一四番ニ短調《死と乙女》…96

弦楽四重奏曲第一五番ト長調…98

ピアノ五重奏曲イ長調《ます》…100

弦楽五重奏曲ハ長調…102

八重奏曲へ長調…104

●メンデルスゾーン

ピアノ三重奏曲第一番ニ短調…106

八重奏曲変ホ長調…108

●シヨパン

チェロ・ソナタ・ト短調…110

●シューマン

弦楽四重奏曲《全三曲》…112

ピアノ四重奏曲変ホ長調…114

ピアノ五重奏曲変ホ長調…116

●フランク

ヴァイオリン・ソナタ…118

ピアノ五重奏曲へ短調…120

●スメタナ

弦楽四重奏曲第一番ホ短調《わが生涯より》…122

●ブラームス

ヴァイオリン・ソナタ第一番ト長調《雨の歌》…124

ヴァイオリン・ソナタ第二番イ長調…126

ヴァイオリン・ソナタ第三番ニ短調…128

チェロ・ソナタ第一番ホ短調…130

チェロ・ソナタ第二番へ長調…132

クラリネット・ソナタ《全二曲》…134

ピアノ三重奏曲第一番ロ長調…136

ホルン三重奏曲変ホ長調…138

弦楽四重奏曲第三番 変ロ長調 … 140

ピアノ四重奏曲第一番 ト短調 … 142

弦楽五重奏曲第一番 へ長調 … 144

ピアノ五重奏曲へ短調 … 146

クラリネット五重奏曲ト短調 … 148

弦楽六重奏曲第一番 変ロ長調 … 150

●ポロディン

弦楽四重奏曲第二番 ニ長調 … 152

●チャイコフスキー

ピアノ三重奏曲イ短調《偉大な芸術家の思い

出のために》154

●ドヴォルザーク

ピアノ三重奏曲第四番 ホ短調《ドゥムキー》

… 156

弦楽四重奏曲第一二番 へ長調《アメリカ》… 158

ピアノ五重奏曲イ長調 … 160

●フォーレ

ヴァイオリン・ソナタ第一番 イ長調 … 162

ピアノ四重奏曲第一番 ハ短調 … 164

ピアノ四重奏曲第二番 ト短調 … 166

●ヤナーチェク

弦楽四重奏曲第二番《ないしょの手紙》… 168

●ショーン

ピアノ、ヴァイオリンと弦楽四重奏のための

協奏曲ニ長調 … 170

●ドビュッシ

ヴァイオリン・ソナタ … 172

フルート、ヴァイオリンとハープのためのソナタ

… 174

弦楽四重奏曲 … 176

●シェーンベルク

弦楽六重奏曲《浄められた夜》… 178

●ラヴェル

ヴァイオリン・ソナタ … 180

ピアノ三重奏曲イ短調 … 182

弦楽四重奏曲へ長調 … 184

●バルトーク

ヴァイオリン・ソナタ(全二曲) … 186

二台のピアノと打楽器のためのソナタ … 188

弦楽四重奏曲第四番 … 190

弦楽四重奏曲第五番 … 192

弦楽四重奏曲第六番 … 194

●ストラヴィンスキー

組曲《兵士の物語》… 196

●コダーイ

無伴奏チェロ・ソナタ … 198

●ウェーベルン

弦楽四重奏のための五楽章 … 200

●ベルク

弦楽四重奏のための《叙情組曲》… 202

●プロコフィエフ

ヴァイオリン・ソナタ第一番 へ短調 … 204

ヴァイオリン・ソナタ第二番 ニ長調(フルー

ト・ソナタ) … 206

●ショスタコーヴィチ

ピアノ五重奏曲ト短調 … 208

●メシアン

世の終わりのための四重奏曲 … 210

凡 例

演奏者  
内容またはカップリング曲目

◀オイストラフ(vn)リヒテル(p)[ブラームス/第2番, バルトーク/第1番]…Me-VIC5311~12●シゲティ(vn)レヴィーン(p)[第2番]…ⓄCS-SOCU257

レベル名 ↑      ↑ レコード番号

■演奏者欄略語表

|    |        |      |        |
|----|--------|------|--------|
| p  | ピアノ    | ob   | オーボエ   |
| vn | ヴァイオリン | hrn  | ホルン    |
| va | ヴィオラ   | fg   | ファゴット  |
| vc | チェロ    | hp   | ハープ    |
| cb | コントラバス | perc | 打楽器    |
| fl | フルート   | SQ   | 弦楽四重奏団 |
| cl | クラリネット | Ens. | アンサンブル |

■レーベル略号表 (発売レコード会社)

|     |                                    |     |                         |
|-----|------------------------------------|-----|-------------------------|
| A   | エンジェル (東芝EMI)                      | Hun | フンガロトン (キング)            |
| Art | アルティスコ (キャニオン)                     | L   | ロンドン (ロンドン, キング)        |
| C   | コロムビア (日本コロムビア)                    | Me  | メロディア (ビクター音楽産業)        |
| Cal | カリオペ (ビクター音楽産業)                    | Op  | オーパス (ビクター音楽産業)         |
| Cds | シャンドス (日本コロムビア)                    | OS  | オーヴァーシーズ (テイチク)         |
| Cha | ジャラルラン                             | Pan | パントン (ビクター音楽産業)         |
| CS  | CBS・ソニー (CBS・ソニー)                  | Ph  | フィリップス<br>(日本フォノグラム)    |
| CT  | カメラータ<br>(カメラータ・トウキョウ)             | R   | RCA (RVC)               |
| De  | デンオン (日本コロムビア)                     | Ro  | ロココ (日本コロムビア)           |
| DS  | ドイツ・ジャラルプラッテン<br>(徳間音楽工業)          | Ser | セラフィム (東芝EMI)           |
| E   | エラート (RVC)                         | Sup | スプラフォン (日本コロムビア)        |
| Eu  | オイロディスク (日本コロムビア)                  | T   | テレフンケン (キング)            |
| F   | フォンタナ (日本フォノグラム)                   | Tr  | トリオ (トリオ)               |
| G   | グラモフォン (ポリドール)                     | V   | ビクター (ビクター音楽産業)         |
| HM  | ハルモンア・ムンディ<br>(独=テイチク, 仏=ビクター音楽産業) | W   | ウェストミンスター<br>(ビクター音楽産業) |
|     |                                    | WS  | ワルター協会 (日本コロムビア)        |

Ⓞはモノラル, Ⓞは疑似ステレオ, 特に表示のないものはステレオ盤

## フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

Franz Joseph Haydn(1732-1809)

### 弦楽四重奏曲第17番へ長調《セレナード》

String Quartet No.17 in F "Serenade" Op.3-5 Hob.III-7

ハイドンのこのした弦楽四重奏曲は全部で七十曲前後に達するが、そのうち二十代半ばすぎに書かれたとみられる最初のグループ(作品一および二)に含まれる曲は、いずれも彼自身によって「デイヴェルテイメント」の名が与えられ、内容も二つのメヌエットを持つ全五楽章の構成になっている。それは弦楽四重奏曲も当初は娯楽音楽ないしはそれに近いものとして生まれ出たことを物語っているが、やがてこの曲種はハイドンの創作を通じて急速に独自の厳格な形と中身とを備えていった。一般にハイドンは「交響曲の父」などと呼ばれるが、まったく同じことが弦楽四重奏曲についても言えるのである。

ところでハイドンの「作品三」としてこんにちに伝えられた弦楽四重奏曲集(全六曲)は、実は最近の研究によってその真憑性に疑問が投げかけられ、少なくとも最初の二曲はアモルバッハ(現在は西独バイエルン州に所属)僧院の僧侶で、ハイドンの音楽の熱烈な支持者だったロマン・ホフシュテッター(一七四二-一八一五)の作であるらしいことが判明するに至った。さらにこのへ長調の曲を含む残る四曲についても、やはりハイドンの真作ではないとする説が現在では有力視されている。売れ行

きを伸ばすため出版に当たって大家の名を無断盗用する例はこの時代には必ずしも珍しいことではなく、とくにハイドンはしばしば被害者になっているが、裏を返せばそれは彼の名声の高さを証拠立てる事実にはほかならない。

このへ長調の曲(作品三の五)は古くからへセレナードの愛称で知られている。それは第二楽章アンダンテ・カンタービレが、ギターを模したピツィカートを伴奏に弱音を付けた第一ヴァイオリンがひとり甘い旋律を歌うセレナード風の音楽であるためで、その第二楽章は単独に取り出されて室内オーケストラや弦楽合奏でも演奏されるほど有名であるが、曲全体のまとまりも決して悪くないことから、この時期の弦楽四重奏曲の中では演奏される機会は抜きん出て多くなっている。

レコードはまずイタリア弦楽四重奏団の明るくさわやかな演奏を挙げたい。とにかく形式ばるところがなく、おのずと明快な形に仕上がっているといった自然な味が大きな特色である。プラハ弦楽四重奏団はすっきり整った全曲の見通しのよさと、随所に盛られた繊細なニュアンスが魅力だ。ヤナーチェク弦楽四重奏団の演奏もききごたえがある。

- ◀イタリヤSQ [シューベルト/第11番]…F-FG24
- 9 ●プラハSQ [第77番]…Eu-K17C9315(廃盤)
- ヤナーチェクSQ [第38番, ドヴォルザーク/第12番]…L-K20C8650



## フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

Franz Joseph Haydn(1732—1809)

### 弦楽四重奏曲第67番ニ長調《ひばり》

String Quartet No.67 in D "Lerchen" Op.64-5 Hob.III-63

一七七二年の《太陽四重奏曲》作品二〇、それにもまして九年後のハロニア四重奏曲《作品三三》で弦楽四重奏曲の分野に大きな成果をあげたハイドンは、それらの出来栄えに勢いづいたように、一七八〇年代にはこのジャンルに十三曲もの作品を書いた。そして一七九〇年を迎えていよいよ作品六四の六曲が誕生する。この曲集は、かつてエステルハーシ家の宮廷楽団に所属したヴァイオリニストで、一七八九年ごろに単身パリへ出て活躍し、後年は実業家として財をなしたといわれるヨハン・トスの依頼を受けて書かれた作品群の一部である。なおこの一七九〇年は折りしもエステルハーシ家の楽団の解散の年で、ほぼ三十年ぶりに事実上自由の身となったハイドンは、その年の暮、ウィーンをあとにロンドンへの旅に出る。

ハイドンの作曲もここまでくると完全に円熟の境で、形式上の整備工夫にももういささかのこわばりもなく、音楽はまったく自然な流動性を持ち、この作曲家のきわめてユニークな人間の個性がいたるところに顔をみせるようになる。六曲はいずれ劣らぬ名作揃いであるが、この第五番ニ長調はひばりのさえずりを思わせる部分があるところからその愛称

で呼ばれることもあってとりわけ人気が高い。

さて、スメタナ弦楽四重奏団がすでに三回この曲を吹き込んでいる。最新のものは一九八〇年の来日公演のライヴ録音で音の鮮度はこれが一番だが、アンサンブルの緊密さと細部の仕上がりではむしろ一九六五年盤の方が上かも知れない。いずれも弦の冴えわたった美感は無類である。少し古いところではウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団の名演がのこっている。いわばこの団体の全盛時の記念盤で、末期にはまったくてんめんとした前時代様式に帰っていった彼らも、この時期にはあのような閉塞的な陶酔趣味ではなく、雅味豊かなウィーン流室内楽様式の最もいきなところをみせていたものだ。その重奏のうまみには、現代の室内楽演奏のアンサンブル技術がいかに合理的、計測的にこしらえあげられた感じが強いのに対して、必要欠くべからざるものが有機的に結び合っつてひとつのまとまりを形成しているといった趣がある。そのほかボロディン弦楽四重奏団の澄明な美しさ、強い表現意欲の漲ったタートライ弦楽四重奏団の個性的な演奏、あるいはベルリン弦楽四重奏団の古典的様式美などいずれも捨てがたいものである。



- ◀スメタナSQ'65年録音〔第39番〕…A-EAC80261  
●同'80年録音〔第39番〕…De-OX7212●ウィーン・  
コンツェルトハウスSQ〔第76番〕…@W-VIC  
5366●ボロディンSQ〔ペートルヴェン/第11番〕  
…Me-(廃盤)●タートライSQ〔第66番〕…Hun-  
K17C9334

# フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

Franz Joseph Haydn(1732—1809)

## 弦楽四重奏曲第77番ハ長調《皇帝》

String Quartet No.77 in C "Kaiser" Op.76-3 Hob.III-77

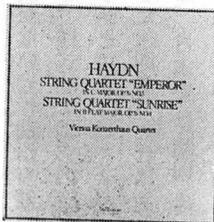
一七九七年、シュューベルトが生まれた年にまたハイドンの新しい弦楽四重奏曲六曲が誕生した。二度目のロンドン訪問も終わり、彼は交響曲を作曲しなければならぬ環境の外に出ている。この作品七六のグループは、交響曲の分野における彼の仕事すべて完了したあとに現われた。そしてハイドンの新しい対世間的な音楽として、ロンドンでヘンデルの作品に接したことをきっかけに、この年オラトリオが着想される。そのような状況のもとで書かれたこれらの弦楽四重奏曲には、ハイドン持前の几帳面さを放棄しない限りでの、精神のきわめて自由な飛翔がある。すべての楽想は純化され、遅疑の痕跡の一片も見出し得ないほどすっきりと性格的であり、形も見事に整っている。ハイドンはこのあとにもさらに二曲の弦楽四重奏曲を完成し、未完のものを一曲のこしたが、芸術的香気はもう作品七六の高さまでは達し得なかった。ハイドンの最後期の交響曲に比肩し、あるいはそれを凌ぐものはこのグループである。

この曲集が誕生以来いかにしばしば演奏され、人々に愛されてきたかは、六曲のうち三曲にニッケネームが付けられていることからもうかがえるが、この第三番ハ長調のそれは、第二楽章変奏曲の主題旋律が「神

よ、皇帝フランツを護り給え」という歌詞を付けられて皇帝讃歌として歌われたことに由来するもので、やがてそれがオーストリア国歌となったのは周知のとおりである。

この曲もウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団で大きくことができる。前述のへびりと同様このクワルテットの最も活動的な、充実しきった時期の録音（一九五〇年代前半）で、とくに《皇帝》の場合、音楽がすこぶる柔らかにふくらみ、感情のニュアンスも豊富である。これに次ぐのはアマデウス弦楽四重奏団で、この演奏は闊達で柄が大きい。表現力はきわめてたくましいが、表情はいくぶんロマン的な色調を帯びており、変奏曲楽章などは大らかさと、少しばかり甘さとがあって、たいへん気分の豊かな音楽になっている。プラハ弦楽四重奏団の演奏は対照的に地味だが、しっかりとまとまっていて誠実味もあり、味わいの深さはなかなかのもの。もうひとつイタリア弦楽四重奏団も美しい。なお、アルバン・ベルク弦楽四重奏団はこの段階ではまだ現在の充実ぶりには若干距離があるようだが、その切れのよいアンサンブルはやはり新しい時代の息吹きを感じさせるものである。

- ◀ウィーン・コンツェルトハウスSQ [第78番]…00  
W-VIC5365●ブラハSQ [第17番]…Eu-K17  
C9315(廃盤)●イタリアSQ [第78番]…w-h-18PC  
5529●アルバン・ベルクSQ [第74番]…T-K17C  
8817



# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

## ヴァイオリン・ソナタ第24番ハ長調

Violin Sonata No.24 in C, K.296

モーツァルトのヴァイオリン・ソナタは十歳に満たない幼年期から最後の三大交響曲の時代まで長く書き続けられている。様式的に相応の変化がみられるのは従って当然だが、それでもどちらかと言えばピアノが主役でヴァイオリンは随伴者というのがほぼ一貫した原則で、これは当時の一般的な書き方をそのまま踏襲したものである。日本では簡単に「ヴァイオリン・ソナタ」と称してしまいが、その点で作品の実質的なスタイルを示さない場合があるので、きくときにはそれを心得ておく必要がある。ちなみにモーツァルト初期の曲は、ヴァイオリンはほんの添えもので実体はピアノ・ソナタである。ヴァイオリンなしでも楽しめるという方が、たしかに一般家庭用には都合がよい。

このハ長調の曲はヴァイオリン・ソナタが多数作られた一七七八年の作品で、マンハイム滞在中に、当地の宮廷顧問官の家族待遇の女中で、モーツァルトのピアノの生徒だったテレゼ・ピエロン嬢のために書かれた。これ以前に佳作がまったくないわけではないが、噴出するような明るい楽想と作品の充実したまとまりとは、このジャンルに初めて本当のモーツァルトの天分の花が開いたことを感じさせる。

レコードはシェリングとヘブラーのデュオがたいへん美しい。合わせものではときに力みかえることのあったシェリングだが、ここではヘブラーの柔らかい音楽性と静かな知性の光に包まれて、意味の深いヴァイオリンを奏でている。こういう作品からは、その音楽に付帯する環境の香りとといったものは消すことが許されないし、といってそれを現代人が空想的に追い求めて感嘆しては鼻もちならぬことになる、という意味で非常に困難を伴うものだが、この演奏ではその辺が理想的に調和している。モーツァルト様式を決定する表現の鍵をぴしりと押えている点で、ヘブラーのこまやかな心遣いは特筆に価するものだろう。バリリとバドゥラスコダの演奏も一九五〇年初頭のモノラル録音ながら捨てがたい。必ずしも華麗ではないが、この表現には優しい美しさの中に、切実な哀しみを隠す甘美なほほえみがある。それがモーツァルトの音楽の不朽の意味を表明しているように思われるのである。ほかのヴァイオリニストのように現代的独奏者としてはほとんど活動せず、ひたすら室内楽あるいは合奏の分野でのみ自己のスタイルを守り続けてきたバリリの物静かな語り口にとくにその感が深い。

◀シェリング (vn) ヘブラー (p) [第28, 42番]…Ph-X8629 ●バリリ (vn) バドゥラスコダ (p) [第28番, 41番]…@W-G10525



## ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756—1791)

### ヴァイオリン・ソナタ第28番ホ短調

Violin Sonata No.28 in e, K.304

ヴァイオリン・ソナタは、当時は最も気楽に合わせごとを樂しむ音楽だから、優雅で、決して深刻なことを語らないのが常識的なエチケツトというものである。モーツァルトのたくさんのヴァイオリン・ソナタで短調のものはこれ一曲というのも、当然そのことと無関係ではない。この例外的なソナタは一七七八年、パリで完成された。作曲直後にモーツァルトは母を失うが、その不安が彼の心を領していたのか、あるいはマンハイムで別れてきたアロイツァにやがて失恋する予感なのか、それともパリのうわつた環境の中に小さく孤立することを余儀なくされている天才の心に立ち現われた魔神の呼び声なのか、いやそのように言葉に言い表わすのはしよせん不可能であるかも知れないが、ともかくこれは異様な暗さである。

バリリとバドゥラ・スコダの演奏はこの曲でも独特の味を持っている。ハ長調K二九六でことさら華美な活気を強調しなかった彼らは、ここでも陰鬱さをことさら印象づけようとしなない。むしろ外見は坦々としている。しかし、持前の柔和な音と表情とが何と痛切に悲しみの深さを語っていることか。こういう含蓄はそこいらの演奏者には容易に求められな

い。バドゥラ・スコダのピアノもいちだんと好演である。一方新しい録音にもよいものが少なくない。まずスークのレコードは彼が五十歳を迎えた記念に吹き込まれたものだが、洗練と気品に満ち溢れたその高貴なヴァイオリンはまさしく天下一品である。それに刺激されたかのように、ハーラも誇り高いピアノを奏でている。シェリングとヘブラーも好演。ここにはかなり意識して陰影の味を出そうとしたあとがあるが、しかしことに第二楽章での二つの楽器の対話など、音楽の内部に深く耳を傾けて、モーツァルトの心の鼓動をじつと確かめているような、誠実な精神に心を打たれるものがある。ポベスコとジャンティは一九八一年に日本で行なわれた一連の録音の一部で、このレコードにはちょうど本書で取り上げるこのホ短調K三〇四以下の三曲が収められている。つややかでしかも品のよいポベスコのヴァイオリンがききものだ。新しい録音ではないがグリュミオーとハスキルのデュオも興味深い。ヴァイオリンの華麗な美音はこの曲の場合やや違和感がなくもないが、ハスキルのピアノはそれより一段高いところに立って、さすがに非凡な美感を誇っている。

◀バリリ(vn) バドゥラ=スコダ(p) [第24, 25番]…  
◎W-G10525 ●スーク(vn) ハーラ(p) [第29番、  
協奏交響曲K364]…Pan-V I C28043 (虎盤) ●ポ  
ベスコ(vn) ジャンティ(p) [第34, 40番]…Ph-30  
P C16 ●シェリング(vn)ヘブラー(p) [第24, 42番]  
…Ph-X8629 ●グリュミオー(vn) ハスキル(p) [第  
25, 32, 34番]…Ph-F G5045



# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

## ヴァイオリン・ソナタ第34番変ロ長調

Violin Sonata No.34 in B<sup>b</sup>, K.378

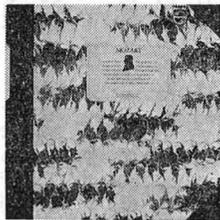
父の仕事の関係で、筆者のまわりにはまだ物心もつかないごく小さなところから、ちっけな蓄音器から流れてくるいわゆるクラシック音楽があった。進んできいたわけではもちろんないが、否応なしに耳に入ってくる毎日だった。人間とは妙なもので、ほんやりとではあるけれども、いまだにその三十年あまりも前のことを思い出すことがある。モーツァルトのこの変ロ長調のヴァイオリン・ソナタは、バッハのブランデンブルク協奏曲第五番などとともに、そんな遠い遠い耳の記憶の底にいまもこれははつきりのこっているなつかしい調べのひとつである。繰り返しいたあれは一体、誰の演奏だったのだろう。ともあれ、実際この曲の冒頭、ヴァイオリンの伴奏をバックにピアノが奏でる第一主題などは本当にまたとない名旋律で、おぼつかない子供心に鮮やかな印象をのこしてもいっこうに不思議ではない。

このソナタの作曲年代には諸説があるが、マンハイム、パリ旅行から帰って間もない一七七九年の初めというのが有力である。ザルトブルクというところはこの曲種にはあまり用のない土地柄だったとみえて、一曲完全にここで書かれたヴァイオリン・ソナタはこれだけしかない。そ

して中身を見れば、それはしゃれた、こまやかな、あるいはなまめかしい衣装を着こなしたギャラント様式の典型であり、つまりパリの趣味の思い出なのである。

この曲でもシェリングとヘブラーの演奏はすばらしい。ヘブラーの抑制のきいた柔らかい語り口と、シェリングのびんと張った緊張感が微妙な調和を醸しており、趣味的な安易さを突き放した高い気品をそこに漂わせている。グリュミオー盤のハスキルのピアノもすこぶる美しい。このピアノリストは鍵盤の上ではあまり多くを語ろうとはしない。しかし作曲者の内心に深く耳を傾ける点ではずばぬけており、それが平静な語り方からおのずとにじみ出てくるところに彼女の非凡な感受性をみる思いがする。それに対してグリュミオーのヴァイオリンはまったくヴィルトゥオーゾ的で、いかにも腰が軽い。ポベスコとジャンティの演奏は、ピアノにやや微温的なところはあるもののヴァイオリンは伸びのよい音で美しく歌っている。ティボーとロンのレコードは雑音の中からかろうじて音楽がきこえるといった有様だが、この恐ろしく個性的なヴァイオリンは、現代の聴衆にはおそらく稀にみる驚きを提供するはずだ。

◀シェリング(vn)ヘブラー(p)〔第24、25、28、35、40番〕…Ph-PC5643〜4 ●グリュミオー(vn)ハスキル(p)〔第25、28、32番〕…Ph-FG5045 ●ポベスコ(vn)ジャンティ(p)〔第28、40番〕…Ph-30PC16 ●ティボー(vn)ロン(p)〔第42番〕…ⓐA-GR70101



# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756—1791)

## ヴァイオリン・ソナタ第40番変ロ長調

Violin Sonata No.40 in B<sup>♭</sup>, K.454

ウィーン時代三年目の一七八四年の作曲。いまや全ヨーロッパの音楽の美点はどことくこの作曲家の手中にあり、それは完全に溶解しても影響という形では彼の作品の表には出ない。すべては完全にモーツァルトの個性である。この曲ではヴァイオリンの重要性がぐんと増して、ほぼ二重奏としての姿を整えてきており、まとめ方のしつかりしている。とても過去のヴァイオリン・ソナタの一般的なあり方を抜け出ている。つまり遊戯性の強かったこのジャンルもシリアスな器楽曲の様相を帯びてくるのである。このソナタは、イタリヤの女流ヴァイオリン奏者レジーナ・ストリナツキがウィーンを訪問し、モーツァルトと共演することになったことから急ぎ作曲された。時間の余裕がなかったために二人がリハーサルなしでいきなり初演したというエピソードがあるが、それはどうやら事実であつたらしい。

なお本書では扱わないが、モーツァルトはこのあとさらに三曲のヴァイオリン・ソナタを作曲した。そのうち変ホ長調K四八一、さらにそれにもましてヘドン・ジョヴァンニ前夜のイ長調K五二六は非常に傑作である。

さて、変ロ長調K四五四はモーツァルトのヴァイオリン・ソナタの中でも以前からとくにレコードに恵まれていた作品のひとつであるが、新しいカタログをみると意外にこれといった決定的な名盤は見当たらない。シェリングとヘブラーの演奏はなるほど相変わらず美しい。しかしここではヘブラーのピアノがいくぶんのびやかさを欠くように思われ、それだけシェリングの強い表出力がひとり歩きをしている。グリュミオ―とハスキル(この曲はモノラル録音)はしたたるような美しさが印象的だが、ほかの曲にくらべるとこのハスキルは、音楽の含蓄の点でやや物足りないところがある。ハーラとデュオを組んだ石川静はなかなかの健闘で、そののびのびした歌いぶりと澄明な美感が非凡だ。そのほかズスケとオルベルツ、ポベスコとジャンティのレコードもあり、どちらもヴァイオリンがヴェテランのうまみをみせている。なおこの曲にはかつて、ダヴィド・オイストラフとバドゥラスコダ、さらにバリリとバドゥラスコダの共演レコードがあり、とくに前者はすばらしく格調の高い無類の名演奏であつたが、現在のところこれは廃盤になっており、残念なことには復活の見込みは薄いようである。

◀シェリング(vn)ヘブラー(p) [第41番]…Ph-X86  
31 ●グリュミオ―(vn)ハスキル(p) [第42番]…④  
Ph-13PC246 ●石川静(vn)ハーラ(p) [第25, 32  
番]…Sup-OX1204(廃盤) ●ズスケ(vn)オルベル  
ツ [第42番]…Eu-K17C9322(廃盤) ●ポベスコ(v  
n)ジャンティ(p) [第34, 28番]…Ph-30PC16 ●オ  
イストラフ(vn)バドゥラ=スコダ(p) [第30, 33, 41  
番]…C-(廃盤) ●バリリ(vn)バドゥラ=スコダ(p)  
[第35番]…④ W-G10524



# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

## ピアノ四重奏曲第1番ト短調

Piano Quartet No.1 in g, K.478

あまり一般的ではないが「調特性」という言葉がある。たとえば、変ホ長調は硬くエネルギーッシュである（ヘロイカ交響曲、ピアノ協奏曲（皇帝）とか、ヘ長調は素朴で自然な感じがする（田園交響曲）といった具合に、調性はそれぞれ固有の性格を持っているとする考え方である。読者の中には、よくよく考えればその説はどこかうさんくさい、と首をかしげる向きも少なくないだろうし、筆者もこれにはあまり深入りする気になれないひとりだが、それでもいわゆる「モーツァルトのト短調」だけはやはり別格の扱いをしないわけにはゆくまい。切札はもちろん交響曲第四〇番。それを満たす恐ろしく深い情調、ときに「悲愴美」などというあまり耳慣れない言葉で言い表わされるあの痛々しいまでの美しさは、たしかにはかには類をみないものである。

このピアノ四重奏曲第一番は、別掲の弦楽五重奏曲K五一六とともに数少ないモーツァルトのト短調作品のひとつで、第一楽章にはその独特の気分が鮮やかに刻印されており、そのためもう一曲の変ホ長調のピアノ四重奏曲にくらべると格段に有名になっている。もともと、終楽章はト短調ではなくト長調で書かれていて必ずしも深刻な気分が曲全体を覆っ

ているわけではなく、また重奏の書法にしてもつばらピアノが主役のつまり協奏曲のスタイルに近いもので、その意味では交響曲や五重奏曲にくらべるとだいたいぶ当時の一般聴衆の好みを意識したあとがある。モーツァルト二十九歳の一七八五年、ト短調交響曲の三年前に作曲された。

新しいレコードがたくさん出ているが、その中ではクリーンとアマデウス弦楽四重奏団員の演奏がすぐれている。線が太く、老熟した音楽を奏でる弦部に対して、ピアノの語り口はあくまで淡々としてさりげなく、響きも清澄であるが、それらが微妙に調和して味のあるアンサンブルを形造っているのがききどころだ。どちらも自分なりのやり方でモーツァルト様式を適格につかみとっている。ヘブラー盤も名手を揃えてさすがに美しい。ヘブラーのピアノは協奏曲的な華麗な舞台上に立つことをむしろ避けるようにして、室内楽らしい気分を担っているようであり、そのような表現を共演のベルリン・フィルの弦たちが優しく受けとめているような温かく柔らかい演奏である。ルービンシュタインのレコードは巨匠がのこした貴重な室内楽録音のひとつだが、弦がやや弱いのが惜しい。



◀クリーン (p) アマデウスSQ団員【第2番】…G-28MG0240 ●ヘブラー(p)シュヴァルベ(vn)カッポーネ(va)ボルヴィツキー(vc)【第2番】…Ph-13PC 162 ●ルービンシュタイン(p)ガルネリSQ団員【第2番】…R-RVC2194 (魔盤)

## ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756—1791)

### フルート四重奏曲(全4曲)

Quartet for Flute & Strings, K.285, 285a, 285b, 298

モーツァルトのフルート四重奏曲は四曲のこざれており、少なくともそのうちの三曲は一七七七年から翌年にかけて、滞在中のマンハイムで作曲された。ある金持のオランダ人の注文があったためだが、当時これといった仕事もなくふところ具合を気にし始めていたモーツァルトはふたつ返事でこれを引受けてはみたものの、どうやら彼にとつてひどく気乗りのしない仕事だったらしく、父親への手紙の中でその強い嫌悪の気持をぶちまけていることはよく知られている。そして現に、依頼後ただちに作曲された最初のニ長調の曲が三楽章の立派なたたずまいを持ち、楽想も豊かでこの曲種にふさわしい優雅な美しさをいっばいに湛えた名作であるのに対して、いやいや書いた次の二曲はともに二楽章しかなく、また音楽的にもどことなく靈感に乏しいという風に、このジャンルに対する作曲者の興味は最初の一曲だけで急速に冷めてしまったように見える。それはしかし、父親への手紙の文面を引き合いに出してよくいわれるように、モーツァルトがフルートという楽器を毛嫌いしていたからでは必ずしもなく、この種の気楽な娯楽音楽にはしよせん限界があったて、やがては時代遅れのものになってしまいうであろうことを彼がそれと

なく予感したからではなかったろうか。いずれにせよモーツァルトのフルート四重奏曲のひとつの魅力は、いわば滅びゆくものの美しさであると言えよう。なお最後の一曲は、最近ではずっと遅れて一七八六～七年ごろにウィーンで書かれたとする説が定着しつつある。

四曲を一枚に収めたレコードでは、ランバル、スターン、シュナイダー、ローズによるものが豪華だ。いささか牛刀をもって鶏を割く感がなきにしもあらずだが、達者な技術を持つ大型演奏家たちが、互いの音楽性と腕前の調和を心から楽しんでいっている風情があり、その意味では一夕の楽しい内輪の室内楽に同席するような気分できられる。名手ツェラーがフルートを吹くベルリン・フィルハーモニー・ゾリステン盤には、もう少しばかり典麗優美な気分がほしい気がする。しかしこれもうまいことは恐ろしくうまい。レコードはまだたくさんあるが、演奏はおしなべて

一長一短だ。ニ長調とイ長調(第四番)の二曲だけでよければ、トリップとウィーン室内合奏団によるまぎれもない名演がある。なお、クイケンらによる録音は古楽器を使用したもので、どこか細かい一風変わった美しさを持っている。



◀ランバル(fl)スターン(vn)シュナイダー(va)ローズ(vc)[全4曲]…CS-20AC1596●ツェラー(fl)ベルリン・フィル・ゾリステン[全4曲]…G-20MG0391●B.クイケン(fl)マイアー(vn)グラフ(va)マンダルカ(vc)[全4曲]…HM-ULS3237●トリップ(fl)ウィーン室内合奏団(第1番と弦楽四重奏曲第14番)…Tr-PA5034(魔盤)●同[第4番と弦楽四重奏曲第19番]…Tr-PA5033(魔盤)

## ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

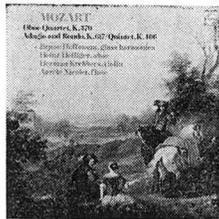
Wolfgang Amadeus Mozart (1756–1791)

### オーボエ四重奏曲へ長調

Quartet for Oboe & Strings in F, K.370

モーツァルトのオーボエ四重奏曲は彼がザルツブルク大司教と主従の縁を切る少し前の一七八一年の初めに、オペラヘイドメネオの上演のために滞在していたミュンヘンで作曲された。四年ばかり前にマンハイムで知り合って交友を結び、このときミュンヘンで再会したオーボエの名手フリートリヒ・ラムのために筆を執ったもので、そのすぐれたテクニックと音楽性が念頭に置かれているのは言うまでもない。ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの弦楽三重奏にオーボエを加えた四重奏曲は、こんにち一般にきかれる音楽作品の中にはほとんどといってよいほど例がなく、モーツァルトもむろんこれ一曲しかのこしていないが、管一本を含む室内楽曲としてはフルート四重奏曲たちをむしろ凌ぎ、あのクラリッソト五重奏曲にさえ迫るかという不朽の傑作である。とりわけオーボエの独特の響きをすこぶる効果的に生かしている点で、これまた楽器の音色に対するモーツァルトの天才的な心の反応をあますところなく示すものと言えよう。モーツァルトのこの種の作品の通例としてオーボエがあくまでも主役で、この楽器がかなり協奏的に扱われており、技術的には相当に高度なものが要求される。

オーボエ奏者なら誰しも一度は手がけてみたい作品だけにレコードは多いが、その中でも断然光るのはホリガーらによる一九七七年の吹き込みである。水際立ったメカニック、鋭敏な感受性、ありあまるほどの表現力、そして全曲の美しく整った造型など、これはどこからみても超一流のオーボエであり、作曲もよくすることの鬼才の並み外れて豊かな音楽性をそこにかがいがい知ることができる。弦はクレバース以下とくに著名な人たちではないが、彼らの演奏もまったく申し分ない。次にローター・コッホのオーボエによるものが二種類ある。まず一九六五年録音のペルリン・フィルハーモニー・ゾリステン盤は音がすばらしく美しく、オーボエの技巧も弦のアンサンブルも驚くほどうまい。ただそこには、演奏者たちがこの可憐な作品の中に入り込んで演奏しているというより、作品の上に立って自分たちの技術を楽しんでいるという趣がなくもない。それに対してちょうど十年あとにレコーディングされたアマデウス四重奏団員との共演盤では、気持がよほどモーツァルトに寄り添っているという点でいっそう心を惹かれるものがある。これ以外にはとくに強く推薦したい現役盤は意外にもない。



◀ホリガー(ob)クレバース(vn)シャウテン(va)デクルース(vc) [アダー・ジョーとロンド K617, ob五重奏曲 K406]…Ph-X7824 ●コッホ(ob)ペルリン・フィルハーモニー・ゾリステン [cl 五重奏曲]…G-20 MG0348 ●コッホ(ob)アマデウスSQ団員 [cl 五重奏曲]…G-MG1045

# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756—1791)

## 弦楽三重奏のためのディヴェルティメント

Divertiment for String Trio in E<sup>b</sup>, K.563

編曲作品あるいは断片の形でこの未完作品を別にすれば、モーツァルトがヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの弦楽三重奏のために書いた曲はこれ一曲しかない。作曲は一七八八年の秋、つまり最後の三つの交響曲の少しあとに行なわれた。モーツァルトが手慣れない弦楽三重奏の筆を執ったのは、フライマウレライ(フリーメーソン)の盟主ミヒャエル・プフェルベルクの注文があったためとみられる。この金持の商人は貧窮のモーツァルトにとって大切な金づるの一人であった。

この曲がディヴェルティメント(作曲者自身の命名)である理由は、通常のその典型的な形であるメヌエット楽章二つを含む全六楽章の構成を持つからであるが、音楽内容は旧式の娯楽音楽の範疇からもはや完全に抜け出ており、三大交響曲の持つ高さとはほとんど同等のところまで達している。従ってこの場合の「ディヴェルティメント」の形と名称とは、すでに過ぎ去ったものの余影にすぎない。とくに第一、第六の両楽章の堅固なまとまりと、第二楽章アダージョの感情の深さは、モーツァルトの室内楽曲でも最も見事なものに属し、実演ではあまり大きく機会がなく、目立ちにくい作品であるが、きわめて重要な地位を占めるものである。

ある。

この曲にはしかしレコードも決して多くない。それには常設の「弦楽三重奏団」がごく少ないという事情もあるが、そんな中で古くから定評のあったバスキエ三重奏団の演奏はさすがにセンスの良いものである。すでに盛時を過ぎたかと思われる多少の技術的な粗さと、音質のいつくしみ方の不足とがみられるが、弦楽三重奏のこつを知り尽くした達人である上、全体を貫く脱俗的な精神の透明感が、この作品の高い気品を実によく表現している。新しいところではウィーン・ムジークフェライン弦楽四重奏団員によるレコードがすばらしい。ウィーン風のしなやかなアンサンブルやしっとりとした音色美を奏でながらも、懐古的な気分に溺れることなく、むしろ時代の先端をゆく繊細で切れ味鋭い表現が、この曲の引き締まった美感を浮き彫りにしている。もうひとつ、スターン、ゾーカーマン、ローズの大型トリオがスケール豊かな演奏を吹き込んでいる。はっきりした口調で、外に向かって積極的に物を言うタイプ-heavyの重奏で、変奏曲楽章のふくらみなどはたいそうなものであるが、しかし反面、音楽がときとして饒舌な感じを与えることがなくもない。



◀バスキエ 三重奏団…E-REL1020 ●ウィーン・ムジークフェラインSQ団員 (vnとvaのための二重奏曲第2番)…L-L28C1140 ●スターン (vn) ズーカーマン(va)ローズ(vc)…CS-23AC640

# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

## 弦楽四重奏曲第15番ニ短調

String Quartet No.15 in d, K.421

モーツァルトの弦楽四重奏曲は十四歳のときにスタートして、ほかの分野と同様にさまざまな音楽の美点に影響され刺激されながら自己の様式を確立していった。初期の作品にはハイドンの初期の曲と同じく「デイヴェルティメント」の名を冠されたものもあり、やがてほかのジャンルとのつながりを振り切って、最も純粋な室内楽形態へと進んでゆく。ハイドンの先駆的な仕事はモーツァルトの眼に映り始めたのは一七七三年ごろで、彼はそのときからハイドンを急追し始め、一七八一年、ハイドンがいわゆる「ロシヤ四重奏曲」を発表すると、その翌年から二年余りの間に六曲の四重奏曲を書きためて、これらをハイドンに献呈した。それが「ハイドン四重奏曲」と呼ばれているグループで、モーツァルトの最も美しい弦楽四重奏曲はここに集中している。これらの四重奏曲をきくとき、ハイドンの「ロシヤ四重奏曲」を併せきけば興味は倍加するであろう。モーツァルトが真にすぐれたものを自分の外に見出したとき、それを吸収することにはいささかもためらいがなかったこと、そして他の美点を吸収することは、そのままの場合まちがいなく自分の個性の完成を意味していたことを、これほど明確に示した例はほかにない

からである。

六曲はそれぞれはっきりした性格を持ち、その点でもモーツァルトはハイドンをすでに凌駕した。このニ短調K四二一はグループ唯一の短調作品で、全曲が暗い気分になり込められており、その色あいの深さは無類である。

スメタナ弦楽四重奏団がこの曲を三たびレコーディングしており、どの演奏もすばらしい。そのうち一九八二年の最新盤は、この団体が到達した四重奏のひとつの極致を示すものと言えようが、いかにも秘術を尽くしたという感じのその細密な語り口に対して、ちょうど十年前の日本録音にはどこにもこだわりのないのびとした気分があり、技巧も計算も深く音楽の背後に隠されていっそう心惹かれるものがある。アンサンブルの精妙なことではアルバン・ベルク弦楽四重奏団も一歩も譲らない。終楽章の陰影の豊かさはとくに非凡である。ただ、表現に部分的ながら技巧的な臭いがのこっているのが少々気になるところだ。そのほか、一貫して内省的な姿勢を貫いたアマデウス四重奏団、ことさら暗さを強調しないイタリア四重奏団の太くどっしりした演奏もよい。



◀スメタナSQ'82年録音〔第17番〕…De-OS7168  
同'72年録音〔第17番〕…De-OZ7067●アルバン・ベルクSQ〔第14番〕…T-K17C8318●アマデウスSQ〔第14番〕…G-20MG0380●イタリアSQ〔第14～19番(ハイドン・セット)〕…Ph-15PC110～12(鹿盤)

# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

## 弦楽四重奏曲第17番変口長調《狩》

String Quartet No.17 in B<sup>b</sup> "Jagd", K.458

モーツァルトの〈ハイドン四重奏曲〉は一七八二年の終わりにその第一作が作曲され、一七八五年一月に全六曲が出揃っている。完成の直後、モーツァルトは二度にわたってハイドンを自宅に招き、これらの作品をきいてもらったあと、秋にイタリア語による献呈の辞を添えて出版した。ハイドンへの並々ならざる敬意、さらには控え目な自負と作品への愛着を素直に披瀝したその献辞は、たとえ出版社アルタリアの示唆に従って掲げられたものであつたとしても、モーツァルトが文字で書きのこした最も美しい言葉のひとつに数えられよう。一方のハイドンもモーツァルト家における試演をきいたあと、作曲者の父に向かって「あなたの御子息は私の知る限り最も偉大な作曲家です」と感嘆した。

変口長調K四五八は六曲中四番目に書かれたもので、一七八四年十一月九日の日付を持っている。〈狩〉という俗称はもちろんモーツァルト自身によるものではなく、第一楽章の主題が狩の角笛を思わせるところからつけられた。明快な表現の中にもところ天才の輝きが顔を出す傑作で、ことに第一楽章の名旋律と、そのもたらす晴朗無類の気分によつて、このグループの中でもおそらく最も人気の高い一曲になつてい

る。

この曲にもスメタナ弦楽四重奏団の一九七二年の日本吹き込みと、その十年後のプラハにおける最新録音盤があり、どちらもそれこそ寸分の隙もない、しかも弾力に豊かな見事なアンサンブルが繰り広げられていく。試みに四つの楽器の音色が絶妙な調和をみせる第三楽章をききくらべてみると新録音の方にやや淡々とした味わいがあり、さらに終楽章もいっそうの軽みを持っているが、しかし旧盤の方もそのなめらかな運びが美しく、どちらか一方を捨てるといふわけにはゆかない。アルバン・ベルク弦楽四重奏団も申し分ない。いくぶん線の細いところがなくはないが、表現にすばらしい切れ味がある。ここぞとばかりにじつくりと歌い込んだ第三楽章は中でもききどころだ。対照的に柔らかな気分を持つのがウィーン弦楽四重奏団の演奏で、ここにはほかのクワルテットにながら独自の魅力がある。響きは深く、歌い回しも独特で、急ぎ足になりがちな終楽章をすこぶる美しくきかせているあたりがユニークだ。ほかにアマデウス弦楽四重奏団のたくましい表現、あるいはイタリア弦楽四重奏団のいかにも肉付きのよい演奏もそれぞれ悪くない。



◀スメタナSQ'82年録音(第15番)…De-OS7168●  
同'72年録音(第15番)…De-OX7008●アルバン・  
ベルクSQ(第16番)…T-K17C8319●ウィーンS  
Q(第16番)…R-RCL8228(廃盤)●アマデウス  
SQ〔ハイドン/第77番〕G-20MG0329

# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

## 弦楽四重奏曲第19番ハ長調《不協和音》

String Quartet No.19 in C "Dissonanzen", K.465

ハイドン四重奏曲の最後の一曲で、一七八五年一月十四日の完成である。前作のイ長調K四六四が出来上がったのはそのわずか四日前、そして《狩》のところで述べたハイドンを自宅に招いての一回目の試演は翌日の一月十五日であるから、これはいわば締切り間際の仕事であった。しかし作曲を急ぎすぎた形跡はこの曲のどこにもない。それどころかモーツァルトの弦楽四重奏曲のこれはひとつの頂点である。

《不協和音》の愛称は第一章冒頭のアダージョの序奏に由来する。実際その和声法たるや、しばしば誤りではないかと指摘され、第三者の手で現実に修正されたこともあるほど型破りなもので、四つの楽器の美しい響き合いをこそ身上とする弦楽四重奏にこのような不協和な音を持ち込むのは、当時としてはまさに斬新この上ない試みであつたらう。恐るべき緊張を秘めたこの序奏部の役割はしかし重要である。

なお、モーツァルトはこのあとさらに四曲の弦楽四重奏曲を書いたが、それらはハイドン四重奏曲のような多様性、内容のふくらみもはや持ち得なかつた。そこにはむしろ形の上での簡潔さや楽想の透明化が目立ち、交響曲終了以後の作品を特色づける最後の様式があらわ

れてくる。

《不協和音》はさすがにレコードが多いが、ここでもスメタナ弦楽四重奏団が一頭地を抜く存在である。強固な造型と完璧な重奏の中で、音楽がのびのびと大きく、はちきれんばかりに充実しており、とくに第二章のただならぬ格調や、メヌエット中間部の訴えの強さなどはこの団体ならではのものだ。これは一九七五年にチェコの教会で吹き込まれている。アマデウス弦楽四重奏団の演奏は濃密なロマンス的情感を深く内に秘めた独自のもの。明暗の濃淡を深く掘り下げるその熟したスタイルは、決してモーツァルト様式を突き抜けて恣意をまる出しにするものではなく、この曲のように音楽的内容の濃い作品の場合、かえって内面の痛切な声をきかせることになる。プラハ弦楽四重奏団もこの辺で挙げておいた方がよいだろう。柔らかな語り口とそこに湛えられた高い気品はやはり一級品である。アルバン・ベルク弦楽四重奏団はここでもまた高い技巧を生かききって、すべてをすっきりとまとめている。同じウィーンの団体でもムジークフェライン弦楽四重奏団の演奏は格段にダイナミックだ。しかし第一楽章は少し元気がよすぎる気がする。



◀スメタナSQ(第18番)…De-OS7170 ●アマデウスSQ【第14~23番】…G-MG8648~52 ●プラハSQ【第18番】…Sup-OS7058(虎盤) ●アルバン・ベルクSQ【第18番】…T-K17C8320 ●ウィーン・ムジークフェラインSQ(第18番)…L-K18C9225

# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

## 弦楽五重奏曲第3番ハ長調

String Quintet No.3 in C, K.515

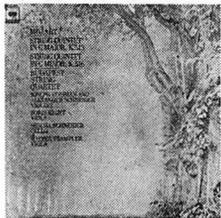
名作ひしめくモーツァルトの室内楽作品の中にあつて弦楽五重奏曲はどちらかと言えば目立ちにくい存在ではあるが、その重要性がきわめて高いことは疑う余地がない。ことに「ハイドン四重奏曲」の完成後は、作曲者の興味は五重奏曲に大きく傾いていったようにみえる。作品の数は断片のたぐいを除いて六曲（編曲作品一曲を含む）、いずれも同じころイタリアのボツケリーニが好んで手がけた弦楽四重奏プラス第二チェロの五重奏ではなく、ほぼ一世紀のちにブラームスがその流儀で二曲の名作を書くヴィオラ二挺の楽器編成である。

ハ長調K五一一五は次のト短調とともにこの分野の二大高峰で、翌一七八八年に作曲される同じ調性の「ジュピター交響曲」にも比肩すべき芸術性と風格とを備えている。中でも深い叙情を湛えたアンダンテの美しさや、終楽章の構成と内容の見事さは類をみない。なお自筆譜ではメヌエットが第二楽章、アンダンテが第三楽章となっているが、本来の配列はその逆であつたとみる説があり、レコードもスメタナ弦楽四重奏団盤のようにメヌエットを第三楽章として演奏しているものがある。

ブダペスト弦楽四重奏団がトランプラーの第二ヴィオラを加えてモ

ツァルトの弦楽五重奏曲の六曲すべてを吹き込んでいるが、これらはベートヴェンの弦楽四重奏曲全集などともに、彼らがこした最もすぐれたレコードのひとつに数えなければならぬ。このハ長調の曲は、高朗とした気分ががちり組み上がる構成の中に広々と広がっている様が類なく壮大である。一九六六年、すなわちこの団体の最後の録音で、音質も申し分ない。スメタナ弦楽四重奏団とスーク（第一ヴィオラ）もこれに勝るとも劣らない稀有の名演奏だ。すべての線の均質性と明確さ、デイナーミクのすがすがしき、テンポの堂々たる自然さ、そしてそれらの総体としてのほとんど寄りつきがたいまでの美しさの中に、音楽美の究極をひたすら求めようとする孤高の精神が充滿している。重奏のうまみも驚異的で、たとえばアンダンテ楽章におけるノヴァークとスークの対話などはまさしく絶妙というほかない。モノラル録音だがバリリ弦楽四重奏団とヒューブナーの演奏も記憶される価値がある。緊張りも、強い主張もいっさいあらわにしないのだが、音楽はどこまでも柔らかく澄み、高貴な趣味に覆われて、あたかも青空の中にそびえる神殿の姿を思わせるものがある。

◀ブダペストSQ, トランプラー(va) [第4番]...CS  
-20AC1564 ●スメタナSQ, スーク(va) [第4番]  
...De-O S7171 ●バリリSQ, ヒューブナー(va)...  
⑩W-V IC5377



## ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

### 弦楽五重奏曲第4番ト短調

String Quintet No.4 in g, K.516

このト短調の弦楽五重奏曲は、前項のハ長調のあとを追うようにしてそのひと月足らずのち、一七八七年五月十六日に誕生した。つまりこれは姉妹作品であるわけだが、性格はきわめて対照的であり、誰しもが同じ調性の最後の二つの交響曲、すなわち第四十番ト短調と第四十一番ハ長調(ヘジュピター)との強い対照と比較しないわけにはゆかない。いつ堰を切って溢れ出るかわからない、解決しがたい憂鬱が、室内楽では交響曲とは逆の順序で、清朗な整頓のあとにやってきたのである。このような憂鬱はモーツァルトという人間の本質的なものであった。いやむしろ天才には一般的に言ってそういう明暗の感情の深い対照はよくみられるところである。モーツァルトが深淵のような悲しみを抱いていたことは、彼の人間としての生活や、恐るべき感受性の敏感さからすれば当然のことでも少しも驚くには当たらない。ただすごいのは、モーツァルトの旋律発明力の天分が、その深淵をまったく特異な色で、恐しくわれわれにみせてくれることだ。冒頭楽章の第一主題はその点でことに有名な楽想である。終楽章のロンドはト長調であるが、モーツァルトはそれにも長く暗いト短調の序奏をつけた。

この曲にもスメタナ弦楽四重奏団とスークの第一ヴィオラによる比類ない名盤がある。まったく同じメンバーが一九八二年秋の日本公演でもこれを演奏したが、作曲者の精神に深く同化したその非の打ちどころのない美しさは圧巻だった。一九七六年にブラハで吹き込まれたこのレコードに針をおろすと、あのときの感動がまざまざと心に蘇る。一方ブダペスト弦楽四重奏団の録音も、それこそ一瞬の弛緩もなく、張りつめた室内楽的緊張に貫かれたこれも名演奏だ。精緻な音の織物の中にぎっしりと暗さを封じこめて、そのひと滴も外にはもらすまいとする激しい集中性は驚くべきものである。トランプラーの第二ヴィオラも、まるでこの常設四重奏団の一員であるかのように音質まで同化しており、アンサンブルには一分の隙もない。音質と言えば、この団体は必ずしく当今もてはやされるような上塗り薬でつやを出したようなそれではなく、早く言えばぶっきらぼうにきこえなくもない強い音性であるが、その音の質は、間接手段をぬきに直ちに音楽の核心を衝く彼らのスタイルに必然のものなのである。よいレコードはほかにあるが、以上二点の前ではいささか影が薄い。



◀スメタナS.Q. スーク(va) [第3番]…De-OS7171  
●ブダペストS.Q. トランプラー(va) [第3番]…  
CS-20AC1564

# ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart(1756-1791)

## クラリネット五重奏曲イ長調

Quintet for Clarinet & Strings in A, K.581

モーツァルト三十三歳の一七八九年秋の作曲。前年に交響曲の創作はすべて終了し、作曲者はもうそろそろ晩年である。この年リヒノフスキー公爵に誘われて彼はベルリンに旅行したが、見込みは外れて家計はいっこうに潤わない。病気がちの妻、さらに自身の健康の衰えも重なって、むしろモーツァルトの生活はどん底である。

そんな苦渋のさなかに生まれたこの五重奏曲は、しかしモーツァルトの室内楽曲の中でも疑いなく最も美しいもののひとつである。楽想の優麗さ、形式の整頓、クラリネットの音色の使い方の卓抜なこと、いろいろ分析的には言えようが、この曲の芸術的な高さは、しょせんそのような低次元の説明では及ぶものではない。ただ、クラリネットを弦四声に加えた特異な編成により、感覚的な訴えをそのまま内面の訴えに完全に転化し、あるいは同一化しているところに、稀有の音楽人のすばらしさがあるとは言えよう。

名実相伴う傑作であるだけにレコードは室内楽曲としては異例に豊富で、しかもその中に名盤が少なくない。比較的新しいものからみてゆくと、まず目につくのはウィーン・フィルの首席クラリネット奏者プリン

ツとウィーン室内合奏団の演奏だ。一九七九年およびその十年前の新旧二種類の録音があるが、いずれもこの曲の美しさをあますところなく表わし出すことに成功した極上の演奏で、持前の高い技術と美音をしかし少しも誇ることなく、作品にびったりと心を寄せ、合わせもののほのぼのとした気分を漂わせながらも要所は見事に押さえている。音楽の成熟度ではそれにまだ遠く及ばないにしても、話題性十分のレコードに、闊秀クラリネット奏者ザビーネ・マイヤーの最新盤がある。ベルリン・フィル入団か否かをめぐって、御大カラヤンを巻き込んだのひと騒動を起した噂のヒロインであるが、純粹に音楽的にみて、これは掛け値なしに有望新人登場の感が深い。一方少し前のものでは、ランスロとバルヒェット弦楽四重奏団の繊細で気品の高い演奏がすばらしいが、さらに録音年代を溯ると、ウラッハとウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団の思いきりしみじみとした演奏（モノラル録音）にたどり着く。前時代的な演奏スタイルの見本のようなものとして、いまではやや回顧的ななきき方になるのは否めないところだが、やはりそこに真実な感じ方がくつきり投影されているということ、心を打つものがある。



◀プリンツ(cl)ウィーン室内合奏団〔ベートーヴェン/p三重奏曲第4番〕…De-OZ7171 ●同(ディヴェルティメント第1番) Tr-PA5032(鹿盤) ●マイヤー(cl)フィルハーモニア・クッラテット・ベルリン〔伝ウエーバー/序奏・主題・変奏〕…De-O S7190 ●ランスロ(cl)バルヒェット S Q〔ブラームス/cl五重奏曲〕…E-RE L3146 ●ウラッハ(cl)ウィーン・コンツェルトハウス S Q…●W-V I C5360

## ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

### ヴァイオリン・ソナタ第5番へ長調《春》

Violin Sonata No.5 in F "Frühling", Op.24

「旋律発明家」としての才能に関する限りでは、さしものベートーヴェンもとくに頭抜けた天分には恵まれていなかったかも知れない。だがみくびるのは禁物だ。書こうと思えば彼だって、およそこの堅物らしからぬ愛らしく優しい、人の心をとろけさせるようなチャーミングなメロディを書くことが実はできたのである。その動かぬ証拠がヴァイオリン・ソナタへ春だ。とりわけ曲頭にいきなり出てくる第一主題は、ヴァイオリンのために書かれたあらゆる楽想の中でも最も美しく流麗な、耳に快く響く名旋律のひとつだろう。さらに終楽章の rond 主題をはじめほかにも印象的なメロディが少なくなく、その旋律美の豊かさはベートーヴェンの作品の中でも群を抜いている。

このソナタは主として一八〇〇年に作曲され、翌年に完成したものとみられている。ごく小規模ながらも独立したスケルツォを置くことによつて、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタとしては初めての四楽章構成となっていることと、モーツァルトの場合と同じく初めは「ヴァイオリン付きのピアノ・ソナタ」として出発したこの曲種が、この辺までくるとだいたいヴァイオリンの比重を増してきている点が目につく。なお

へ春」というのは俗称にすぎないが、明るい幸福感とうらかな気分に満ちたこの曲にふさわしいところから、現在では広く一般化している。ただし日本人がわざわざその英語名を借りて呼ぶのは、考えてみればずいぶん滑稽である。

さてレコードは夥しく出ているが、まずスークとパネンカの優麗典雅な演奏を挙げておこう。すべてにバランスのとれたすばらしく美しいスークのヴァイオリンを、ピアノの安定した技巧と表現力とがしつかりと支えており、どの楽章も本当に澄んだ気品高い叙情でいっぱいだ。そのどちらとも言えばロマン的な感受性に対して、オイストラフとオボーリンの奏でる古典的音楽美もまた筆舌に尽くしがたい。きりりと引き締まった厳しく端正な造型の中に、高貴な人間精神の輝きがみえる。以上の二大名演に次ぐのはシェリングとヘブラーによる比較的新しい録音だろう。いちだんと円熟味をましたシェリングのヴァイオリンと、例によって知的で温かみのあるヘブラーのピアノがすこぶる親密な二重奏を繰り広げている。パールマンとアッシュケナージの演奏は豊麗なことでは一番だ。匂い立つような美感がある。



- ◀スーク(vn)パネンカ(p) [第9番]…Sup-OZ7145  
●オイストラフ(vn)オボーリン(p) [第9番]…Ph-FG5038 ●シェリング(vn)ヘブラー(p) [第9番]…Ph-27P C6 (廃盤) ●パールマン(vn)アッシュケナージ(p) [第9番]…L-L20C2005

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

## ヴァイオリン・ソナタ第9番イ長調〈クロイツェル〉

Violin Sonata No.9 in A "Kreutzer", Op.47

ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタを代表するこの名作はヘロイカ着手直前の一八〇三年春に完成された。ヘロイカへの大飛躍を目前に、彼の心はすでにあの大交響曲の精神に満たされていることをこのソナタは示している。もともと、終楽章は実は一八〇二年作の第六番イ長調のそれにするつもりであったものをここに転用しており、その意味では壮麗な中期の開幕ベルは前年に鳴っていたとも言えよう。このヘクロイツェルを作曲者は「ほとんど協奏曲のように、きわめて協奏的な様式で書かれた、ヴァイオリンのオブリガートを伴うピアノのためのソナタ」と呼んでいるが、実質的にはヴァイオリンの活躍はピアノのスタイルがここでついに確立されたのである。なおヘクロイツェルの通称は、周知のとおりこのソナタを捧げられたフランスの名ヴァイオリニストの名に由来する。

レコードはオISTRAフとオボーリンの演奏がこのコンピの録音の中でも際立つ立派なものである。やはり気概も少し違うようだ。まず音がすばらしい。両者とも全盛時の最も美しい音を握っていたときの録音

(一九六二年)で、はちきれんばかりの生命感とみずみずしさを湛えている。表現はどんなこまかいところにも意味の薄いとこをのこさず、徹底的に考えぬいたあげくの精細なものだが、すべては自然であって、いささかの人為の臭いものこさない。実はこのような、誰にも、絶えず弾かれ続けている作品では、どこかで曲者らしいひと仕事を織り込まぬことには、いっそうに自己主張がないようにみられる当今、このような正攻の姿勢で深められた芸術を提供すること自体きわめて困難なものだが、ひとたびそれが達成されたときには、周囲の相対的な小さい自己宣伝的演奏の群がほとんど素人の遊びのようにさえみえるものである。次にスークとパネンカ、そしてシェリングとヘブラーの演奏もたいそう格調の高いものだ。いずれもオISTRAフ盤よりもやや温かい感触があり、前者の第二楽章のいかにも室内楽的な風味や、後者の熱しきった重奏はともに独自のものである。かなり古いがティボーとホルトの華麗なロマンの演奏はいまなお十分生命を持つもので、ホルトのピアノ表現のニュアンスの多様さは、これまでそれに類するものさえきかれなかつた。ティボーの線の細い表現には名匠の興奮がみえる。



◀オISTRAフ(vn)オボーリン(p)〔第5番〕…Ph-F G5038 ●スーク(vn)パネンカ(p)〔第5番〕…Sup-OZ7145 ●シェリング(vn)ヘブラー(p)〔第5番〕…Ph-27P C6(魔盤) ●ティボー(vn)ホルト(p)〔「魔笛」による7つの変奏曲〕◎A-GR2051(魔盤)

## ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

### チェロ・ソナタ第3番イ長調

Cello Sonata No.3 in A, Op.69

ベートーヴェンのチェロ・ソナタの最初のグループは一七九六年に旅先のベルリンで作曲された作品五の二曲である。と言うことはこの曲種はヴァイオリン・ソナタに先んじて生まれた。にもかかわらず、当時大きく開発されていたチェロの表現力にベートーヴェンが早くから着目していたこと、そして彼自身の音楽性もまたこの楽器の語りうるところに積極的に寄り添ってゆくとうとしていることなどが、作品五の二曲には明瞭に表われており、同じく初期の作品でもヴァイオリン・ソナタよりみだいに彼本来の音楽になっている。

それから十二年を経た一八〇八年の夏、第五、第六両交響曲の間をぬうようにして、古今のチェロ・ソナタの中で王冠を戴くこのイ長調が完成された。チェロ好きの貴族に捧げられているが、おそらくまったく自発的に生み出されたもので、大作、名作を相次いで書いてゆくうちに蓄えられたチェロにふさわしい楽想が、ひとつの作品に凝集したものである。前の二曲と同じくこの曲にも緩徐楽章はなく、第三楽章の序奏がわずかにアダージョであるのだが、曲頭主題からチェロは十分に歌っており、この楽器固有の魅力は全曲いっばいに溢れている。二重奏とし

ての完成度はヴァイオリンのヘクロイツェルよりもさらに高い。音楽の持つ成熟度もまた同様である。

カザルスとシュルホフのレコードはSP時代、カザルス全盛期の録音で、ほかの四曲のソナタはその後ホルシヨフスキーと組んで、またさらにのちにゼルキンと組んでの全曲録音などもあるが、それらカザルスのベートーヴェン演奏記録すべてのうちで断然光を放つのがこのシュルホフとのイ長調である。深く、たくましく、高貴な気品に満ち、稀有の大芸術であり、シュルホフのピアノもその精神を浴びてすばらしく弾けている。同じチェリストでもゼルキンとの共演盤になると、残念ながら腕にだいたい疲れが出てくる。言いたいこと、強調したいことはよくわかる。しかし、われわれも、そしてゼルキンもそれを拝領しなければならぬ。超凡な技巧と強い個性をもってわたり合うロストロポーヴィチとリヒテルのデュオはさすがにスケールの大きなものである。これは一九六〇年代前半の吹き込みで、二人の大家にはまだ血気盛んなところがあるが、それでも合わせものの要諦はしっかり押さえてぬかりがない。若手ではヨーヨー・マの快演がある。

◀カザルス(vc)シュルホフ(p)〔第2番〕…①A-GR70069 ●カザルス(vc)ゼルキン(p)〔第4番、「マカベウスのユダ」による変奏曲〕…①CS-20AC1863 ●ロストロポーヴィチ(vc)リヒテル(p)〔第4番〕…Ph-X8584 ●ヨーヨー・マ(vc)アックス(p)〔第5番〕…CS-28AC1970



# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

## チェロ・ソナタ第4番ハ長調

Cello Sonata No.4 in C, Op.102-1

ベートーヴェンの五曲のチェロ・ソナタは三つのグループに分けて世に出されたが、その作品番号をみても明らかのように、各グループの作曲時期は広く分散している。前掲ハ長調の大ソナタの完成がすでに述べたように作品五の処女作の十二年後、そして続く作品一〇二の二曲が誕生するのはそれからさらに七年ののち、ヴァイオリン・ソナタの創作がすべて終えられたあとの一八一五年のことである。ベートーヴェン四十四歳、ウィーン会議直後の不作の時代であった。この作品一〇二はラズモフスキー家お抱えのシュパンツイヒ弦楽四重奏団でチェロをひいていたヨーゼフ・リンケのために書かれ、エルデディ伯爵夫人に捧げられた。リンケはエルデディ家にも出入りする音楽家で、伯爵夫人がベートーヴェンの心の隅まで知り尽くした女性であったのは周知のとおりである。

作品一〇二の二曲には形式の上でも内容の上でも大きな変化が現われる。とくにこのハ長調(第四番)の曲は形の自由さが著しく、ソナタ形式ならびにそれに近い形で書かれた二つの部分を含み、しかも途中でフェルマータ付きの休止を一回はさんではいるものの、全体はひとつの分ちがたいまとまりを持っており、実質的には単一楽章のソナタとみるこ

とができる。また気分はこれまでになく気むづかしいところがあり、音楽に主観性の色が強くなってくる。

レコードはロストロポーヴィチとリヒテルの共演盤がたいへんな迫力である。大演奏と言うにふさわしい、力の満ち溢れる表現で、両者とも自己の強い表現を求めて気負うところがなくもなく、やや協奏的に走ったきらいはあるが、やはりきき手を強く押しこめる力は抜群だ。フルニエとケンプのライブ録音は現在では全集の形でしか出ていない模様だが、このあたりのケンプの演奏は滋味掬すべきものがあり、ベートーヴェンの主観性の強い楽想を思うように掘り下げている。この曲の気まぐれな気分を、彼はまったく熟した人間的な味で表現する。フルニエのチェロが、少しも力まず、比較的平坦に、しかし洗練された感じ方でそのピアノと交錯しながら、演奏全体の気品を高く吊り上げているのは、さすがに立派なものである。室内楽をやりぬいた人たちの、本当の女人的な芸であって、こういう表現は音楽の根の最も深いところでなければ生まれないだろう。そのほかカザルスとホルシヨフスキー、フルニエとグルダ、ペレーニとラーンキのレコードもきき逃さない。



◀ロストロポーヴィチ(vc)リヒテル(p)(第3番)…Ph-X 8584 ●フルニエ(vc)ケンプ(p)(チェロ作品全集)…G-MG8115~7 ●カザルス(vc)ホルシヨフスキー(p)(第1, 5番)…G-A-GR70068 ●フルニエ(vc)グルダ(p)(第3番, 「魔笛」による7つの変奏曲)…G-15MG3064 ●ペレーニ(vc)ラーンキ(p)[第2番「魔笛」による12の変奏曲]…Hun-S LA 1226 (魔盤)

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

## チェロ・ソナタ第5番ニ長調

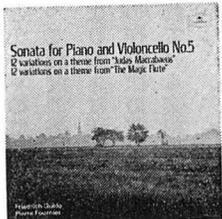
Cello Sonata No.5 in D, Op.102-2

ベートーヴェンのチェロ・ソナタの最後を締めくくるこの第五番ニ長調は、前述のように一八一五年に作曲され、エルデディ伯爵夫人に献呈された作品一〇二に含まれる一曲である。この時期ベートーヴェンはピアノ・ソナタのジャンルでこそ若干の作品を生産しているが、弦楽四重奏曲はヘセリオーンと後期の作品群との間の長い空白に入っており、また第八番まではすべて初演もすませていた交響曲も、あの第九が生まれるのはまだずっと先のことである。最後の飛躍を前にして、ベートーヴェンの創作は沈滞気味であった。

気むづかしさと一種のユーモアのまじり合った第四番ハ長調に対して、このニ長調のチェロ・ソナタには深い沈潜の趣がある。形も対照的で、ここでは第二楽章にアダージョを配した三楽章構成が採用された。ヴァイオリン・ソナタがすべて三ないし四楽章の曲であるのとは異なり、ベートーヴェンのチェロ・ソナタは総じて楽章構成が独特で、最初の作品五の二曲はどちらも二楽章、そして緩徐楽章を欠く三楽章の第三番ニ長調のあと第四番ハ長調の特異な姿が現われ、この最後の曲で初めてソナタの常識的なスタイルに立ち帰ったのだった。なおフィナーレ

は、これから以後、後期のピアノ・ソナタや弦楽四重奏曲などにしきりに出てくるフーガ楽章になっている。

さて、フルニエはケンパだけでなく、それより早くグルダともコンビを組んでベートーヴェンのチェロ・ソナタ全曲録音を行なっているが、ニ長調の曲の中でも最もすぐれた演奏のひとつである。第一楽章における表情変化の微妙さ、フーガの澄みわたった美しさの中に潜むファンタジーの豊かさは特筆すべきもので、とくにグルダのピアノは終始牙えわたっている。カザルスとホルシヨフスキーのモノラル盤は一九三九年のレコーディング。音質はそれなりに覚悟しなければならぬが、六十代前半の巨匠は、のちには失わざるを得なかつたつややかな音色や技巧、そしてふくよかな情感をまだしっかりと握っている。ゼルキンとの共演にくらべると音楽はよほど柔軟でニュアンスも豊富だ。ロストロポーヴィチとリヒテルのデュオはここでもはなはだスケールが大きい。緩徐楽章の感情の振幅の大きさなどは驚くべきものである。それと対照的なのがフルニエとシュナーベルのかなり古いモノラル録音で、小ぢんまりした箱庭的な美しさが印象にのこる。



◀フルニエ(vc)グルダ(p)【「マカベウスのユダ」による変奏曲、「魔笛」による12の変奏曲】…G-MG W5174 ●カザルス(vc)ホルシヨフスキー(p)【第1, 4番】…①A-GR70068 ●ロストロポーヴィチ(vc)リヒテル(vc)【第1, 2番】…Ph-X 8664 ●フルニエ(vc)シュナーベル(p)【第3, 4番】…①A-GR2208 (魔盤)

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

## 《魔笛》の主題による7つの変奏曲

Variations on Mozart's "Bei Männern" in F, WoO.46

変奏曲の超大家だったベートーヴェンは、ピアノとチェロの二重奏のために三曲の愛すべき変奏曲をのこした。曲によって程度の差こそあるものの、いずれもどちらかと言えばピアノの方により大きな活躍の場を与えた作品で、主題は自作のものではなく、ほかの作曲家の著名な作品の中から、どれもこんにちでもきわめてよく知られている楽想を借用している。作曲年代は正確なところは確かめられていないが、ヘンデルのオラトリオの合唱曲を主題にしたヘマカベウスのユダの主題による十二の変奏曲が一七九六年、モーツァルトのオペラのパパゲーノのアリアによる《魔笛の主題による十二の変奏曲》がその二年後、そしてこの《魔笛の主題による七つの変奏曲》が一八〇一年とそれぞれ推定されている。いずれにしても比較的初期、チェロ・ソナタで言えば最初の作品五と同時期かその少しあとの産物で、ピアノ独奏用の《ディアベリ変奏曲》に代表されるシリアスな大変奏曲とは対照的な、ベートーヴェンの作品としては軽い音楽である。

《魔笛の主題による七つの変奏曲》は原作オペラ第一幕のパミーナとパペゲーノの二重唱《恋を知る男たちには》に基づくもので、主題そのも

のはほかの二曲のそのような絶大なポピュラリティは持たないが、ベートーヴェンの作曲は三曲の中では最も充実し、また原曲の二重唱の味を生かして巧妙な効果をあげていることもあってとりわけ名高い。レコードも従ってこの曲が断然多いが、その中でもカザルスとコルトーという往年の二大巨匠の記念すべき共演盤は、一九二七年とこれはいへん古い録音ながら、いまなお広く愛聴される名演奏である。端正なスタイルをいささかも崩すことなく、のびのびと歌うチェロもさることながら、ここではコルトーのピアノがそれにも勝るききものだ。そのロマンティックな表情には実に多彩なニュアンスが溢えられ、ときおりはっとするようなしなやかな表現にもぶつかると。そして全曲を包み込む上品と暖かみは比類ない。音質がこれではという向きにはフルニエとグルダのレコードがよいだろう。ピアノの輝くような美感とみずみずしい表現は出色のものであり、フルニエのしなやかなチェロも控え目ながらノーブルな音楽を奏でている。ジャンドロンとフランセの演奏は朗々と歌うチェロのつややかな音色が特長。このほか、全集の中でしかきけないが、フルニエとケンパ、それにペレーニ盤も一聴に価する。



◀フルニエ (vc) グルダ (p) (vcソナタ第3,4番) G-15MG3064 ●カザルス (vc) コルトー (p) [カザルス/チェロ小品集] …◎A-GR70005 ●ジャンドロン (vc) フランセ (p) [シュペルト/アルペジオーネ・ソナタ, ドビュッシー/vcソナタ]…Ph-PC1565 (廃盤)

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

## 弦楽三重奏のためのセレナーデ

String Trio in D "Serenade", Op.8

モーツァルトの手ではあれほどたくさん作曲された「ディヴェルティメント」も、ベートーヴェンにはもう見向きもされなかった。二人の年の差はわずか十四年、足早に移り変わる世の中に対応して、この手の娯楽音楽ないし機会音楽が急速に過去のものとなりつつあったことがよくわかる。それでも「セレナーデ」——ベートーヴェンの場合はむしろ「セレナーデ」である——と名の付く作品なら、その彼もオリジナルのものかをかろうじて二曲だけ書きのこした。いずれも一七九六、七年の若いころの作曲で、ひとつはフルート、ヴァイオリン、ヴィオラという珍しい編成の三重奏曲(作品二五)、もうひとつはこのヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの弦楽三重奏のための作品である。

標題から想像されるようにベートーヴェンとしてはまったく保守的な作風で、形もこの種の音楽のほぼ定型通りの多楽章、中身も甘い旋律と優雅な気分が満ち溢れた典型的なセレナーデ調といった具合であるが、作品二五がいくぶん靈感に乏しいところがあるのに対して、この作品八は美しく印象的な旋律が豊かに盛り込まれているばかりでなく、書法的にみても重音楽法を多用するなどどうしてさすがに凝っていて、なかなか

か樂しめる音楽になっている。全五楽章の構成であるが、第一楽章の冒頭と終楽章の最後にはセレナーデにつきものの行進曲風の部分があり、それを別個に数えて七楽章とみる場合もある。

レコードは目下廃盤のものが多く淋しいかぎりであるが、幸いゴールドベルク、ヒンデミット、フォイアマンのトリオによる歴史的演奏が現在のカタログに残っている。そのきびきびした音楽の運び、潔癖な音法、一点の曖昧さも残さない鋭い表現は、録音からほぼ半世紀を経た現代のわれわれの耳にさえ何と新鮮に響くことだろう。時折顔をのぞかせるまるで怒ったような語り口には、三人の心にある気鋭の音楽的主張、強い表現の意志といったものを感じる。技術も高くアンサンブルは完璧であるが、音楽は硬く冷たいものには決して傾かず、終楽章の変奏曲などは独特の柔らかな気分で覆われている。一方グリュミオー・トリオの新しい録音はどこにもまったく屈託のない、ひたすら優麗典雅な演奏である。作品の性格上ヴァイオリンばかりが目立つのはある程度やむを得ないし、また美しいのはもちろん大いに結構であるとしても、音楽がその場限りの快感だけに終わってしまうのはやはり物足りない。



◀ゴールドベルク(vn)ヒンデミット(va)フォイアマン(p) [ハイドン/vn協奏曲=長調]…◎Art-YD 3021●グリュミオー・トリオ [セレナーデ op. 25] …Ph-13PC46

## ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

### ピアノ三重奏曲第7番変ロ長調《大公》

Piano Trio No.7 in B♭ "Archduke", Op.97

ヴァイオリン・ソナタなど種々の二重奏を別にすれば、ピアノ三重奏は弦楽四重奏とともに、室内楽の最も代表的かつ基本的な形態である。と同時にピアノ三重奏は、ときとして奏者に個人技や自己主張を許し、あるいは各楽器が力いっぱいにわたり合う協奏風の場を提供することによって、しばしば室内楽らしからぬはなやかな空気に満たされる場合があり、四弦の求心的な一体化を身上とする弦楽四重奏とは、その意味では対照的であるとも言えよう。だがそれでもなお、一方では室内楽の生命とも言うべき緊密なアンサンブルが要求されるのは当然で、その一種の矛盾の解決こそが奏者たちの苦心の種でありまた楽しみでもあるとともに、われわれにしてみれば最大のききどころなのである。ベートーヴェンの《大公》は疑いなくこのジャンルの王者で、そんなピアノ・トリオの醍醐味を満喫させてくれるという点でも、これを陵駕する作品はない。一八一一年春、ベートーヴェン四十歳の作である。

この曲には新旧実にたくさんレコードがある。まずオイストラフ・トリオの演奏はこの三重奏団の全盛時の最も充実した記録のひとつで、少し誇張した言い方をすれば、次のカザルス・トリオの演奏以来レコ

ドの上では大きな空白があったのを、この演奏の出現で再びしっかりとこの作品がわれわれの時代に確保されたというような意味あいを持つものであった。表現はひじょうに端正である。ロマン的なニュアンスは少ない。隅々まで完全な技巧と、精細なそして折り目正しい弾き方で通し、高らかに格調の正しさを誇る大演奏である。一方カザルス・トリオは豊かな表情で音楽がふくらみきつた美しさを持つ。この演奏の表情はおそらく一度きけば不思議なほど心に焼きついてしまうものであろう。アンサンブルの中心は明らかにチェロのカザルスで、ティボーのヴァイオリンがバランスを崩すほど線が細いにもかかわらず、そういう機械的な測定を超えたところで音楽がまとまっているのは、いかにも一時代前の様式である。次にスーク・トリオには三種類の録音があり、いずれもすばらしく緊密な重奏の上に立った名演奏だが、一九七五年のものは表情のこまやかさや説得力の強さで旧盤をさらに凌ぎ、また録音の良さも相まって響きの美しさは類をみない。いっそう新しいものにアシケナー・ジ、パールマン、ハレルの豊麗な演奏がある。やや楽天的な感触があるが、まるで山盛りの大御馳走を目の前に並べられたような趣だ。



●オイストラフ・トリオ…A-EAC55012 ●カザルス・トリオ…A-GR70006 ●アシケナー・ジ(P)パールマン(vn)ハレル(vc)…A-EAC90122 ●スーク・トリオ…De-OZ7070

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

## 弦楽四重奏曲第4番ハ短調

String Quartet No.4 in c, Op.18-4

ベートーヴェンの弦楽四重奏曲は作品一八(全六曲)から死の前年の第十六番へ長調に至るまで計十六曲がのこされており、ほかに単一楽章の「大フーガ」がある。これらは彼の室内楽創作の中心的な位置を占めたばかりでなく、交響曲やピアノ・ソナタとともに、巨匠が生涯を傾けて打ち込んだ領域であった。もともと、一七九八年に着手された作品一八の六曲すべてが出揃ったのは作曲者が三十歳を迎える一八〇〇年のことだったから、出足は交響曲の場合と同様必ずしも早かったわけではない。これは、ベートーヴェンが弦楽四重奏曲の作曲を前にしていかに深く思索をめぐらしたかを物語るものであると同時に、反面それだけに、つまり室内楽の経験を十分に積み、しかもハイドンやモーツァルトら諸先輩の書法をみずからうちに消化吸収した上での仕事であっただけに、彼はこの処女作に早くも自己の個性をしっかりと打ち立てることができたのである。六曲のそれぞれが性格的で、はっきり固有の美の世界を備えているあたりも、それまでに貯えられていた蓄積の大きさを示す事実と言えよう。ここに取り上げた第四番ハ短調はその中でも最も特色の強いもので、第一楽章の憂愁感溢れる楽想の美しさは圧巻である。な

お、作品一八の六曲の各番号は作曲順とは一致せず、第四番は一番あとで完成されたものとみられている。

レコードは——中期以降の諸曲の場合も同じだが——別の一曲と表裏にした一枚もの、作品一八をまとめて収めた三枚組のセット、あるいは全集としてしか入手できないものといういろいろある。一枚ものではブダペスト弦楽四重奏団のステレオ盤とスメタナ弦楽四重奏団の新しい録音が双璧で、前者では強靱な意志と無類の求心力を背景に鋭く曲の核心に切り込んでゆく彼ら特有の演奏様式がこの作品の劇的な美しさを浮き彫りにしている。一方後者は、表情は対照的に柔らかく、アンサンブルもしなやかであるが、表現の緻密さや重奏の締まりはこれも驚異的だ。音色の美しさも魅力で、最新の録音技術によるシャープな音質がそれをいっそう引き立てている。アルバン・ベルク弦楽四重奏団の演奏は作品一八のセットの中に入っているが、これまた絶対にきき逃せない。持前の精密機械のようなアンサンブルを土台に、細部まで完全にコントロールされた確度の高い演奏が展開されており、それでいて音楽はあくまでも自然で流麗に流れ、しばしば独特の美しさできき手を魅了する。

- ◀ブダペストSQ(第3番)…CS-SOCL290(廃盤)  
●スメタナSQ(第2番)…De-OX7077(廃盤)●  
アルバン・ベルクSQ(第1~6番)…A-AEAC  
87004~6



# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

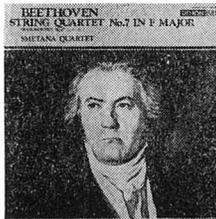
## 弦楽四重奏曲へ長調《ラズモフスキー第1番》

String Quartet in F "Rasumovsky No.1", Op.59-1

作品一八のほぼ六年後、一八〇六年春からおそらく翌年の初めにかけて、新たに作品五九の弦楽四重奏曲集が誕生した。へ長調、ホ短調、ハ長調の三曲からなるこの名作グループによって、いよいよベートーヴェンは弦楽四重奏の書法を完全に自分のものとし、同時にこの曲種を一気に比類ない高みに引き上げる。作品の雄大なたたずまい、緊密な構成、楽想の展開の入念さ、表現力の強さ、どれをとっても前作から飛躍的な進歩が果たされており、各楽器の音色効果を深く追究するとともに四声部に均等に近い重みを付与することによって、四重奏の新しい手法がここに開拓されている。ハイドンやモーツァルトの手で育てられてきた弦楽四重奏曲は、こうしてベートーヴェンのうちに最大無二の担い手を見出したのである。また、このグループは典型的な中期様式に支配されているという意味でも作品一八から大きく隔り、さらに第十番変ホ長調以降の後続の諸曲ともはつきり性格を異にしている。これら三曲は献呈された伯爵の名に因んで、一般に「ラズモフスキー第一」「第三番」と呼ばれる。ラズモフスキーは当時ウィーンに駐在したロシアの大使で、自邸にヴァイオリンのイグナツ・シュパンツィヒやチェロのヨーゼフ・リン

ケらによる名クワルテットを擁し、みずからその第二ヴァイオリンの椅子に坐るほどの音楽好きの貴族だった。なお彼がそれを望んだのか、それともベートーヴェンが気をきかせたのかは不明だが、三曲のうちへ長調とホ短調の二曲では、一部にロシア民謡が主題として使われている。この第一作へ長調は「ラズモフスキー」の中でもとくに規模が大きい。また書法もきわめて斬新で、初演の際には人々のとまどいと不評を買ったそうである。

さてレコードであるが、一枚ものではこの曲でもスメタナ弦楽四重奏団の最新盤とブダペスト弦楽四重奏団の新メンバーによる録音の新旧二点が断然光っている。が、この両クワルテットの演奏については続くホ短調およびハ長調のところでも詳しく述べることにして、ここではベルリン弦楽四重奏団のレコードを挙げておこう。これは「ラズモフスキー」の三曲を二枚組にしたものだが、その絶妙なアンサンブルと豊かな情感の広がりが見事と言うほかない。ジュリアード弦楽四重奏団は中期の五曲をまとめたさらに大きなセット。恐ろしく高い技術的精度を追究した硬質な演奏で、現代四重奏のひとつの典型をみる思いがする。



◀スメタナSQ…De-OS7174●ブダペストSQ…C  
S23AC544●ベルリンSQ〔ラズモフスキー全曲〕  
…DS-ET3026~7●ジュリアードSQ〔第7~11  
番〕…CS-SOCZ360~62

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

## 弦楽四重奏曲ホ短調《ラズモフスキー第2番》

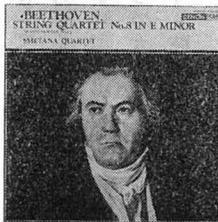
String Quartet in e "Rasumovsky No.2", Op.59-2

ベートーヴェンの弦楽四重奏曲の十六曲すべてをレコーディングした団体は、たぶんすでに二十前後に達しているものと思われる。それらの演奏はいずれもそれぞれのクワルテットがその全力を注ぎ込んだいわば生涯の大仕事であって、それだけに一聴に価しないものなどあるはずもなく、また互いの優劣を計るのはほとんど無意味であるが、それでもあえて言うなら、バリリ弦楽四重奏団、ブダペスト弦楽四重奏団（再録音のステレオ盤）、そしてスメタナ弦楽四重奏団による三つの「全集」は、その中でもとくに大きな感動を呼ぶ奇跡的な名演奏として永遠に語り継がれるのではなからうか。これらは室内楽レコード史上にさん然と輝く三大金字塔である。

このうちスメタナ弦楽四重奏団の全曲録音は実に二十年になんなんとする長い時間を要したあげく最近ようやく完成にこぎつけたもので、さすがに一曲一曲の表現の彫りの深さと、あたかもチェコ名産のガラス器を思わせる精妙な彫琢の美しさはくらべるものがない。さらに、ボヘミアの伝統そのままの練り絹のようにしなやかなアンサンブル、各声部が互いにぴったりと寄り添い、しばしば粘るようにして引き合う独特の響

き、水ももらさぬ呼吸、極度に洗練され、それでいていきいきとした生命感と弾力を併せ持つ表現、といったものが完全に終始一貫して達成されているのは本当に驚くべきことである。しかも彼らは、あくことなく高いものを求める芸術家としての厳しくひたむきな姿勢を常に失うことがない。この四重奏団の音楽ならではの絶妙な室内楽的美感を成立させるものとして、さらに気負いを決して表に出さない熟達の手芸、持前の音色の美しさもまた見逃せないところだろう。この《ラズモフスキー第二番》では、純古典的な様式美の中に湛えられた繊細な情感に強く心を惹かれるものがあり、中でも第二章の感銘の深さは無類である。

スメタナ弦楽四重奏団以外のレコードも少し挙げておくと、まず一枚ものではブダペスト弦楽四重奏団の新旧二点もむろんきき逃さないが、この曲には珍しくヤナーチェク弦楽四重奏団のレコードがのこっている。必ずしも垢抜けした演奏ではないが、その単刀直入な語り口に独特の説得力がある。組物ではベルリン弦楽四重奏団の深い叙情性が圧巻。バルトーク弦楽四重奏団も《ラズモフスキー》の三曲をセットにしていて、これは熱っぽく隙のない重奏がききものである。



◀スメタナSQ…De-OS7175 ●バリリSQ [全集]  
…W-V IC5318~27 ●ブダペストSQ [第9番]  
…CS-23A C565 ●ヤナーチェクSQ…Sup-OS  
7068 (魔盤) ●ベルリンSQ [ラズモフスキー全曲]  
DS-ET3026~7 ●バルトークSQ [同]…Hun-  
K17C9382~3

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

## 弦楽四重奏曲ハ長調《ラズモフスキー第3番》

String Quartet in C "Rasumovsky No.3", Op.59-3

スメタナ弦楽四重奏団が今をときめくチャンピオンであるとするなら、一九五〇年代から六〇年代の初めにかけていち早くベートーヴェンの全曲録音を完了し、一面では好対照なしかしいざれ劣らぬ名演奏によって室内楽演奏史上に不滅の偉業を打ち立てた二つの大先輩が、バリリ、ブダペストの両弦楽四重奏団である。このうちバリリ弦楽四重奏団の録音は十枚組の「全集」の形でしか入手できない模様で、これはつくづく残念なことであるが、一方のブダペスト弦楽四重奏団によるステレオ録音は、ごく一部の曲を例外として幸い分売レコードが揃っている。趣味性を超越して情緒的なアプローチを極力避け、作品そのものの厳正な凝視とそのストレートな再現を意図する彼らの新しい演奏スタイルは、保守的な室内楽の世界にあってはほとんど革命的とさえ言えるもので、弦楽四重奏を奥まったサロンの雰囲気の中から救い出すとともに、後統の室内楽奏者たちに計り知れぬ影響を与えた。いや、従来の常識からみれば極度に精巧な音の織地をもちや四重奏団には不可欠なものにしたという意味で、それは影響というような生易しいものではないかも知れない。彼らの音色は決して美麗なそれではなく、むしろ各声部とも厳しい線

の表現に耐える強靱な張りを持っているのが特徴で、表現はいつも徹底して構造的である。その意味ではたしかに四角四面ではあるが、音楽的な乾燥や機械的な冷たい感触とは無縁で、強い説得力を常に失わないのは、意志的な造型の発する熱っぽいもの、表情の適確さ、そして極度に集中的な室内楽的魅力などの賜物であろう。これをより高い精度を求めて技術的に追究してゆくとジュリアード弦楽四重奏団の世界が拓ける道に通じる。そして、そこではどんな曲の細部も、ほとんど高倍率の顕微鏡下にみるような具合になるが、ブダペスト四重奏団の場合は、まさにいつもものを正確に把握する人間の肉眼というところが大きな違いであり出される終楽章フーガが実に強烈で、仮借ない口調でたたみ込むように前進するその演奏には息をのむ迫力がある。ブダペスト弦楽四重奏団の全演奏記録の中でもこれは稀にみる一ページだろう。このほかにもスメタナ弦楽四重奏団の新旧二種の録音、アルバン・ベルク弦楽四重奏団やウィーン弦楽四重奏団、少し古いがブッシュ弦楽四重奏団のモノラル録音など名盤が少なくない。傑作は名演奏を生むものである。

◀バリリSQ[全集]…⑩W-V I C5218~7●ブダペストSQ [第8番]…CS-23AC565●スメタナSQ '63年録音[第11番]…Sup-OZ7124●'79年録音[第10番]…De-O S7176●アルバン・ベルクSQ[第11番]…A-EAC90053●ウィーンSQ…R-RCL 8027(廃盤)●ブッシュSQ [第11番]…⑩A-GR 2232(廃盤)

BEETHOVEN  
COMPLETE STRING QUARTETS  
Barilli Quartet

## ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

### 弦楽四重奏曲第10番変ホ長調《ハーブ》

String Quartet No.10 in E♭ "Harp", Op.74

三曲の《ラズモフスキー弦楽四重奏曲》のあと、ベートーヴェンは三年間ばかりこのジャンルから遠ざかった。その間彼の中期様式は頂点に登りつめ、やがてかきたの後期の世界がかすかにみえ始めるところまでやってくる。《ハーブ》はちょうどそのころ、ピアノ協奏曲《皇帝》に引き続いて作曲され、彼の弦楽四重奏曲としては初めて一曲単独の作品番号のもとに世に出された。《ラズモフスキー》たちとの相違はきわめて明確で、あのような巨大な構築性の代わりにすっきりとしたまとまりが、また恐るべき緊張の代わりに優しい叙情が、そして熱風の渦巻の代わりに流暢な流動性が目立つようになる。透明感も強い。この時期のピアノ・ソナタにはやはりそうした傾向がみえ始めるが、規模の大きな作品はまだ必ずしもそうではない。つまり様式の転換期である。その特別の意味を持つときの心の姿を、この曲は最も純粹に、素直に映し出している。あの激しい緊張のラズモフスキーの世界の中だけでは私たちがまた生ききれない。この作品はそのような感慨をもってきくことができ。なお《ハーブ》の愛称が第一楽章の随所に現われる特徴的なピツィカートに由来するのは周知のとおり。また終楽章はベートーヴェンの弦

楽四重奏曲のそれとしては唯一の変奏曲になっている。

この曲のレコードの中で抜きん出た美しさを誇るのがスメタナ弦楽四重奏団による一九七九年の新録音である。ともかくこの演奏の完成度の高さたるや圧倒的で、たとえば全体にややくすんだ色調の中での音色の微妙な変化に至るまで完璧な心配りが行き届いている。第二楽章の室内乐的妙味は筆舌に尽くしがたいものがあり、さらに終楽章の一条乱れぬ展開も恐ろしいほどだ。往年のウェラー弦楽四重奏団も流麗なよい演奏をしていて、音の美しさと旋律の歌い方がとくに魅力的である。表情はいくぶん明るめで、第二楽章の暗さが多少甘美な感傷めくのがこの団体にらしいところだ。しかしその甘さは少しもたれない。変奏曲でのウェラーのヴァイオリンの美しさも格別で、のちに指揮棒を持つようになっ

てしまった彼のこれは貴重な記念盤だろう。ベルリン弦楽四重奏団の演奏も立派。引き締まった端正なスタイルの中に、本当に心のこもった音楽が広がっている。ほかにもよいレコードはあるが、この曲ではとくに、優しい叙情と透明な美感をものに見事に表わし出したババリ弦楽四重奏団の演奏を、全集の中から取り出してでもきいてみたい。

BEETHOVEN  
STRING QUARTET No.9 IN C MAJOR  
STRING QUARTET No.10 IN E-FLAT MAJOR  
(STRING QUARTET)



◀スメタナSQ(第9番)…De-O S7176 ●ウェラーSQ(第11番)…L-K18C8262 ●ベルリンSQ(第11番)…DS-ET3053 ●ババリSQ(全集)…W-V I C5218~27

## ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

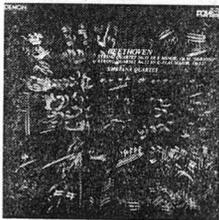
### 弦楽四重奏曲第11番へ短調《セリオオーソ》

String Quartet No.11 in f “Serioso”, Op.95

（ハープ）の翌年一八一〇年に作曲され、ベートーヴェンの友人でチェロをよくしたハンガリー出身のズメスカル男爵に献呈された。（ハープ）ですっきりとした弦楽四重奏曲を書いたベートーヴェンは、やはりそれを最後の住居として安住するわけにゆかない。気むずかしい顔が覗き始める。この曲はベートーヴェンの弦楽四重奏曲の中では最も形の小さいものだが、表現するところはきわめて主観性が強く、音楽の中に立入るとは後期の諸作よりもっと困難であるように思われる。すんなりとはできていないのだ。曲の中心は第二楽章から切れ目なく続く第三楽章のスケルツォ風の音楽で、そこに（セリオオーソ）の発想表示があるが、この表示を、初め作曲者は全曲に与えようと思った（出版の際になぜか削除された）のであった。このイタリア語を字義どおり受けとれば「まじめな」「厳粛な」となるが、どうもそれだけではなく、のつびきならぬ心の吐露というニュアンスがあるように思われてはならない。冒頭の主題の我の強さ、しかもそれを全楽器のユニゾンでびしりと強く押し出すあたり、もう開曲からただごとでない事態であり、形式もずいぶん自由になってきている。

かけがえのない名盤がたくさんあるが、ここでもまずスメタナ弦楽四重奏団の演奏を挙げないわけにはゆくまい。明暗の彫りが深く、しかもそれがいつも弾力性に富む柔らかい表情で描き出されている。こういう柔軟な感触で再現されるよりも、ブダペスト四重奏団のような端的なものの言い方の方がこの曲はたしかにわかりよい。しかし、盛られた感情の屈折が、まるでそちこちからほのかな間接光を受けて浮き彫りにされてくるのを絶えず探し求めるような、手間のかかるきき方が心なしかこの曲にはふさわしいように思われる。二種類の録音があり、全集に収められている旧盤の方も音質まで含めて何ら不満はないが、一九八一年の新録音はそれにも勝る驚異的な名演奏で、表現の純度の高さはそのままに、自在闊達なアンサンブルによってこの小さな曲を思いがけぬほどの大ききさでかかせている。ひびきも実に深い。かなり古い吹き込みだがブッシュ弦楽四重奏団のレコードもこのあたりで登場願う価値があるろう。異常なまでの集中力と深く考え抜かれた設計が、音質の貧しさをほとんど忘れさせてしまうほどの説得力を生み出している。このほかウエラー盤、ベルリン盤なども見捨ててはゆかない。

◀スメタナSQ(第12番)…De-OF7021●ブッシュSQ(第9番)…A-GR2232(廃盤)●ウエラーSQ(第10番)…L-K18C8262●ベルリンSQ(第10番)…DS-E T3053



# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

## 弦楽四重奏曲第12番変ホ長調

String Quartet No.12 in E, Op.127

一八〇九〜一〇年の「ハープ」と「セリオーソ」でその様式に大きな転換のきざしが現われたベートーヴェンの弦楽四重奏曲は、しかしそれから実に十年あまりの間、ただの一曲も書かれることがなかった。ロシアのガリツィン公爵からの依頼を受けた巨匠が再びこの分野に戻ったのは一八二四年である。そして一八二六年までに、いわゆる後期の名作群（第十二〜十六番）が一気に作曲される。五十代の半ばに達したベートーヴェンが、いっそう自由な形式の中に熟きった音楽的想念と四重奏書法とを思うままに展開したこれら五曲は、その著しく独創的な表現と、音楽が語り出す精神の底知れぬ深さによって、音楽史上に強い光彩を放ちつつそびえ立っているのである。

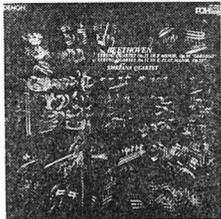
ところで、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲も後期ともなると何か特別の存在で、選ばれた少数のきき手のためだけのものという受けとめ方が、日本はおろかヨーロッパにさえあるように思われる。なるほど音楽は果てしなく深く大きい。晦渋な部分もある。だが、これらはききにくい、あるいは進んで近づこうとする人を冷たくはねつけるような音楽では断じてない。ましてや、これらを理解し楽しむことができる者こそが

いわばエリート音楽愛好家である、ということにならないのはもちろんである。これまで敬遠してきた人は虚心坦懐にまづきいてみることをお勧めする。そして、後期の良さがわからないでは、と大言を吐く向きがもしあるなら、その前にいっそう深いところに耳を傾けてみてほしい。

さて、第十二番変ホ長調はガリツィン公爵のための三曲の第一作で、第九交響曲の初演をすませた一八二四年の秋に本格的な作曲が始まり、翌年初めに完成された。全四楽章と形の上ではまだ古典的である。

この曲は昔からスメタナ弦楽四重奏団がすばらしい演奏をきかせていたが、三度目の吹き込みに当たる一九八一年の最新録音がこれまたすごい達演である。円熟という語を絵に画いたようだ。ウェラー弦楽四重奏団も注目しに価する。第二楽章の変奏曲が美麗で、とくに後期らしい深刻な表情を作ることなく、むしろ親しみをこめた語り口で優しく流れているのが、いかにもわれらの音楽という気分である。こういう気持を心底から持ちうるのは、ほかにバリリ四重奏団くらいものだろう。ブダペスト弦楽四重奏団は、新様式を背負って立とうとする強い自負に満ちた旧盤の方もいい。

◀スメタナSQ(第11番)…De-OF7021 ●ウェラーSQ [ハイドン/第83番]…L-GT9259 (廃盤) ●バリリSQ [全集]…@W-VIC5218~27 ●ブダペストSQ [第16番]…@CS-20AC1919



# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

## 弦楽四重奏曲第13番変ロ長調/大フーガ

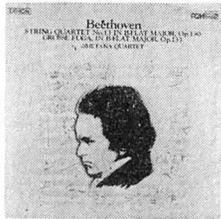
String Quartet No.13 in B $\flat$ , Op.130/Grosse Fuge in B $\flat$ , Op.133

ガリツィン公爵のための三曲の弦楽四重奏曲のうちこの変ロ長調作品一三〇は実は最後の作品(出版は二番目)で、作品一二七の九カ月後、一八二五年十一月の完成である。作品一二七完成のあと、ベートーヴェンは二つの弦楽四重奏曲の作曲を進めた。そして八月に一曲出来上がる。それがイ短調作品一三二であるが、出版順序が逆になったため、作品番号と完成順は一致しなくなった。この作曲順、つまり作品一二七(第十二番)、作品一三二(第十五番)、作品一三〇(第十三番)、そして作品一三一(第十四番)という順序を念頭に置くことは、これらを理解する上に大いに役立つ。われわれは作品一二七でほとんど湧き出る楽想の泉の音をきいている。それは作品一三二に受け継がれ、作品一三〇へと伸びてゆく。〈大フーガ〉は初めはその終楽章として書かれた。ここでは抽象的な世界が大きく顔を出す。なおも溢れてやまない楽想とそれとは融和して作品一三一へと入ってゆく。そしてその間、楽章の数は興味深いことに一つずつ増加してゆくのである。

さて、作品一三〇はシュパンツィヒ四重奏団の手で初演され概ね好評ではあったが、全六楽章でしかもその最後に巨大なフーガを置く異例の

長さはさすがに一部の不評を買ったらしい。さらに周囲の進言もあってベートーヴェンはやがて新たな終楽章を作曲し、その結果はみ出した〈大フーガ〉は別に作品一三三として出版されることになる。新しい終楽章が書かれたのは一八二六年十一月、彼の創作のすべてが閉じられる寸前のことであった。なお第五楽章「カヴァティーナ」は、そこに盛られた痛切な叙情の美しさゆえにとくに名高い。

レコードはフーガ付のオリジナル版によるものと、決定稿どおりのものがあり、演奏がすぐれてさえいけばオリジナル版もどうして冗長ではない。スメタナ弦楽四重奏団の演奏がその好例で、カヴァティーナの悲愁から立ち直るのにはこのフーガの力が必要であることを、それは切実に訴えている。ラサール弦楽四重奏団は精緻な小楽章の配列の妙をくつきり浮き彫りにして、組曲的なおもしろさを見事に現代に再現してみせる。そしてその軽さを一手に受けとめるのが〈大フーガ〉ということだろう。一方決定稿どおりの録音の中ではベルリン弦楽四重奏団盤が出色。さらにブダペスト弦楽四重奏団も名演で、どちらも〈大フーガ〉が同じレコードに収められているからその意味では不便はない。



◀スメタナSQ…De-OF 7054 ●ラサールSQ…G-28MG0031 ●ベルリンSQ…DS-E T5085 ●ブダペストSQ…CS-SOCL294

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770-1827)

## 弦楽四重奏曲第14番嬰ハ短調

String Quartet No.14 in c#, Op.131

すでにふれたようにこの曲は次の作品一三二よりも実際はあとの作品で、一八二六年八月の完成である。ガリツィン公爵のための三曲の四重奏曲を書き終えたベートーヴェンが、さらにまったく自発的にこの曲を書いているのは、彼がこの時期に四重奏曲用の楽想をありあまるほど抱え、それをまとめることに非常な喜びを覚えていたことを物語る。この曲の楽想はもちろん、ガリツィンのための作品の案が練られていたころにもう生まれている。曲は全部で七楽章(というよりは七つの部分)からなるが、演奏は中断されない。始まったら最後まで四十分ほどは息も入られないのだから、演奏者はもちろんきき手も容易ではない。七つの部分の中に古典的な形式の面影はのこされているとはいえず、この自由さはやはり破格なものであると同時に、その流動してゆく音楽の語るものの深さも群を抜くものとなった。晩年の楽想に最もふさわしい形式がここにつかみとられたことになる。同期の諸作にくらべていちだんと厳しい、凜とした精神のたたずまいを感じさせる点も大きな特色で、ガリツィン四重奏曲では柔らかな叙情が主座を占めていたのに対して、この曲にはそこをひとつ突き抜けた毅然とした風情が感じられる。なおこの曲

は作曲者の生前に演奏された記録がなく、一八二八年十月に取り上げられたのが初演と考えられる。それを死を目前にしたシューベルトが書き、同行の友人が心配するほど興奮したという話があるが、このエピソードには疑問がないわけではない。

この曲あたりになるとブダペスト弦楽四重奏団にどうしても登場願う必要がある。大体手がこみ、線が入り組むほど彼らの演奏は威力を増し、この嬰ハ短調ではほとんど荘厳と言ってもさしつかえないほどの、強い美しさを持っている。スメタナ弦楽四重奏団も名盤。冒頭のフーガからこの団体の網の目は実に柔らかく、そしてしっかりと出来ていて、内容のひと滴ももらさない構えである。第四部アンダンテの美感は圧倒的だ。バルトーク弦楽四重奏団の演奏もいい。そのびっしりと目の詰んだ音楽には息をのむような迫力がある。もうひとつ、練達の芸を繰り広げるベルリン弦楽四重奏団のレコードは、そこに刻み込まれた表情のこまやかな美しさと、独特のくすんだ響きの渋い味わいがまことに印象深い。バリリ四重奏団の分売レコードがないのはこの曲の場合とりわけ残念なことである。



◀ブダペストSQ…CS-SOCL295●スメタナSQ  
…Sup-OZ7127●バルトークSQ…Hun-K17C  
9385●ベルリンSQ…DS-ET5103

# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

## 弦楽四重奏曲第15番イ短調

String Quartet No.15 in a, Op.132

ベートーヴェンを苦しめた肉体上の故障はあの不幸な耳疾だけではなく、年をとるに従って彼はいろいろな持病に悩まされるようになっていった。ヘガリツィン(四重奏曲)作曲中の一八二五年春にも、作品一二七の初演のあとかなり深刻な腸カタルに見舞われ、進行中だったこのイ短調作品一三二の筆も中断を余儀なくされる。水薬を与えられても用法を全然守らずにがぶ飲みしてしまうでたらめな患者に対して、医者は厳しい食餌療法を命じた。しかしベートーヴェンとしてはアルコールを禁じられたのがひどくこたえた様子で、少し気分がよいとすぐに水割りの葡萄酒に手を出したりしている。それでも五月には持前の闘志をかき立てて苦しみながらもペンを握り、そのうちに症状もだいぶ好転してくる。そして八月には作品一三二もどうにか完成にこぎつけた。秋口になればもうしたたか酒を飲んで大騒ぎする有様である。

ベートーヴェンのような作曲家の場合、個人的な生活体験が具体的な形で作品に反映するといったことはあまりありそうに思えないけれども、作品一三二はその珍しい実例で、作曲再開後に書かれた第三楽章には「病気がいえた者の神への聖なる感謝の歌」と記されている。しかも

続く第四楽章は回復の喜びを表わすかのような行進曲風の音楽であり、さらに終楽章では、当初は第九交響曲の終楽章主題とするつもりだった雄渾な楽想によって大きなクライマックスが形造られるのである。このように曲の展開が明快なこともあって、後期の四重奏曲の中でこれはおそらく最も広く親しまれている一曲だろう。

この曲にもスメタナ弦楽四重奏団の傑出した演奏がある。音の美しさにおいて抜群であるばかりでなく、感情の豊富さ、深い同感を示す痛切な表現においても、まったく申し分のないものである。この四重奏団の叙情的特質の面が最も大きく発揮された演奏のひとつと言えるが、毅然とした風格の高さがまったく侵害されていないばかりか、むしろそれが高らかに強調されるところまで叙情の質を純化させているのは驚くべきことである。ブダペスト弦楽四重奏団のステレオ録音もそれに劣らぬ見事なもので、ことに「感謝の歌」の敞しい美しさは圧倒的だ。「新しい力を感じて」の部分の強力な生命感、そしてコラール風旋律の最後の盛り上がりなど、およそ音楽の表現として最も深くたくましく人間をつかんだものではあるまいか。

◀スメタナSQ'66録音…Sup-O Z7128●'83年録音…  
De-OF7119●ブダペストSQ…CS-00AC1473~  
82 (鹿盤)



# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

## 弦楽四重奏曲第16番へ長調

String Quartet No.16 in F, Op.135

ベートーヴェンの弦楽四重奏曲もとうとう終着駅にたどり着く。作曲家五十五歳の一八二六年十月に完成されたこのへ長調作品一三五はまた、作品一三〇のへ大フーガに代わる新しい終楽章を別にすれば、まとまった作品としては彼最後のものになった。この時期ベートーヴェンは、自殺未遂事件を起こした甥カールをめぐる深い心労を抱え、さらに自身の健康の著しい衰えも重なって、むろんまだ希望は失わないが、ある種の覚悟も抱き始めないわけにはゆかない。それにしても、作品一三一までの道のりであればこのジャンルを思うまま自由に扱ってきた彼が、この曲にきて形を再び整理して四楽章の、それもきわめて簡潔な構成のものにしたのはなぜだったのだろうか。もちろん音楽的想念も、また四重奏の書法も熟きった後期固有のものではあるが、形については、最後にもう一度居住いを正そうという気持だったのでないとするば、何か新しい考えがあったと思わざるを得ない。終楽章に「やっとついた決心」という何やらいわくありげな標題が掲げられているのも不思議だ。しかもこの楽章の冒頭には「そうでなければならぬのか?」「そうでなければならぬ」という問答調の言葉が付した二つの動機が

わざわざ書き記されているのである。これに関しては、日常生活での家政婦との給金についてのやりとりとする愉快な説から、深刻なあるいは哲学的な解釈までいろいろ言われてきたが、真相は知る由もない。五カ月後に作曲者の死がやってくるということを未知のこととしてでなく、確実な事実として知っている後世の人間の立場からだけ考えると、えてして神秘化されやすいわけだが、それは少しばかり勝手というものだろう。本当は案外、邪気のない戯れにすぎなかったのかもしれない。

さて、この曲には一九三六年に録音されたブッシュ弦楽四重奏団の歴史的名盤がのこっている。SP時代からこんにちまで実に長い生命を持つ演奏で、実際この団体の録音の中でもシューベルトのへ死と乙女などとともに最も充実したものに属する。強い表現意志が全曲に漲っていて、はちきれんばかりの精神的充溢感があり、第三楽章の優麗玄妙な味は、ドイツ的表現の精髓の趣を持つものだ。ブダペストならびにスメタナ両弦楽四重奏団のレコードも例によって非の打ちどころのない名演。新しいところではベルリン弦楽四重奏団、さらにアルバン・ベルク弦楽四重奏団の精妙で切れのよい演奏もすばらしい。

◀ブッシュSQ(第12番)…①A-GR70082 ●ブダペストSQ(第12番)…CS-SOCL293 ●スメタナSQ(第12番)…Sup…OZ7125 ●ベルリンSQ(第12番)…DS-ET5067 ●アルバン・ベルクSQ(第12番)…A-EAC90118



# ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven(1770—1827)

## 七重奏曲変ホ長調

Septet for Strings & Winds in E $\flat$ , Op.20

一八〇〇年四月二日、ウィーンにおけるベートーヴェン主催の初めての音楽会が、念願ようやくかなってブルク劇場で開かれた。その夜のプログラム最後の、七番目に演奏されたのが出来たばかりの第一交響曲で、作曲家として彼はよい本格的なデビューを飾ったわけである。ところで、当時はオーケストラ演奏会といえども声楽曲や室内楽曲、あるいはピアノの即興演奏にいたるまで種々雑多の種目を連ねるのがむしろ普通のやり方で、このへ七重奏曲が初演されたのも実は同じ演奏会だった。プログラムの四番目に「畏れ多くも皇后陛下に献呈され、四つの弦楽器と三つの管楽器のためにルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン氏によって作曲され、シュパンツィヒ、……(中略)……の諸氏によって演奏される七重奏曲一曲」とある。ちなみにそのときは、交響曲よりもこちらの方がよほど評判がよかったらしい。

クラリネット、ホルン、ファゴット、それにヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、コントラバスの七重奏のために書かれたこの曲は、楽器編成といい、全六楽章の構成といい、優美でくつろいだ気分が支配的であることといい、明らかにドイツヴェルティメントないしはセレナーデの様

式を念頭に置いた作品であるが、その内容と技巧は単なる娯楽音楽の域を抜け出たものになっている。楽想はいきいきとして性格的であり、それがこんにちも愛聴されるゆえんだらう。

この種の作品の通例としてレコードは有名オーケストラの主力メンバーによるものが多く、とくにウィーン・フィルの楽員たちが昔からいくつかの名盤を出している。その中ではまず、一九七五年録音のウィーン・フィルハーモニー室内アンサンブル盤を挙げておこう。のびのびと気分たつぷりに歌いながらも雰囲気は流されず、表情過多を厳しく退ける引き締まった演奏を展開しており、音楽的な純度がきわめて高い。ごく新しい録音にウィーン八重奏団員の「新盤(レコードの英語表記では「新ウィーン八重奏団」となっている)があり、前者よりもやや肉付きのよいこれも立派な演奏であるが、表情の自然さでわずかに及ばないようだ。ほかにウィーン八重奏団の旧メンバーによる演奏もあるが、時代をさらに溯るとバリリ弦楽四重奏団とウラッハらによるモノラルの名盤がのこっている。流麗典雅そのものの実に美しい演奏だ。ペルリン・フィル関係のレコードはおしなべて技巧の高さがさすがである。



◀VPO室内Ens. (弦楽五重奏のためのフーガ)…G  
-MG1060●新ウィーン八重奏団員 [p三重奏曲第4  
番]…L-L28C1109●バリリSQ, リューム(cb)  
ウラッハ(cl) フライベルク(hrn) エールベルガー  
(fg)…◎W-V I C5384

## ニコロ・パガニーニ

Niccolò Paganini(1782—1840)

### 24のカプリッチョ(奇想曲)

Caprice, Op.1

一八三〇年前後の演奏旅行を通じてヨーロッパ諸都市の聴衆——その中にはシヨパン、シューマン、リストたちもいた——を興奮のつばにたたきこんだパガニーニは、その空前絶後の演奏技巧もさることながら、商才にかけてもなかなかどうしてしたたかな男だった。深く落ちくぼんだ目、青白い顔、骸骨のようにやせこけた長身、そんな悪魔的な容姿が全身黒ずくめの衣装をまとい、舞台上に登場するだけで、会場はもう異様な空気に包まれるのが常だったが、その風貌は必ずしも持病によるものではなく、ときには節食までして無理やりそれを保とうとしたふしがある。彼はまたそのプライベートや芸術を故意に世間から隠蔽することによって、まんまと人々を好奇心の虜にした。巷や客席で怪しげな噂話がささやかればささやかれるほど、彼の思うつぼというわけである。弟子をほとんどとらず、とったとしても奥義を伝授することまでは決してしなかったのも、ひとつには自分の技を秘密のヴェールに包んでおきたかったからだろう。そしておそらく同じ理由から、彼は生前にはごく限られた作品しか出版しなかった。ヴァイオリン独奏曲としてはこの二十八のカプリッチョが唯一のものなのである。

無伴奏ヴァイオリンのために書かれたこの曲集は、パガニーニが駆使したのである。ささまざまなヴァイオリン技法と、ヴァイオリン的表現の粋を、二十四の小品にぎっしりと詰め込んだエチュード風の作品である。とはいえこれが単に技術を展示した標本のようなものではなく、音楽そのものが新鮮で魅力に富み、その発想も靈感すこぶる豊かなものであったことは、のちにシューマン、リスト、ブラームス、ラフマニノフらきわめて多くの作曲家たちがこの曲集の楽想を借りて作品を書いていることをみても明らかだろう。名人芸的な演奏効果と強大な表現力の追究が結果的に音楽の新たな可能性を切り拓いてゆくというのは、この時代の著しい傾向のひとつでもあった。

レコードは名手アッカルドの新録音が筆頭。実をたいへんなテクニクであるが、このように難技巧に正面から挑み、それを苦もなく克服し、なおかつ名人芸を名人芸として強く押し出してはばからない演奏こそ、この曲にはふさわしい。パールマンのヴァイオリンは流麗で音楽がよくふくらんでもいるが、少しおっとりした感じがあるのが物足りないところ。新しい録音にミンツ盤があるが、これはややスケールが小さい。



◀アッカルド(vn) (ネル・コル・ピウ変奏曲, ドウオ  
・メルヴェイニ, ゴッド・セイヴ・ザ・キング変奏  
曲)…G-MG8333~4 ●パールマン(vn)…A-EA  
C81084

## フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert(1797-1828)

### アルペジオオーネ・ソナタ・イ短調

Arpeggione Sonata in a, D.821

シューベルト二十七歳の一八二四年に作曲されたもので、その前年ヴイオラ・ダ・ガンバをもとにウィーンで初めて製作された楽器アルペジオオーネとピアノの二重奏のための、音楽史上でもきわめて珍しいソナタである。この楽器の発明者ヨハン・ゲオルク・シュタウファーか、もしくはいち早く教則本を書いたチェロ奏者ヴィンツェンツ・シュスターからの依頼を受けての作曲だったらしい。アルペジオオーネはひとこと言えばチェロとギターをミックスしたような楽器で、ギターと同じく六本の弦と金属性のフレットを持ち、奏者は楽器を足ではさみ、弓で弦をこすって音を出す。この風変わりな新楽器はしかしさっぱり人気が上がらず、肝心の「アルペジオオーネ・ソナタ」がシューベルトの死後はるかに遠く一八七一年になってようやく出版された(チェロ用の版も同時出版)ころにはもう、ほとんど過去の遺物と化してしまっていた。そのため、以来この曲はもっぱらチェロ・ソナタとして扱われることになったのである。音域がアルペジオオーネの方が高く、またフレットの有無など構造上の違いによる技術的な困難こそあるものの、美しい旋律と親しみやすい曲想に満ちた明快な作品であるところから、こんにちではチェリスト

たちにとつて貴重なレパートリーになっている。いまでは博物館でもなければお目にかかれないアルペジオオーネという楽器のともかくその名前だけはよく知られているのも、ひとえにこのソナタのお陰である。人気作だけにレコードは多いが、上記のような技術上のむずかしさのほか、シューベルトの作品としては珍しく、かすかに通俗的な臭いがあることもないこともあって、本当に心をつつ演奏にはめったに出会うことがない。それでもトルトゥリエとワイスの演奏は早くから定評のあったもので、チェロがみずみずしく品のよい歌を奏でているばかりでなく、知的な音楽性に裏打ちされた造型の美しさも見事である。フルニエの演奏もよい。一九八一年の新録音は小林道夫との共演で、このときフルニエはすでに七十代半ばであったはずだが、腕は多少衰えてもあの気品高いチェロは依然として健在である。やや主観的な表現を思うままに繰り広げて少しも嫌味を感じさせない。そのほかナヴァラとダルコ、古いものではフォイアマンとムーアのレコードなどもすぐれた演奏である。なお、この曲はチェロのパートをヴィオラやフルートで代用する場合もある。そのようなレコードも昔からいろいろ出ている。



◀トルトゥリエ(vc)ワイス(p)[グリーグ/vcソナタ]  
…A-EAC85056(廣盤) ●フルニエ(vc)小林道夫  
(p) [マルティヌー/vcソナタ第1番, ドビュッシー/vcソナタ, シューマン/アダージョとアレグロ] …CS-28AC1296

## フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert(1797-1828)

### ヴァイオリンとピアノのためのソナチネ(全3曲)

Sonatinas for Violin & Piano, Op.137, D.384, 385, 408

ニ長調D三八四、イ短調D三八五、ト短調D四〇八の三曲のソナタ(一般にはソナチネと呼ばれている)をひとまとめにしたもので、作曲は一八一六年の春である。交響曲のジャンルではあの簡素な、しかしとても愛らしい魅力を持つ第五番が生み出されたところで、その第五交響曲や初期の弦楽四重奏曲、ピアノ連弾曲などと同様、家庭音楽会あるいは音楽仲間たちの間での楽しみに供されたものであろう。それはそうとしてもいかにも小型かつ単純で、ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタがとうに暮をおろしたあとということを思い起こせば、形や構造はまったくの逆戻りである。しかし、シューベルトやその仲間の音楽家たちの間で先輩たちが夢想もできなかった新しい音楽の魅力が開発されていたことを、このソナチネも十分に納得させてくれる。まだそれは幼な児かもしれないが、それが成熟の暁にはどんなにすばらしく、恐ろしいことが起こるだろう。十九歳のシューベルトにはその自覚はない。初めのニ長調のソナチネが全三楽章で一番小さく、三曲の中ではひととき有名な作品、残る二曲はいずれもメヌエットを第三楽章とする四楽章構成だが、これらが演奏される機会はあまり多くない。

レコードはしかし三曲全部を収めているのが普通で、よい演奏がわりあい豊富にある。中でもモーツァルトやベートーヴェンのソナタですばらしく息の合ったところをみせているシェリングとヘブラーが、ここでも見事なデュオをきかせているのはさすがだ。すつきりと見通しのよい形式観の中に暖かみのある表情を盛ったヴァイオリンはもちろん、ヘブラーのしっとりしたピアノにもまた強く心を惹かれるものがある。スークとプッフビンダーのレコードはヴァイオリンが優しい表情にこまやかな感情の明暗を描いて実にしみじみときける。音もスーク特有の柔和にほほえむような美音である。残念なのはピアノがいくぶん弱いことで、ヴァイオリンに見合うきめのこまかな弾き方をしていない。シュナイダー・ハンとクリーンの演奏は、ピアノがやや神経質なこと目をつぶれば、ウィーン風な甘さと、これらの作品にふさわしい親密感もあるひき方でたいへん楽しめる。このほかグリュミオーやゴールドベルクらヴェテラン・ヴァイオリニストたちによるレコードもそれぞれ特徴があって悪くないが、もうひとつ、ポベスコと宮沢明子の共演盤も挙げておこう。全体に甘さを抑えた演奏で、ヴァイオリンがとても品がよい。

◀シェリング(vn)ヘブラー(p)〔二重奏曲〕…Ph-18 P C69(廃盤) ●スーク(vn)プッフビンダー(p)〔二重奏曲〕…Ser-EAC30344(廃盤) ●シュナイダー・ハン(vn)クリーン(p)…G-MGW5243(廃盤) ●ポベスコ(vn)宮沢明子(p)…OS-KUX3200(廃盤)



## フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert(1797-1828)

### ピアノ三重奏曲第1番変ロ長調

Piano Trio No.1 in B<sup>♭</sup>, Op.99, D.898

二重奏曲を別にすると、シューベルトはピアノを含む室内楽曲の作曲にはあまり積極的ではなかった。本格的な作品としては五重奏曲へますと二曲のピアノ三重奏曲がのこされているだけである。ピアノ入りの室内楽がサロンの遊戯的音楽という色彩が濃かった時代には、世間の表通りを歩いていなかったシューベルトには需要者の声が届かなかったこともその一因だったろう。それに彼には時間もなかった。なにしろピアノ三重奏曲に本腰を入れて取り組み始めたころには、もう彼は死を目の前にしていたのだから。

この変ロ長調のピアノ三重奏曲は一八二六ないしは二七年の作と推定されている。第二番変ホ長調はなおさらだが、この曲も音楽全体の姿が小さなサークルの枠外まではみ出そうな勢いを持っているところからみて、シューベルトが演奏会で活動する専門の有名演奏家たちと関係を持つことによって生まれたのではないかという推論は正しいように思われる。楽想は素朴で明快、心の屈折はほとんどない。リートのような精神が深く根をおろして、歌謡性が全曲を支配しており、そのことで古くから日本では親しまれてきた。

スーク・トリオの新録音(一九七五年)が過去の幾多の名演奏を凌駕するすばらしいレコードである。いつもながらの緻密で柔軟なアンサンブルの中に、こまやかな情感やふくらしたロマン的叙情が豊かに流れており、ほのぼのとした、ときに熱っぽく高揚する室内楽特有の雰囲気も格別だ。音も実に美しい。ルービンシュタイン、シェリング、フルニエの大型トリオの演奏は彼らの一連の録音の中でも傑出したもののひとつで、くつろいだ歌の楽しさを存分にきかせている。ルービンシュタインだけがほんの少しアンサンブルの中でひとり歩きを始めそうな気配をみせるところがあるのは年(八十七歳)のせいだろうか。カザルス・トリオは日本でこの作品を広く知らしめるのに大きく貢献したいわくつきのレコードである。一九二六年の録音で、音の状態はもちろん最近のものとは比較にならないが、冒頭から吹き出してくるような華麗なロマン的色調は、いまきくとまるでこの曲はこう以外はあり得ないという気概と確信と、そして音楽をする喜びとに溢れているのに驚かされる。このほかごく最近出たレコードにレ・ミュジシャン、ボロディン・トリオの二点がある。どちらも透明感の強いさわやかな演奏だ。

SCHUBERT  
PIANO TRIO IN B-FLAT MAJOR, Op.99  
STEREO, MADE IN GERMANY FOR PHILIPS RECORDS, 1975  
S.M. TRICK



◀スーク・トリオ(ノットゥルノ)…De-OS 7192 ●  
ルービンシュタイン(p) シェリング(vn) フルニエ  
(vc) [第2番]…R-RVC 2074~5 ●カザルス・トリ  
オ(ハイドン/第1番)…MA-GR 70064 ●レ・ミ  
ュジシャン…HM-V I C 4521 ●ボロディン・トリ  
オ: De-OF 7052 (魔盤)

フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert(1797—1828)

弦楽四重奏曲第13番イ短調《ロザムンデ》

String Quartet No.13 in a "Rosamunde", Op.29, D.804

シューベルトの少年時代、一家がささやかな家庭音楽会をまたない楽しみにしたことはよく知られている。彼の父親も二人の兄もいっばしの素人演奏家で、とくに弦楽器が得意となれば、頭数から言っても具合がいいのは弦楽四重奏である。そのときは父がチェロを、フランツはヴィオラを受け持ったが、一番頼りない奏者は実はチェロで、彼がしくじると兄たちではなくフランツがおもむろに中断の合図をして、うやうやしく「お父さん、どこか間違ったのではありませんか」と注意を促すのが常だったという。そんな文字どおりの団欒は、決して裕福でなく、これといった慰安もない彼らにしてみれば、本当にかけがえのないひとときだったろう。シューベルトの弦楽四重奏曲の初期のもの（作品数では全体の四分の三ほどにもなる）は主としてそのような機会のために書かれたもので、彼が作曲家としての厳しい自覚を胸にこの曲種を手がけるようになるのもつとずつとあと、二十代の半ばころからである。そしてその時代に属する完成作品はわずかに三曲しかない。

このイ短調D八〇四はその第一作で一八二四年の作。初演は完成後間もなく実現したが、演奏者はベートーヴェンとも深く関わり合いを持っ

ていた例のシュパンツイヒ四重奏団である。この四重奏団も当時ベートーヴェン、シューベルトのまったく飛び離れた個人的音楽をひいていたのだからたいへんな演奏家たちである（たとえばは一年後にはベートーヴェンの作品一二七を初演している）。この曲を有名にしているのは第二楽章の主題がヘロザムンデ間奏曲第三の旋律によっていることで、俗称ヘロザムンデ四重奏曲もそれに由来するが、美しいのはこの楽章だけではない。むしろシューベルトの音楽をしばしば彩るハンガリー風の楽想による第三、第四楽章が強い特色を持っている。

レコードは現在のところあまり多くない。その中ではイタリア弦楽四重奏団の演奏が出色のもので、持前の張りのある美音でのびのびと歌っており、しかも音楽のデリケートな陰影が見事に描き出されている。プラハ弦楽四重奏団とアルバン・ベルク弦楽四重奏団はいずれも精妙なアンサンブルを展開しているが、前者の繊細な味わいには独特の魅力がある。このほかには現在ベダペスト四重奏団の旧メンバーによるレコードがあるのだが、以前はアマデウス四重奏団やウィーン四重奏団など、よい演奏が少なくなかった。



◀イタリアSQ〔第10番〕…Ph-X7746(廃盤)●ブラハSQ〔第12番〕…De-OX7042●アルバン・ベルクSQ〔第6番〕…T-K17C8323

フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert(1797-1828)

## 弦楽四重奏曲第14番ニ短調《死と乙女》

String Quartet No.14 in d "Der Tod und das Mädchen", D.810

前曲イ短調が出来上がったあと続いて作曲が始められたが、一气には完成できず、一八二六年の一月によく書き終えた。もちろんシューベルトのことであるから、多忙や雑用に追われて中断ということになたのであろうが、作品の持つ強い集中性、一貫性はほかに肩を並べるものがなく、まったく作曲者自身の純粹な自発的生産意欲だけで、まっしぐらに書かれた音楽というようにみえる。第二楽章の変奏曲主題が、歌曲《死と乙女》のあの恐るべき伴奏部によっていることは周知のとおりで、そのために《死と乙女四重奏曲》の名があるが、全曲がその気分の支配下に成り立っていることは疑う余地がない。この作品の中には、死神の声とそれをきく少女の思いとに象徴されるような、やがて襲ってくる避けられぬもの足音と、それをきく人のほとんど絶望的な呻吟と喘ぎがいつぱいで、救いはどこにもない。ほかの曲種と同様、シューベルトは弦楽四重奏曲でも恐ろしい音楽をのこした。しかもこれが一番具体性を持つているかもしれない。

この曲はシューベルトの弦楽四重奏曲の中ではとくにレコードに恵まれていて、新旧の忘れがたい演奏がいくつもある。新しいところではま

ザイタリア弦楽四重奏団の新録音(一九七九年)を挙げておこう。長い演奏歴を積み重ねてきた彼らの深い芸術の奥行をあますところなく明らかにしてみせる名演奏で、円熟した語り口がおのずから醸し出してゆく劇的な気分が類をみない。その一年前、一九七八年の来日公演をライヴ録音したスメタナ弦楽四重奏団盤もすごい。四重奏のこれはまさに名人芸である。端正な造型の中で音楽的な高揚の大きさも見事なものだ。録音の古さを棚上げて書けば、ブッシュ弦楽四重奏団の演奏もきわめて強い感銘を与えるものである。音にも表現法のあらゆる技巧にも本当にドイツ・ロマン主義というものの中でみずから生きた人だけが身につけたものと思われる一種のロマン的なほてりが内在している。それがまるで運命的な重圧感のもとで喘ぐ人の熱い呼吸のようである。このクワルテットのかけがえのない記録である。このほかウィーン、プラハ、メロス各四重奏団のレコードも記憶にのこるが、この曲にはさらにハンガリー弦楽四重奏団、ウィーン・フィル弦楽四重奏団という、いまだではあまりきけなくなってしまうた団体のレコードがのこっているのが興味をひく。とくに前者の演奏はさすがにうまいものである。



◀イタリヤSQ(第12番)…Ph-18PC5521●スメタナSQ(第10番~アレグロ)…De-OS7177●ブッシュSQ…@A-GR70049●ハンガリー-SQ [P五重奏曲「ます」]…Ser-EAC30097

# フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert (1797-1828)

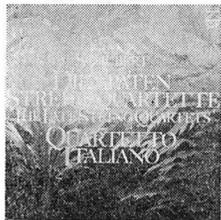
## 弦楽四重奏曲第15番ト長調

String Quartet No.15 in G, Op.161, D.887

シューベルトが作曲した最後の弦楽四重奏曲であるこの曲は、〈死と乙女〉完成のおよそ半年後の一八二六年六月に、ほぼ十日間という短い時間で書き上げられている。初演は死がもう八カ月ほどあとに迫った一八二八年三月二十六日、作曲者がその生涯に開くことのできたたった一度の公的な自作発表演奏会で行なわれ、かのシュパンツィヒ四重奏団の好演もあってなかなかの成功を収めたらしい。ただしその際に演奏されたのは実は第一楽章だけで、全曲初演はシューベルトの死後二十年あまりを経た一八五〇年を待たなければならなかった。そのように生前はほとんど陽の当たらずのままになった曲だが、こんにちでもやはり必ずしもよくきかれているとは言いにくい。シューベルトがこの作品で交響曲への夢を速くに抱いていたことはほぼ間違いないように思われる。それがこの曲の色彩的な魅力として現われていると同時に、また四重奏曲としてはやや中途半端なものになった理由でもある。形は定石通りの四楽章だが規模はすこぶる大きく、シューベルトの弦楽四重奏曲の中では最大のものになっている。そのいつ果てるとも知れないこの作曲家独特の悠久の美は、すぐあとに続く弦楽五重奏曲やハ長調大交響曲に一脈通じる

ものであるが、それらにくらべるところでは、彼の靈感とそれを操る手綱はいくぶん精彩を欠くようにも思える。

〈死と乙女〉とは対照的にレコードは少なく、手許のカタログには四點しか載っていないが、幸いイタリア弦楽四重奏団の名盤が復活している。柔らかな木漏れ日に照らし出されるような、その響きの色あいの美しさと微妙な移ろいが無類だ。アンサンブルもすっかりまとまっている。ジュリアード弦楽四重奏団のレコードは一九七九年の新しい録音だが、部分的に音楽の流れが悪く、表現にも硬いところがなくもない。むしろ同じ年に吹き込まれたアルバン・ベルク弦楽四重奏団の演奏が、引き締まった表現と清新な気分満ちていて楽しくきける。もうひとつのブッシュ弦楽四重奏団の演奏は、この場合〈死と乙女〉よりもわかりにくいところがある。それはたぶんこの演奏がだいぶ沈潜的で、ブッシュたちがこの楽譜の中に読みとっているものが古典的な光をほとんど失って、晦渋な幻想の世界に近いものであるからかも知れない。しかし、それにもかかわらず、おのずと形成されてゆく音楽の運びのたしかに、やはり強い感動を覚えずにはいられない。



◀イタリアSQ [第10番, 第12~14番]…Ph-20PC  
17~9(廃盤) ●ジュリアードSQ…CS-25AC979  
●アルバン・ベルクSQ…A-EAC90049 ●ブッシュSQ…A-GR2236 (廃盤)

## フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert (1797-1823)

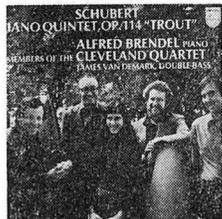
### ピアノ五重奏曲イ長調《ます》

Piano Quintet in A "Trout", Op.114, D.667

レコードという便利なものももしなければ、シューベルトの《ます》があらゆる室内楽曲の中でも最もポピュラーな作品のひとつにのし上がるということもなかったろう。と言うのも、ひと口に「ピアノ五重奏曲」と言ってしまうえば何の変哲もないようだが、この曲はそれの一般的な形であるピアノと弦楽四重奏との組み合わせではなく、ピアノを主役にヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ、それにコントラバスが加わる珍しい楽器編成で、そのためにステータスで演奏される機会は案外少ないからである。もともと作曲家本人としては、この作品を公の場所に持ち出すことは初めからほとんど考えなかったに違いない。作曲の動機は、シューベルト二十二歳の一八一九年の夏、ある音楽マニアの実業家に新曲を所望されたことで、初演もおそらくその実業家宅でささやかに行なわれたのである。そのような成立事情もあって、音楽的団欒と呼ぶにふさわしいほのぼのとした気分と機会音楽的な楽しさがこの五重奏曲にはいっぱい、シューベルトが深刻な顔つきを捨てたときに現われてくる最も美しい資質がここに余すところなく明らかにされている。

レコードはさすがにたくさん出ているが、この曲には決定盤ともいう

べき傑出した一枚がある。一九七七年に録音されたブレンデルとクリーヴランド弦楽四重奏団員らによる名盤がそれだ。綿密この上ない設計と弾力性に豊かな表現によって、曲の魅力のすべてをほぼ完璧に掘り起こした本当にすばらしい演奏で、ことにブレンデルのピアノは、およそ考えうる最上の美感を高らかに誇るものである。リヒテルとポロディン弦楽四重奏団員らによるレコードは一九八〇年のライブ録音。たいへんスケールの大きい演奏で、ときとして室内楽的表現の枠をはみ出そうな勢いであるが、音楽はやはり一風格あるものだ。そのほかギレリスとアマデウス四重奏団らの演奏も悪くない。一方なつかしいところでは、パネンカとスメタナ弦楽四重奏団らによる一枚がある。どこといて派手な魅力はないけれども、引き締まったアンサンブルの中から見事に調和のとれた表現が紡ぎ出されており、ピアノも弦もそのすがすがしい音色にはほれほれとさせられる。さらにモノラル録音まで手を伸ばすと、バドゥラリスコダとウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団らによる名演奏もある。素朴な美しさとなごやかな気分が溢れた心楽しい演奏で、若いバドゥラリスコダのピアノがみずみずしい。



◀ブレンデル (p) クリーヴランドSQ員, デマーク (cb)---Ph-X7843 ●リヒテル (p) ポロディンSQ員, ヘルトナーゲル (cb)---A-EA C90052 ●パネンカ (p) スメタナSQ, ポシュタ (cb) (弦楽四重奏曲第17番)---Sup-O Z7130 ●バドゥラリスコダ (p) ウィーン・コンツェルトハウスSQ 団員, ヘルマン (cb)---@W-V I C5387

## フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert (1797-1828)

### 弦楽五重奏曲ハ長調

String Quintet in C, Op.163, D.956

シューベルト唯一の弦楽五重奏曲で、一八二八年の八月から九月にかけて、すなわち死のわずか二カ月ほど前に作曲されたものと推定される。ハ長調大交響曲の後であり、この五重奏曲以後、器楽の大作はピアノ・ソナタがあるのみで、もちろん室内楽曲としては最後のものになった。一八二八年十月に試演があったという説がある（シューベルト自身はきいていない公算が大きい）が、公的な場での演奏は生前には確実に行なわれていない。この曲の楽器編成はモーツァルトやのちにブラームスが作曲するような弦楽四重奏に第二ヴィオラを加えた五重奏ではなく、チェロが二挺である。こういう例はポツケリーニにはあることだが、シューベルトの目の前の先輩たちはみられない。チェロ二挺による新しい効果は、響きの重厚さとほとんどシンフォニックと言えるほどの大きな広がり、あるいは一挺のチェロを独奏的に動かして音色の変化を多様にすることができるといえる。これまた非常な大曲で、あらゆる面でハ長調大交響曲に通じ合うものであるが、音楽的靈感の豊かさはむしろそれを凌ぐほどで、〈死と乙女〉とともに、シューベルトの室内楽作品の双璧であると言えよう。

この曲もレコードは結構多いが、スメタナ弦楽四重奏団とサードロのチェロによる演奏が中でも見事である。音の録り方が少し固めのきらいがあるように思うが、円熟したスメタナ四重奏団の腕はこの作品のとうとうと流れる音楽の中すべての脈拍をきかせる。ベートーヴェン後期の四重奏曲ほど沈思の姿ではなく、流動してやまない明暗の交替の息づかいを、この演奏家たちはやや興奮の面持で追跡している。サードロのチェロが完全にこのクワルテットのスタイルに同化しているのは驚くべきことである。ブダペスト弦楽四重奏団とベナル・ハイフェッツは少し古い録音だが、表現が実に折り目正しく、この曲の素顔の迫力を知らされる意味で、やはり忘れがたいものだ。こういう演奏を素気ないとか乾燥しているとかみる見方があるとすれば、それはやはりシューベルトの顔にいつも同じマスクをかけようとするものだろう。この演奏には作者の飽くなき音楽への執念が出ている。比較的新しいレコードの中では、ロストロポーヴィチがチェロをひいた二点のうち、メロス弦楽四重奏団との共演盤がよい。チェロの表情は例によって大きい。メロス四重奏団の確かな重奏力が物を言ってそれがひとり歩きをしていない。



◀スメタナSQ, サードロ (vc) [弦楽四重奏曲第12番]…A-EAC50098 ●ブダペストSQ, V. ハイフェッツ…CS-(廃盤) ●メロスSQ, ロストロポーヴィチ (vc)…G-MG1136

## フランツ・ペーター・シューベルト

Franz Peter Schubert (1797-1828)

### 八重奏曲へ長調

Octet for Strings & Winds in F, Op.166, D.803

ベートーヴェンと深い関わりがあった例のルドルフ大公の侍従長に、トロイヤール伯爵フェルディナントというこれも音楽には目のない貴族がいた。かねてからベートーヴェンの《七重奏曲》がひどく評判がよいのを目の当りにしていた伯爵は、どうやら自分でもあのような作品がほしいとなってしまったらしい。ベートーヴェンの七重奏曲をモデルに、という具体的な注文をおそらくつけて、作曲をシューベルトに要請する。こうして一八二四年の早春にこの愛すべき《八重奏曲》は書かれた。ヴァイオリンを一挺増やして八重奏曲としただけで残りの楽器編成はベートーヴェンの場合とまったく同じ、楽章の数も六つ、スケルツォとメヌエットの位置こそ入れ代わっているものの、どちらも第一楽章はアダージョの序奏に始まるソナタ形式、第二楽章がアダージョ、第四楽章がアンダンテの変奏曲、そして第六楽章が短調の序奏付きと、実際これほど姿形がよく似た作品も珍しい。ともあれシューベルトは、ベートーヴェンの初期を模倣することでひと昔前の娯楽音楽の姿を自分の作品の中に持ち込むことになったが、一時代前の喜遊の精神は、ここでは仮空のそれに変わらざるを得ない。つまり懂れ、空想の喜遊である。なおトロイヤ

伯爵はクラリネットをよくしたというから、彼がそのパートを吹いての私的な演奏の機会ももちろんあったことだろう。公式の初演は一八二七年で、その際にはベートーヴェンの七重奏曲の初演と同様、シュパンツィヒがヴァイオリンをひいている。

レコードは以前からウィーンの演奏家たちの独壇場の感がある。手許の目録にもそのようなものが四点あって、団体名がまぎらわしいばかりでなく、演奏もそれぞれ見事で甲乙つけがたい。録音の新しい方からみてゆくと、まずウィーン室内アンサンブル（ベートーヴェンの七重奏曲の「ウィーン・フィルハーモニー室内アンサンブル」とメンバーはほとんど同じ）は音楽の自然な流動感と美しく整った表現が特色。ほとんど同じ顔ぶれが来日の折に録音したもの（レコードの表記ではウィーン室内合奏団となっていて）もあり、前者にくらべるといくぶん即興的なふくらみを持っている。ウィーン八重奏団の新盤（レコードの英語表記では新ウィーン八重奏団となっている）は弾力のあるつややかな響きと重奏のいきいきした呼吸がすばらしい。ボスコフスキーらによるその旧盤は音色も表現もぐんと素朴だが、音楽には独特の風格がある。



◀ウィーン室内Ens. …G-28MG0055 ●ウィーン室内合奏団…OS-KUX3167(廃盤) ●新ウィーン八重奏曲…L-L28C1254

## フェリックス・メンデルスゾーン

Jakob Ludwig Felix Mendelssohn (1809—1847)

### ピアノ三重奏曲第1番ニ短調

Piano Trio No.1 in d, Op.49

メンデルスゾーンの室内楽曲は二重奏から八重奏まで多岐にわたり、総数は生前に公表されなかったものまで含めると二十曲を越える。若いころは自邸での演奏会で、長じてはシューマン夫妻、あるいはゲヴァントハウスの楽人ら周囲の演奏家たちによって、当時は鳴らした曲もあったが、いまでは広くきかれるものは数曲に限られてしまった。やや意外なことだが、室内楽はこの作曲家の音楽的発想にとって最上の受け皿ではなかったのかも知れない。しかし概観して彼の室内楽曲は外見は新味が少ないとしても、音楽の質はずいぶん大胆にロマンティックであることはもつと強調されてよいだろう。

ピアノ三重奏曲は三曲あり、一八二〇年作のハ短調（作品番号なし）は埋れたが、残る二曲、とくにこのニ短調はメンデルスゾーンの代表作のひとつに挙げてよい充実した作品である。この曲に対するシューマンの評価は高く、ベートーヴェンの変ロ長調（大公）、ニ長調（幽霊）、シューベルトの変ホ長調（第二番）などと肩を並べる傑作としているが、それは決してお世辞ではない。作曲は一八三九年、メンデルスゾーンが最も元気に活動していたところで、馥郁たるロマン的香気はやや淡彩な色調で

盛られているあたり、この曲種でも屈指の美しい個性と言えるだろう。

レコードはスーク・トリオの演奏がすばらしく美しい。柔らかく、ほのぼのとしたロマン的な体温の快さは格別のもので、アンサンブルの緻密さも目をみはらせる。フツフロのチェロの美しさはこの演奏ではとくに精彩がある。一九二七年録音のカザルス・トリオのレコードは音の状態で、いまの演奏家にはこのように気分を大づかみにして高揚するやり方はみられないし、やっても場違いである。コルトーなど、心の弾みもはしやぎもきこえるような演奏である。カザルスがホルシヨフスキーらと組んだ録音は、ケネディ時代にホワイト・ハウスに呼ばれたときのライヴ。徹底してカザルス中心の演奏であるのはまあよいとしても、楽章ごとに拍手が入るなどその場の雰囲気になじみにくいものがあり、録音技術もいまからみると稚拙である。プレヴィン、鄭京和、トルトゥリエ盤はごく新しいレコーディング。ピアノに軽く流すようなところがあるのを大目にみれば、三者三様の個性でなかなか楽しめる。ボザール・トリオ才盤は第二番ハ短調も収めた珍しいもの。



- ◀スーク・トリオ [ブラームス/第3番]…Sup-OW  
7766 ●カザルス・トリオ [シューマン/第1番]…  
◎A-GR70007 ●プレヴィン (p) 鄭京和 (vn) トル  
トゥリエ (vc) [シューマン/第1番]…A-EAC  
90041 ●ボザール・トリオ [第2番]…Ph-13PC55

## フェリックス・メンデルスゾーン

Jakob Ludwig Felix Mendelssohn (1809—1847)

### 弦楽八重奏曲変ホ長調

Octet for Strings in E<sup>b</sup>, Op.20

シューベルト一家の家庭音楽会がしよせん庶民のささやかな楽しみ  
域を出るものではなかったのに対して、メンデルスゾーン邸のまばゆい  
大広間で開かれる日曜音楽会は、当時の一流音楽家たちも常に出入りし  
て、その豪華さはベルリンの街の話題になったほどである。メンデルス  
ゾーンの少年期の作品の大半はその音楽会を前提にしたもので、室内楽  
曲がたくさん書かれているのもそのことと関係がある。それにしても、  
作曲家としてはまだまだたく無名の少年でありながら、作品を書くそば  
からそれがすぐれた演奏家たちの手で音になり、しかもその場で暖かい  
助言や適確な批評をさえ仰ぐことができるとは、何とまあ恵まれた環境  
だったことだろう。

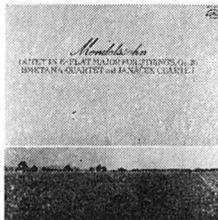
メンデルスゾーン十六歳の一八二五年に作曲された弦楽八重奏曲も、  
もちろん日曜音楽会のプログラムを飾ったに違いない作品のひとつであ  
る。楽器編成は弦楽四重奏のそれをそのまま二倍にした勘定で、ほぼ同  
時代人のシュポアの〈複弦楽四重奏曲〉を思わせるが、シュポアの  
ように二組の四重奏を対立的に扱うという手法はとっていない。むしろ  
メンデルスゾーンがさらに若いときにたくさん書いた弦楽のための交響

曲の室内乐的結晶と言えるだろう。楽想は美しくこんこんと湧き出る趣  
を持ち、構成もしっかりできて実によくまとまっている。緩徐楽章の叙  
情、この作曲家独特の妖精のようなスケルトツォ、八つの楽器のフーガで  
大きく盛り上げるフィナーレとどれも見事なものであるが、二つの印象  
的な主題を執拗に繰り返しながらひたすら前進してゆく第一楽章に、筆  
者はある種の凄味を感じる。

スメタナ弦楽四重奏団がまずヤナーチェク弦楽四重奏団と、さらに最  
近パノハ弦楽四重奏団とも組んでこの曲を録音しており、レコードはそ  
の二点に尽きると言ってもよい。アンサンブルの隙のなさといい、音楽を  
満たす熱い生命感といい、訴えかける力の強さといい、両者とも驚異的  
だ。二つの演奏の違いは、ヤナーチェク盤の方が響きは柔らかめだが表  
現の起伏はむしろずっと大きく、第二楽章の気分の深さなどにはやはり  
一日の長があるように思う。パノハ盤は来日時のライヴ録音で、録音の  
すばらしさも手伝って響きの純度がすこぶる高い。表現も非常にすつき  
りしていてまるで曲の構造が透けてみえるようだが、ヤナーチェク盤に  
くらべると足どりがだいぶ直線的である。

◀スメタナSQ、ヤナーチェクSQ…Sup-OZ7133

●スメタナSQ、パノハSQ…De-OZ7069



## フレデリック・フランソワ・ショパン

Frederic François Chopin (1810—1849)

### チェロ・ソナタ・ト短調

Cello Sonata in g, Op.65

ショパンは根っからのピアノ人間だった。彼の音楽の発想がこの楽器以外の場所から芽を吹くことはまずあり得なかったし、ピアノというたつたひとつの楽器を通じてすべてを言い尽くすことのできたこの特異な天才にしてみれば、表現手段を他に求める必要性を感じるなどそもそもなかったらう。それでも室内楽の領域に属する作品が五曲のこざれているのは、それらが一種の機会音楽として作曲されたからである。そして五曲のうち三曲までがチェロとピアノの二重奏曲で占められているのも、名チェリストないしはチェロをよくする貴族との接触という現実的な背景があったためだった。とは言えやはり、チェロに対する作曲者の興味もそこにはいくらかはなげなければならなかったはずで、さしあたりショパンが関心を寄せた楽器を挙げれば一にもちろんピアノ、二、三、四がなくて五にチェロということになるかも知れない。

チェロ・ソナタはショパン三十五歳の一八四五年からその次の年にかけて作曲された。ピアノ曲で言えば〈幻想ポロネーズ〉や〈舟歌〉とはほぼ同じころ、ちょうどジョルジュ・サンドとの破局、さらに健康の絶望的な悪化がもう目の前に迫り、創作力も急激に落ち込む寸前である。し

かしこれは、同じ時期の作品にときみられる一種妖しいまでの美しさを垣間見せて、ピアノ曲以外の彼の作品の中では疑いなく最も重要な、魅力ある一曲になっている。なおこのソナタは、ショパンのパリ時代初期から長く親交のあった音楽家のひとりで、晩年の孤独の作曲家を最後まで力づけたことでも知られるチェロ奏者フランシヨームのために書かれた。そして公開の初演は一八四八年二月十六日のプレイエル・ホールでの演奏会、すなわちショパンのパリにおける最後のステージで、もちろんフランシヨームとのデュオで行なわれている。

レコードは次々に出ているが、室内楽曲の多くがそうであるように廃盤に追い込まれるのも早く、ひと昔前にきき親しんでいたものは揃ってカタログから消えている。しかし最近ロストロポヴィチとアルゲリッチが共演したすごい演奏が登場した。それぞれの楽器の驚異的なうまさ、さらに表情の豊かさと濃密さにおいて傑出しているばかりでなく、合わせものとしてのおもしろみも抜群で、二つの偉大な個性がからみ合うようにして互いを触発する。この曲のピアノ・パートがこんなにも美しい言葉を語る演奏というのもおそ前例がなかった。



◀ロストロポヴィチ(vc)アルゲリッチ〔序奏と華麗なるポロネーズ、シューマン/アダーショとアレグロ〕…G-28MG0026

# ロベルト・アレクサンダー・シューマン

Robert Alexander Schumann (1810-1856)

## 弦楽四重奏曲(全3曲)

String Quartet (Complete)

それまでほとんど見向きもしなかった分野に突如踏み込んだかと思うと、まるでものに憑かれたようにそれに熱中する。そして次の年にはまた別の分野に——といういささか極端な、一見理解に苦しむ行動がシューマンの一時期にあったことはよく知られている。それはしかし、必ずしも内に狂気を秘めた天才ならではの奇行であったわけではなく、ましてや単なる気まぐれの結果では決してない。一八四〇年が「歌曲の年」となったのも、その年によく成就したクララとの恋愛をめぐる情熱の爆発と無関係ではなかったはずだし、次の年に一転して交響曲が、さらに翌一八四二年に室内楽曲が集中的に手がけられたのは、明らかにシューマンの胸中にある古典への思いが急激に強化されたことを物語る事実である。

作品番号四一番のもとに一括して発表された三曲の弦楽四重奏曲もその「室内楽曲の年」と呼ばれる一八四二年の作で、所要日数はほぼ五十日というたいへんな速さで全曲が一気に完成されている。そしてメンデルスゾーンに捧げられ、ダーヴィトラゲヴァントハウスの演奏家たちが試演も初演も引き受けた。このジャンルでは比較的目的に位置にあ

るようだが、シューマンの作曲活動の中では重要な意味を持ち、また事実あとも先にもない独自の美の領域を造ることに成功した作品群と言えよう。三曲はそれぞれ固有の性格を持つが、古典的形式と弦楽四重奏の書法を強く意識し、それを自己のものとして確保する段階から、次第に拘束感が消えて彼の内部の音楽が自由に動き出すまでの足どりが、実に明瞭に三曲に刻印されており、その偽らざる自己告白がそのままこれらの魅力となっているのである。

現在のところレコードはきわめて少なく、全曲まとめてきけるのはジュリアード弦楽四重奏団による二枚組だけである。この演奏は殿しい。弦の音の質が非情な硬さと鋭さを持ち、音感覚の面でとがった感を与え、点でどうもなじみにくいのが、各パートの精細なことは驚くべきものである。なおかつてイタリア四重奏団の名盤があったが、これが廃盤となっているのが惜しまれるところ。第一番イ短調単独なら幸いウィーン・ムジークフェライン弦楽四重奏団の好演がある。イ短調にはまたカペー四重奏団の復刻盤もあるが、線の動きが微妙な作品であるだけに、このひどく古い録音では作曲者の苦心の場はききとれない。



- ◀ジュリアードSQ (全曲)…CS-SOCL 102~3  
●ウィーン・ムジークフェラインSQ [第1番、ブラームス/第3番]…L-S LA6410(廃盤)●イタリアSQ…Ph. (廃盤)

# ロベルト・アレクサンダー・シューマン

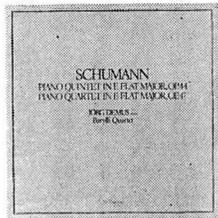
Robert Alexander Schumann (1810—1856)

## ピアノ四重奏曲変ホ長調

Piano Quartet in E<sub>b</sub>, Op.47

弦楽四重奏曲を書いたのちのシューマンはなおも室内楽に没頭する。そして次項のピアノ五重奏曲に続いて十一月に同じく変ホ長調のこのピアノ四重奏曲が作曲され、室内楽曲の年の最後を飾った。この年に三曲の弦楽四重奏曲を書いたあと、彼は二度と弦のみの室内楽曲には戻ってこない。もうピアノを含む編成の作品ばかりになり、それも後期には変わった楽器を登用して音色に彼のファンタジーを託すようになる。ピアノ三重奏曲やヴァイオリン・ソナタといった伝統的な曲種は別にして、クラリネット、オーボエ、ホルンなどがピアノと組み合わされ、ユニークな小品が生み出された。古典的な四重奏はつまりこのピアノ四重奏曲で打ち止めになるわけだが、音楽的な内容においてもたしかにここではひとつの頂点が築かれている。この作曲家にとって大きな課題であったと思われる構成と感情表出の問題、言いかえれば古典的形式とロマン的内容との調和と、もうひとつピアノの室内楽的用法のいずれもが、個人的なやり方で解決されており、ピアノ五重奏曲にくらべていっそう徹底してシューマン的である。しかも楽想はいずれも難産の痕跡を少しもみせず、詩心から湧き出た趣を持っている。

この傑作もしかし人気に関する限りピアノ五重奏曲に大きく遅れをとっているようで、レコードは存外少ない。その中では録音はモノラルながら、デムスとバリリ弦楽四重奏団員が見事な演奏であった。バリリ全盛時代の記録で、その清潔な雅味は古典からロマン派を包括的にとらえ得たもののみが奏でられる種類のものであり、若いころのデムスの純朴な音楽性はそのバリリたちの豊饒な音楽の懐の中で存分に花を開いている。それから四半世紀近くがすぎたごく最近（一九八〇年）、デムスはヘッツェルらいわゆるウィーン室内合奏団の面々とともにこの曲を再録音した。音質はむろん旧盤の比ではなく、また演奏もさすがによく練れてはいるものの、この場合気分的にいっそう引き締まったものがほしい気がする。グールドとジュリアード弦楽四重奏団員のレコードも一見おもしろそうだが、合わせものではこのピアノニストの意外な弱みが顔をのぞかせることがあるようだ。ボザール・トリオとローズのヴィオラによる演奏はやや特色が薄い。しかし重奏力には職人的なしたたかさがある。このほかユボーとヴァ・ノヴァ四重奏団のすこぶる熱っぽい演奏が、シューマンの「室内楽全集」から抜き出されて分売されている。



◀デムス(p)、バリリSQ員(p五重奏曲)…@W-V I C5389 ●デムス(p)、ウィーン室内合奏団員(p五重奏曲)…Eu-K25C166 (廃盤) ●グールド(p)、ジュリアードSQ員(弦楽四重奏曲全曲)…CS-SOC L102~3 ●ユボー(p)、ヴァ・ノヴァSQ員(p五重奏曲)…E-RE L8324

## ロベルト・アレクサンダー・シューマン

Robert Alexander Schumann (1810—1856)

### ピアノ五重奏曲変ホ長調

Piano Quintet, in E<sup>b</sup>, Op.44

シューマンの室内楽曲の中でおそらくこれは最も広く愛好されている作品だろう。室内楽曲の年に弦楽四重奏曲三曲に次いでその余勢を駆るようにして書かれた。四弦にピアノを参加させることによって、シューマンの気持は閉じこもった弦四重奏の世界から、一挙に華麗な花を咲かせるように外向きに変わったようにみえる。弦楽四重奏曲第三番でたどりに着いた彼の音楽は、ピアノという楽器を春の陽光として咲き誇る。そしてそれが結実するのが次に書かれるピアノ四重奏曲(前項)である。この五重奏曲は出来上がったときからすこぶる評判が高かった。メンデルスゾーンがピアノを弾いて試演し、若干の忠言をした。それを待つまでもなく、この曲にはメンデルスゾーンの書法の影響は少なくないと思う。リストがこの曲をきいて「あまりにもライプツィヒ的だね」と言ったのはそのことと縁がありそうだ。しかし、そのリスト派のベルリオースはライプツィヒでこれをきいて深く心を動かされ、楽譜をパリに持ち帰った。

なお、ピアノと通常の弦楽四重奏による五重奏曲は古典の時代に名作がなく、これ以後ロマン派の作曲家たちによって活用され、いくつかの

傑作が生み出されるが、それがシューマンのこの作品でのピアノと弦との美しい語り合いから流れ出たものであることは誰しも認めるところだろう。

レコードは比較的豊富だが新しい録音にはこれといったものがなく、古くから名盤としてきかれてきたものばかりを挙げることになりそうだ。最も流麗でかつほのぼのとした暖かさを持つのはシュテパンとスメタナ弦楽四重奏団の演奏である。アンサンブルはどこまでもきまこまかく、美音と柔らかいリズムがすばらしい。華美を避けて間接光のもとにこまやかな叙情を浮き彫りにしてみせるような芸当はさすがヴェテランのひきぶりである。ルドルフ・ゼルキンのピアノによるレコードは二種類あり、生命感漲るブッシュ弦楽四重奏団とのモノラル録音も、また風格豊かなブダペスト弦楽四重奏団とのステレオ盤も、どちらも感動的な名演奏だ。やはり古い録音(モノラル)だが、デムスとバリリ弦楽四重奏団の演奏もきき逃すわけにはゆかない。雅味が実に豊かで、四重奏曲の場合よりもいっそう流暢である。なお、この五重奏曲にもデムスとウィーン室内合奏団による新しいレコードが出ている。



- ◀シュテパン(p)スメタナSQ [ドヴォルザーク/p五重奏曲]…A-EAC50100 ●ゼルキン(p)ブッシュSQ [ブラームス/p三重奏曲第2番]…◎CS-SOCU16 ●ゼルキン(p)ブダペストSQ [ブラームス/弦楽四重奏曲全曲]…CS-SOCL225~6 ●デムス(p)バリリSQ (p四重奏曲)…◎W-VIC5839 ●デムス/ウィーン室内合奏団…Eu-K25C166 (魔盤)

# セザール・オギュスト・フランク

César Auguste Franck (1822—1890)

## ヴァイオリン・ソナタ・イ長調

Violin Sonata in A

十九世紀のヴァイオリン・ソナタの傑作を厳選すれば、ベートーヴェン、ブラームスのそれと、あとはさしづめこのフランクを挙げることになるだろう。フランクの最後の時期を美しく飾る一連の室内楽曲の第二作に当たるもので、彼が六十四歳を迎える一八八六年に作曲された。フオーレの最初のヴァイオリン・ソナタに十年遅れ、ドビュッシーのそれには二十年近く先んじている。ブラームスはこの年に最後のヴァイオリン・ソナタに着手した。

曲はフランクと祖国(ベルギー)を同じくするイザイの結婚の祝いとして贈られており、作曲者の胸にはこの名ヴァイオリニストの高朗たる演奏スタイルへの思いがあったと想像できる。実際フランクという作曲家はそのとりまき連が語るような超俗的なものではなく、甘美さもはやかさも心得た作曲ぶりであるが、彼の抜きがたい個性は、楽想に一種ものを含んで吹つきれぬ言いまわしがあることと、それを放棄するだけの器用さもなければ、また安易な妥協もしなかった点にある。ヴァイオリン・ソナタはそういう作風の中ではともかく飛び抜けて全体の見通しがよく、完璧な仕上がりをみせた大傑作で、ことに第三楽章の幻想性とカ

ノン的手法による清澄な終楽章とはそれぞれ卓越しているばかりでなく、絶妙な対照をもって結び合っている。

レコード目録をみると名だたる奏者たちがずらりと並んで壮観だが、音の古さを納得の上で、まずティボーとコルトーの演奏を永遠に価値を減ずることのない名演として挙げたい。もちろんこの夢幻性にふくらんだ表現がこの曲の唯一のひき表わし方ではないが、深いところから音の表面に盛り出てくるものの大きさ、こまやかさ、詩の豊富さはきき尽くし得ないものがある。ヘクロイツェル・ソナタで細く興奮していたティボーのヴァイオリンは、ここでは芯があり、精神的にたくましい。名前で選べば次はオイストラフとリヒテルのデュオだが、この演奏はさすが巨峰的な偉容ながら、重奏としての美感がもうひと息だ。むしろフランチェスカッティとカサドシュ(モノラル)の演奏に老熟した深い味があり、また新しいところではボベスコとジャンティの日本録音がなかなか美しい。なお、この曲はヴァイオリンのパートをチェロ(もしくはフルート)で演奏することがあり、その種のレコードの中では新鋭マイスキのチェロとアルゲリッチの共演盤が出色の一枚である。



◀ティボー(vn)コルトー(p)(フオーレ/第1番、xn)とpのための子守歌…●A-GR70011 ●オイストラフ(vn)リヒテル(p)(ブラームス/第3番)…Me-VI C3115 ●フランチェスカッティ(vn)カサドシュ(p)〔ドビュッシー&ラヴェル/vnソナタ〕…●CS-20AC1901 ●ボベスコ(vn)ジャンティ(p)(フランク/vnソナタ)…Ph-30PC10 ●マイスキ(vc)アルゲリッチ(p)〔ドビュッシー/vcソナタ他〕…A-EAC90136

## セザール・オギュスト・フランク

César Auguste Franck (1822-1890)

### ピアノ五重奏曲へ短調

Piano Quintet in f

フランク後期の室内楽名作群(三曲)の第一作で、作曲者五十七歳の一八七九年の完成である。まだ一部の専門家の間でしかなかったけれども、この曲によってフランクがようやく作曲家として注目され始めたという意味で、これは彼の「遅すぎた出世作」と言えるかも知れない。もともと、一八八〇年の初演についてはあまりうれしくない話も伝わっている。その日ピアノを弾いたのはサン・サーンスで、曲は彼に献呈されたのであるが、当人はどういうわけかひどく機嫌が悪く、演奏が終わると楽譜をピアノの上に放り出したままさっさと帰ってしまったらしい。「わが友サン・サーンスへ」と書かれたその自筆譜は、あとで紙くずの山の中から発見されたという作り話のようなエピソードがある。ちなみにフォーレの最初のヴァイオリン・ソナタが初演されたのはこの二年前で、多くの聴衆がそっぽを向く中でひとりその真価を見抜いていたのが、ほかならぬサン・サーンスだった。大家の目利きもやはり常に公平というわけにはゆかないようである。ついながらそのサン・サーンスもピアノ五重奏曲をいち早く(一八五八年)作曲しており、レコードもあるのでフランクとききくらべてみるのも一興だろう。音楽的資質が正反

対の方向を向いて、この編成に期待する響きからしてまったく別物なのである。それはともかく、フランクが公職のオルガニストであることを作品の上に強く反映していたそれまでと違って、この曲では強烈な個人的告白が前面に出る。ずいぶんと推敲をへて、決して靈感の導きの豊かさに溢れたままの音楽ではないが、われわれがこの曲に感ずる魅力はその裸身のフランクなのである。

さて、以前はリヒテルやフランソワがピアノを弾いた興味深いレコードがあったがいまは姿を消しており、そうかといって新しい吹き込みがあるわけでもない。従って非常に地味な演奏だが、ベルナトーヴァとヤナーチェク弦楽四重奏団のレコードあたりを選ぶことになる。重奏の手堅さやすっきりした表現が非凡である。カーゾンとブダベスト四重奏団は一九五六年ワシントン国会図書館におけるモノラルのライヴ録音で、演奏は透明感の強い独特のもの。しかし音質がよくない。同じピアノとウィーン・フィルハーモニー四重奏団の録音はそれよりは少し新しいステレオ盤だが、この演奏には一種の腰の弱さがある。シャンピとカペー四重奏団盤は貧しい音の状態が致命的だ。

◀ベルナトーヴァ (p) ヤナーチェク SQ…Sup-OZ  
7140 ●カーゾン (p) ブダベスト CQ [フォーレ/P  
四重奏曲 第1番]…CS-SOCU 44 ●カーゾン  
(p) ウィーン・フィルハーモニー SQ…L-GT9369  
(魔盤) ●シャンピ (p) カペー SQ…Ro-OZ7508



## ベドルジーハ・スメタナ

Bedřich Smetana (1824—1884)

### 弦楽四重奏曲第1番 短調《わが生涯より》

String Quartet No.1 in e "Aus Meinen Leben"

第一楽章——青春時代の芸術への思い、ロマンティックな情感、莫然とした憧れ、そしてやがてくる不幸の予感。第二楽章——青春の日々の楽しい思い出。そのころ私はダンス音楽を作曲し、熱烈なダンス狂として知られていた。第三楽章——のちに妻となった少女との初恋の幸福な思い出。第四楽章——民俗的要素を音楽的に扱う技法を自分のものにしたうれしさ。しかしその喜びは中断し、突然カタストロフィがやってくる。希望に満ちた昔の日々を思うと、やりきれない無念さが胸にこみ上げてくる。

以上はこの曲の各楽章が描かんとする内容について、スメタナ自身が書きのこしたコメントの大意である。すなわちこの曲は、弦楽四重奏曲という抽象的な曲種をいわゆる標題音楽として書いたすこぶる異例の作品ということになるわけだ。作曲は一八七六年、スメタナ五十二歳の年で、精神病の兆候はまだ現れないが、聴覚は二年前にほぼ完全に失われている。悲劇的に人生の幕を閉じることを覚悟した作曲者は、ここで自分の歩んできた道を音楽によって振り返ってみようとしたのだろう。同じころ連作交響詩《わが祖国》の作曲も並行して進められており、そ

れが民族主義者としてのスメタナの精神を誇り高く謳い上げたものであったとするなら、この弦楽四重奏曲の方は、いっそう個人的な内面告白をそっと書き綴った作品なのである。スメタナ自身によればこれは伝統的な弦楽四重奏書法からみると破格のもので、事実、初めは様式的にまともでなく、四重奏としては演奏困難ということで初演延期の憂き目をみているが、必ずしも彼が言うほど大きく古典の枠を破ってはいない。ただ彼にしてみれば、このジャンルにきわめて具象的な個人体験を刻印したことに、多少の気がねもあったかも知れないだけのことである。

レコードは数点あるが、実際はスメタナ弦楽四重奏団のまったくのひとり舞台である。完璧に彫琢された恐ろしく隙のない演奏であるばかりでなく、技術的な問題をはるかに超えて各楽章の発想の根源的事象、感情が音楽的に語り尽くされ、ききとれる意味の世界はいつもくつきりとして限りなく豊かであり、しかも表現が驚くほど新鮮だ。新旧三種類の録音がありどれも名演だが、音の鮮度からみて一九七六年の最新盤を聴きたい。

◀スメタナSQ'76年録音(第2番)…De-O S7180



## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

### ヴァイオリン・ソナタ第1番ト長調《雨の歌》

Violin Sonata No.1 in G "Regenlied", Op.78

ブラームスのこのしたヴァイオリン・ソナタは全部で三曲、いずれも四十代後半から五十代半ばの間に書かれており、それぞれ固有の性格を持つとともに驚異的な美しさを競い合う稀有の名作群である。思うにそれらはこのジャンルが到達したひとつの頂点で、あえて様式上の相違を無視して比較すれば、このジャンルから早々と手を引いたベートーヴェンもさすがに一目置かざるを得ない途方もない高さを手に入れたものである。

これ以前にも発表されないまま破棄されたヴァイオリン・ソナタはあったらしいが、ともかくこの第一作のト長調が世に出たのはブラームス四十六歳の一八七九年、ヴァイオリン協奏曲が書かれた次の年で、すでにほとんどあらゆる形態の秀作が出揃った熟成の時期のさなかである。交響曲は第二番まで世に出ている。室内楽曲も、クラリネットを含む一連の作品群を別にするれば、これ以後に初登場する曲種は弦楽五重奏曲しかない。ブラームスのヴァイオリン・ソナタは、それまでの多くの作曲家のそのように、若い修練時代の機会音楽的ないしはそれに準ずる性格のものとしては出されなかつたところに、その重みがあると言えるだ

ろう。そして、主として第一交響曲で古典と自己とのひとつの解決を待っていたブラームスは、この最初のソナタから完全に、そして気安く、ブラームスそのものであった。この曲は《雨の歌》の俗称を持つが、それはグロートの詩による同名のリート（作品五九の三）の旋律を第三楽章の主題に転用し、さらにそれに似た旋律を第一楽章の主要主題としているためである。

たぐさんの録音があるが本当によい演奏となるとこれはごく少ない。オイストラフとパウエルのレコードはそんな中でも非常に強い感銘を受けたもののひとつで、ピアノがやや坦々として表情の彫りが浅く、早く言えば伴奏風に過ぎるものも足りぬところだが、ヴァイオリンには本当に立派な深い精神の響きがある。ブッシュとゼルキンの演奏も、音の古めかしさを忍べばその渋い味わいがききもの。また「ジョコンダ・デ・ヴィートの芸術」という大きなセットに入っている彼女とフィッシャーの演奏はたいへんすばらしい。若手では堀米ゆず子とエインデンが大健闘。内面の深いところを描き尽くすにはもうひと息というところだが、このヴァイオリンの隙のない美感是非凡である。

◀オイストラフ (vn) パウエル (p) [タルティエニ/vnソナタ・ト短調、ホ短調]…Me-V I C3113 ●ブッシュ (vn) ゼルキン (p) [ベートーヴェン/第2番パッサカリア/無伴奏 vn バルティータ第2番]…ⓐA-G R2245 (鹿盤) ●デ・ヴィート (vn) フィッシャー (p) [ジョコンダ・デ・ヴィートの芸術] ⓐA-G R70102 ●堀米ゆず子 (vn) エインデン (p) [第2番]…フォンテック-FONC8001



## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

### ヴァイオリン・ソナタ第2番イ長調

Violin Sonata No.2 in A, Op.100

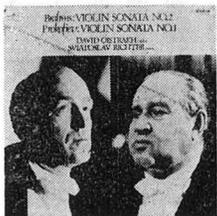
ブラームスの第一交響曲の終楽章主題はベートーヴェンの第九の「歓喜に寄す」の主題にそっくりだ、という意見がある。だがこの比較は少し強引すぎはまいか。なるほどそれらが難産の末に生まれ出てくるまでの道すじには共通点があるとも言えるし、また楽想の雰囲気もごく大ざっぱにみればだがどこことなく似通った感じがなくもないけれども、しかし旋律そのものをくらべてみる限りでは、しばしば類似性を指摘されるメロディのペアの中でも、むしろこれほど似ても似つかない例も珍しいと思うのだがどんなものだろう。

さて、このヴァイオリン・ソナタ第二番の冒頭主題については、ワグナーの「ヘマイスター・ジンガー」でワルターが歌う例の「懸賞の歌」の出だしの部分が必要引き合いに出される。これはたしかに誰がみてもよく似ている。一小節目の音の動きなどはまったく同じである。ブラームス自身は果たしてそのことを意識していただろうか（もちろん「ヘマイスター・ジンガー」はとうに世に出ていた）、と気をまわしたくなるのが人情だが、それはしよせん下種の勘繰りというものかも知れない。その点についてガイリンガーは「ブラームスを弁護することに一語でも費すことは

彼に対する侮辱になるだろう」と書いているが、まったく同感である。

この程度の類似は実はごくありふれたことであって、たまたまこの場合はどちらも名曲中の名曲、しかもブラームス対ワグナー、純粋器楽対楽劇と、興味をひく材料が揃っているので話題になりやすいだけなのである。作曲されたのは第一番から七年をへた一八八六年で、チェロ・ソナタ第二番やピアノ三重奏曲第三番も同じ年に誕生している。

この曲にはオイストラフとリヒテルによるたいへんな名盤がある。一九七二年、モスクワにおける実況録音で、いかにもそういう場らしい一種の気分の高揚感と、聴衆を離れての二人の巨匠の音楽的沈潜とが両々相まって、すばらしい成果をみせている。もし、この演奏がスタジオの演奏者たちの自由に任された時間の中で行なわれたら、音楽にのめり込んで客観的な威風をここまで高く掲げられなかったのではないかと思われるようなところがどこどこにみえている。そこにブラームスの音楽の特質もまた浮き彫りにされるのである。スターンとザークンの演奏もこの辺で挙げておくのが適当だろう。このコンビはブラームスの三曲すべてを録音しており、いずれも表情が濃密でたっぷりしている。



▼オイストラフ(vn)リヒテル(p)〔プロコフィエフ／第1番、バルトーク／第1番〕…Me-VIC3114  
●スターン(vn)ザークン(p)〔vnソナタ変奏長調〕…CS-18AC772(廃盤)

## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

### ヴァイオリン・ソナタ第3番ニ短調

Violin Sonata No.3 in d, Op.108

このソナタは第二番イ長調に引き続いて着手され、二年後の一八八八年に完成された。これはちょうど、ブラームスがスイスの保養地トウンで三年続けて夏をすごした時期に当たる。すでに四曲の交響曲を世に出してすっかり肩の荷をおろした彼は、美しい自然に囲まれて、自分の性に合った室内楽の創作に心ゆくまで打ち込む心境に到達していた。ここまできると彼の室内楽書法はいっそうはぐれたものになる。と同時に深刻な内面の声も次第にあらわにならざるを得ない。第二番のヴァイオリン・ソナタがしみじみとした叙情と流麗な楽想に満たされているのにくらべると、この第三番は内向性が強く、苦渋な表情を持っている。ブラームスを襲う寂寥の感がいまやひどく痛切なものであることは、その叙情の暗澹たる面持によくみられるが、それに反発することの作曲者固有の意志力はまだ十分温存されていて、前者が強くのしかかればそれだけ後者も黙ってはいられないという風情である。その葛藤の縞模様は全曲にかなり複雑に、屈折して現われているところがこの作品の魅力である。構想は三曲のソナタの中で一番大きく、ほかの二曲がいずれも三楽章であったのがこの曲では四楽章となり、第一番では省略され、第二番では

第二楽章に吸収されていたスケルツォがここでは独立して第三楽章を形造っている。そしてその第三楽章の意味の深さは、たしかにそうすることの必然性を完全に納得させるのである。技術的にみてもまた性格的にみても、この時期のブラームスの作品を代表する一曲と言えよう。

ダヴィド・オイストラフとリヒテルのレコードがここでも随一の名盤。一九六八年のこれもライブ録音で、演奏は第二番と甲乙つけがたい立派なものである。とくにこのソナタの場合、すべてを知り尽くした二人の練達の芸が一筋縄ではゆかぬこの曲の奥深いところを見事に備えているのがさすがだ。それにくらべるとスターンとザークインの演奏はやや陰影に乏しいうらみがある。堀米ゆず子とエインデンのエリザベト・コンクール組は、ここでは第一番のような隙のない彫琢にこそ若干欠けるが、それでもヴァイオリンは随所にきらりと光るものをみせている。ポベスコとジャンティの演奏も悪くない。やや小ぢんまりとした重奏ではあるが、室内楽的美感は一級品だ。以上のほか、ごく最近登場したレコードにパールマンとアッシュケナージによる全曲盤がある。やや楽天的な臭いはあるが、演奏はすばらしく美しい。

◀オISTRAフ (vn) リヒテル (p) [フランク/ソナタ]…Me-VIC 3115 ●スターン (vn) ザークイン (p) (第1番)…CS-23AC641 ●堀米ゆず子 (vn) エインデン (p) (第1番)…G-20MG0117 ●ポベスコ (vn) ジャンティ (p) [第2番]…Ph-27PC21 (廃盤) ●パールマン (vn) アッシュケナージ (p) [ハンガリー狂詩曲]…A-EAC90284~5



## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

### チェロ・ソナタ第1番ホ短調

Cello Sonata No.1 in e, Op.38

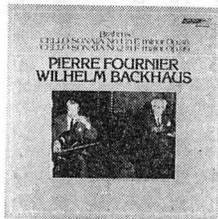
ブラームスの二曲のチェロ・ソナタもヴァイオリン・ソナタに比肩する名作で、ベートーヴェン以降の作曲家がこの分野であげた成果としては最大のものである。ベートーヴェンのチェロ・ソナタはヴァイオリン・ソナタと違って後期の門のところまで伸びており、このジャンルはそのままブラームスに流れてゆく感がある。ブラームスとしては習作期に作曲されて破棄されたものを除いても、このホ短調の曲は彼のヴァイオリン・ソナタに先んじているが、それはピアノと対峙する弦楽器としてはまず音の開放的なヴァイオリンよりも暗く渋いチェロの音質の方が彼の音楽的イメージにびったりきたからかも知れない。しかも室内楽でも彼はチェロの運用法を、とくに六重奏曲で十分につかんでいた。

このソナタが着手されたのは作曲家二十九歳の一九六二年だが、完成は三年後に持ち越された。ブラームスが母を失い、それをひとつの契機にヘドイツ・レクイエム」の作曲がいよいよ本格化する時期である。全曲は三楽章で緩徐楽章を欠く。アダージョはいったん作られたが棄てられた。それでも第一楽章をはじめチェロ向きの美しい旋律はいっぱいあるが、にもかかわらず実際に演奏会できくときはチェロが意外にひ

き立たない場合が多い。それはこのパートが音域をなかなか上げないからで、レコードではマイクの置き方でチェロの肩を持つことも可能だが、そういう細工をしない方がやはりこの曲らしさがあっていい。

レコードはフルニエとバックハウスという非常に珍しい共演盤をまず挙げたい。録音は一九五五年とやや古いモノラルながら、それだけ演奏者たちも若く、それぞれ全盛期の熟した技術と音楽性を發揮している。大仰な表情は少しもなく、坦々とした表現の中に限らない滋味を湛えて本当に味わい深いものがあり、とくに終曲のフーガの進行など無類の美しさを持っている。ロストロポーヴィチとリヒテルは一九七四年のライヴ・レコーディング。比較的新しい録音でありながら音の状態がそのわりによくないのが惜しまれるが、例によって恐ろしく起伏の大きなチェロがきき手を屈伏させる。しかしそれよりもむしろ、自己のスタイルを守りながら何食わぬ顔で、そのチェロをしつかりと支えきってしまいうりヒテルのピアノはいっそう驚くべきものである。音質の点で拔群なのは藤原真理とブラームスのレコードだ。ピアノの性格が強くないのが難点だが、チェロの叙情的な美しさは一聴に価しよう。

◀フルニエ(vc)バックハウス(p) [第2番]…◎L-K  
15C5035 ●ロストロポーヴィチ(vc)リヒテル(p)  
[グリーグ/vcソナタ]…WS-OW7220 ●藤原真理  
(vc)ブラームス(p) [第2番]…De-OF7015



## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

### チェロ・ソナタ第2番へ長調

Cello Sonata No.2 in F, Op.99

室内楽曲の実り豊かな一八八六年の作。同じ年のヴァイオリン・ソナタ第二番が簡潔でのびやかな旋律に満たされているのに対して、このチェロ・ソナタは対照的に内面の騒ぎに表現が波立っており、構成は四楽章の大きなものになっている。そういう点ではむしろヴァイオリン・ソナタで言えば第三番の方に近似している。いづどんな場合でもそうだが、ブラームスの室内楽曲におけるピアノ書法はすこぶる入念で、それ自体が独自の強い様式美を持っているが、このソナタではとくにその辺が目立ち、そこにチェロの線があるときは触れ合い、あるときは溶解し、そしてときに虹のように架橋する。その綿密周到な書き方は、当時のロマン的ディレクタンティズムからはもう寄りつきようもない高いものであったはずである。

この曲でもフルニエとバックハウスの演奏はまるで銀の工芸品のようである。抑えられた表情がこまやかに表現の隅々にまで流入浸透して、全体がしっとりと落ち着いたものになっている。一見バックハウスのピアノはチェロに進んで歩み寄っているようににはみえないが、小さな緩急の具合やフレージングの自然さのうちに、この名手が室内楽でも飛び抜

けたうまさを持っていたことをうかがい知ることができる。ただ二人の芸術の質からすれば、第一番の方がいっそう味が出る。それは主として、両者ともどちらかと言えば音力の幅の表現を活用するタイプではないからだろう。次にロストロポーヴィチのレコードはこれも第一番と同様ライヴ。こちらの方は一九六七年の吹き込みで、当時四十歳の彼のチェロからは、抑えきれない激しい表現意欲がほとばしり出る。しかしこのチェリストがとくみにみせるあくどいまでの濃厚な表情はここにはほとんどない。ピアノはデデュエーヒンで、これは手堅いのが救いだ。ずっと古い録音で音はたいへんよくないが、カザルスとホルショフスキーも演奏自体はすこぶる立派である。冒頭の怒ったようなテーマからすでに、カザルス全盛期のたくましい精神力が漲っているのを感じる。翻つてぐつと生きのよいところではハレルとアッシュケナージのデュオがある。表情をいくぶん強調してブラームスとしては少しにぎやかすぎるところもあるが、音楽のふくらみは大きい。藤原とブラームスはこの場合やや非力だが、第二楽章の陰影のこまやかさなどは非凡だ。なお、最近出たロストロポーヴィチとゼルキンの共演盤は秀逸。



◀ロストロポーヴィチ(vc)ゼルキン(p) [第1番]…  
G-28MG0609●フルニエ(vc)バックハウス(p) [第1番]…◎L-K15C5135●ロストロポーヴィチ(vc)デデュエーヒン(p) (ドビュッシー/vcソナタ, フォーレ/夢のあとで他)…◎WS-OW7219(魔盤)●カザルス(vc)ホルショフスキー(p) [vn&vc二重協奏曲]…A-GR70062●ハレル(vc)アッシュケナージ(p) [第1番]…L-28C1036●藤原真理(vc)ブラームス(p) [第1番]…De-O-F7015

## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833-1897)

### クラリネット(またはヴィオラ)ソナタ(全2曲)

Sonata for Clarinet or Viola, in f, in E♭ (Complete)

ブラームスが創作力の著しい衰えを自覚して早々と身辺の整理を始めたのは一八九〇年のことである。五十七歳、すでに功なり名遂げた彼は、この年ト長調の弦楽五重奏曲(第二番)を苦心の末に書き上げたとき、作曲家として自分のやるべき仕事がほとんど終わったことを感じたのであった。彼はもう二度とまとまった大曲に手を出すつもりはなく、従って五重奏曲がそのようなものとしては最後の作品になるはずだった。

そうならなかったのはひとえにあるクラリネット奏者のお陰である。その男の名はリヒャルト・ミュールフェルト。マイニンゲンの宮廷楽団奏者で、その比類ない名演奏が、たまたま一八九一年の春に当地を訪れたブラームスをいたく感動させ、消えかかっていた彼の創作意欲をもう一度蘇らせたのである。こうしてクラリットを主役とする室内楽曲が相次いで四曲も誕生し、ブラームスの最後の時期を美しく飾ることになった。

もっとも、クラリネットとブラームスの晩年とは結ばれるべくして結ばれた感もなくはない。つまり、この楽器固有の陰影を帯びた独特の音色は、しばしば諦観という言葉で言い表わされる彼のこの時期の心境に

まったくふさわしいものであったはずで、ミュールフェルトの名人芸は、ブラームスが意識下で探し求めていたものをみつけるひとつの手がかりにすぎなかったかも知れないのである。

二曲のクラリネット・ソナタはそれら四曲の最後のもので、同時にブラームスの全室内楽曲を締めくくる作品となった。作曲は一八九四年で、これ以後に書かれた作品は、死の前年のへ四つの厳粛な歌とへ十一のコーラル前奏曲だけである。なおクラリネットのパートをヴィオラで代用した版もあり、その形で演奏されることも少なくない。

レコードはウラッハとデムスによるものがモノラルながらすばらしい演奏である。深沈たる叙情とえも言えぬ音色の甘い渋さが抜群で、ブラームスがこれらの音符を書いているときの心の中の明るさも暗さも、そして静かな動揺もまさにこんなものでなかったかと思わせる。ライスターとデムスもすこぶるうまい。実に見事な技術であり、しかも名技性に少しも留意させない強い内容把握を持つ。ヴィオラによる録音もあるが、どうもこればかりはクラリネットでない、さりげない音の動きに秘められた限りない寂しさを語り尽くせぬ思いが強い。

◀ウラッハ(c1)デムス(p) [ウラッハの芸術]…GW-V I C 5363 ●ライスター(c1) デムス(p) …G-MG 2083

THE ART OF  
LEOPOLD WLACH

ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

## ピアノ三重奏曲第1番 口長調

Piano Trio No.1 in B, Op.8

ブラームスのピアノ三重奏曲は今世紀になってから発見されたイ長調の曲（それが真作であるとするなら、彼が生前に破棄し損なった曲に違いない）を別にして三曲のこざれている。いずれも不朽の傑作であるばかりでなく、この作曲家の室内楽の多くの曲種が比較的集中的に手がけられているのとは逆に、第一番の初稿（一八五四年）から第三番（一八八六年）まできわめて広い期間に分散しているという点でもいろいろ興味深い。しかもこの口長調の曲は、一桁の作品番号が示すとおりブラームスの室内楽曲の中では最も初期のもので、彼が二十一歳にならぬころ第一稿が出来上がったのであるが、こんにち一般に演奏されレコードでもきかれるのは実はそれより何と三十六年もあとに手を加えて出版した改訂版の方なのである。この改訂は第三番よりあとであるから、第一番はいわば最初期と最後期とを大きくつなぐ架橋のようなもので、そのような特異な事情を反映したユニークな内容を持つことになった。つまり保存された若き日の多感なブラームス、はてるようなロマンの香気はこの作品にうまいいししい情感をもたらし、一方では奔流のように溢れ出ていた楽想は全体的構造の観点から見通しよく整理されて作品そのものの堅固さが増

し、楽器法もはるかに熟達したものになったのである。旧作破棄ということに少しもためらいをみせなかったブラームスが、異常に長い期間をおいて作品を三分の二ほどの長さに縮め、それでいてその改訂を「かつらを与えたのではなく、ちょっとばかり櫛をあてて髪の毛を揃えただけ」などと言いわけがましく説明しているところをみると、彼自身この第一作には抜きがたい愛着があったのだろう。

ルービンシュタイン、シェリング、フルニエの豪華トリオがブラームスの全三曲を録音しており、その演奏は奏者個々の圧倒的力量もさることながら、アンサンブルとしても稀にみる妙味を持つものである。中でもこの第一番は、ルービンシュタインの明るく若々しいピアノに端正なヴァイオリンと渋いチェロが絶妙な彩りを添えて、熟成したトリオの美しさを発散している。スーク・トリオのレコードもきき逃すわけにはゆかない。澄みきった響きと胸にしみ入るような表情の美しさを誇る名演奏で、トリオの求心的なまとまりでは前記ルービンシュタイン盤よりもさらに上である。もう一点、ヘス、スターン、カザルスによるモノラル盤は悠々たるロマン的演奏の典型。

◀ルービンシュタイン(p) シェリング(vn) フルニエ(vc) [全3曲]…R-RVC2076~7 ●スーク・トリオ…Sup-OZ7141 ●ヘス(p) スターン(vn)カザルス(vc)…◎CS-20AC1871



## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

### ホルン三重奏曲変ホ長調

Horn Trio in E $\flat$ , Op.40

シューマンは管楽器を含むさまざまな楽器編成によるユニークな室内楽曲を、とくに小品の分野に少なからず書きのこしたが、ロマン派室内楽の主要な曲種のほとんどすべてを手がけたブラームスも、そのような目新しい試みには概して消極的だった。ブラームス唯一のホルン三重奏曲はその意味では異色の一曲といつてよく、ホルンを用いた室内楽曲としては彼唯一のものであることはもとより、このように管、弦（ヴァイオリン）、そしてピアノというまったく異質の楽器ひとつずつを組み合わせて成功した本格的な作品となると、同じ作曲家にもう一曲クラリネット三重奏曲があるものの、長い音楽史を見渡してみても非常に珍しい。完成されたのは一八六五年、すなわちヘドイツ・レクイエム $\searrow$ の筆が進められていたころのことで、すぐれたホルン奏者アウグスト・コルデスとの交友が作曲の動機のひとつであったらしい。

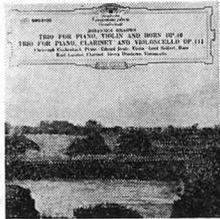
ところでブラームスは、この曲を当時すでに広く使われていたヴァルヴ付きのホルンではなく、旧式のナチュラル・ホルンの使用を前提に作曲している。このナチュラル・ホルンは構造上限定された音階しか演奏できないという大きな制約こそあるものの、固有の柔らかな音色を備え

ており、ブラームスはおそらく、一般のホルンよりもいっそう素朴な音色美を得るためにこの楽器を選んだものと思われる。ガイリンガーはその点について、外面的な効果を人一倍嫌うこの作曲家の作風を反映したものである、というごく常識的な意見を述べているが、必ずしもそればかりでなく、たとえば音色のデリケートな変化を生かすなど、ブラームスとしてはむしろ積極的な意図をもってあえてこの古い楽器を持ち出したのではなかったらうか。

ステージではまずきけない曲だがレコードは結構出ている。そのうちまずザイフェルト、ドロルツ、エッシェンバッハによる一枚を挙げよう。ザイフェルトの名人芸がまさしく匠巻で、響きの魅力も比類ない。

次にタックウェル、パールマン、アシケナージのスター競演盤も、色彩がいささか派手に走ったきらいはあるが、美しいことはこれまたいへん美しい。ティルシャル、スーク、パネンカ盤は対照的にしっとりした演奏。なお、イギリスのホルン奏者オーブリー・ブレインらによるレコードは、早くからこの名曲の名曲たるゆえんを日本の愛好者に肯かせた名盤であるそうだが、残念なことにも音が古い。

◆ザイフェルト (hrn) ドロルツ (vn) エッシェンバッハ (p) (cl 三重奏曲) …G-MG2100 ●タックウェル (hrn) パールマン (vn) アシケナージ (p) 【フランク / vn ソナタ】 …L-L18C5117 ●ティルシャル (hrn) スーク (vn) パネンカ (p) 【三重奏曲第3番】 …Sup-OZ7142 ●A・ブレイン (hrn) ブッシュ (vn) ゼルキン (p) 【vn ソナタ第2番】 …A-A-GR 2242 (廃盤)



## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833-1897)

### 弦楽四重奏曲第3番変口長調

String Quartet No.3 in B<sup>b</sup>, Op.67

「交響曲と厳肅な面持で向かい合うことを避けるための無用のがらくた」——これは一八七五年に作曲した弦楽四重奏曲第三番（を含む数曲）を評して言ったブラームス自身の言葉である。これはしかし、念願の第一交響曲の完成（一八七六年）をようやく目の前にした彼が、珍しくはしゃいで思わず口走った戯言であって、この曲ががらくたであるはずはもろろんない。もっとも、古典派の時代に室内楽の中心的な曲種だった弦楽四重奏曲に対してブラームスが格別の意欲を持っていたであろうことは容易に想像しうるにもかかわらず、生涯に発表したのはわずかに三曲、しかも初期に書いたその何倍もの作品をみずから破棄せざるを得なかったという事実は、彼の発想が必ずしもこの器にすんなりと収まるものではなかったことを暗に物語るものかも知れない。その上ほかの室内楽曲の出来栄えがあまりにすばらしいこともあって、彼の弦楽四重奏曲はどちらかと言えば目立ちにくい存在ではある。しかし、どうかじつくりと耳を傾けていただきたい。これらは実に美しい音楽である。そのことを筆者が再認識したのは告白すると比較的最近のことで、本当はあまり大きなことは言えないのだが。

レコードは一時にくらべるとずいぶん豊富に出ていて、この変口長調の曲にも全三曲をセットにしたものを含めると現役盤が十数前後あり、それこそ選り取り見取りの楽しみを味わうことができる。古くから定評のあったのはブダペスト四重奏団の厳しく明快な演奏で、その説得力の強さは驚くべきもの。アマデウス四重奏団はさらに三年ほど早い一九六〇年の録音。表現全体が豊かなふくらみを持っており、錯綜する線の動きが弦楽四重奏の限界をゆく闊達さである。ヤナーチェク四重奏団の描き出すデリケートな表情の美しさも捨てがたい。この第三番にはまたスメタナ四重奏団の録音もある。ひと時代前の彼らの若やいだ演奏である。さらに手許のカタログには載っていないが、イタリア四重奏団の名盤も本書が出るころには復活しているはずだ。持前の明るく弾力のある響きと、光と影が交錯しながら織りなされてゆく絶妙な色彩感がすばらしい。新しい吹き込みの中ではアルバン・ベルク四重奏団が大好評である。磨き抜かれたテクニクを土台に、豊かな音楽性と清新な感覚をいっばいに繰り広げる名演奏だ。もうひとつ、プラハ四重奏団の演奏も味わいが深い。響きが澄んでいて線の美しさが印象に残る。



◀ブダペストSQ [全3曲, シューマン/p五重奏曲]  
…CS-SOCL225~6 ●アマデウスSQ [ドヴォルザーク/第12番]…G-MGW5196 ●ヤナーチェクSQ [全3曲]…Sup-OQ7144~5(廃盤) ●スメタナSQ [チャイコフスキー/第1番]…A-EAC51010 ●イタリアSQ [全3曲, p五重奏曲]…Ph-18PC162~4 ●アルバン・ベルクSQ [全3曲]…T-K17C8324~5 ●ブラハSQ [全3曲, ヴォルフ/イタリアのセレナード]…De-OX7207~8

## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

### ピアノ四重奏曲第1番ト短調

Piano Quartet in g, Op.25

私事になるが、数年前にある音楽番組の構成を担当していたとき、またま一年間にわたってブラームスを特集したことがあった。まず番組のテーマ音楽を決めようという段になって、あれこれ迷った末に筆者が選んだのは、ピアノ四重奏曲第三番ハ短調の第三楽章、アンダンテでチエロが表情豊かに歌い出す冒頭の部分である。いかにもブラームスらしい魅力を備えた、しかしあまりありふれたものではない音楽を、と考えた程度で、筆者としては奇をてらったつもりは毛頭ない。ところがこのメロディは意外に知られていなかったようで、担当のOディレクターの机の上には「あの美しいテーマ曲は一体何か」という聴取者からの問い合わせの手紙が山と積まれた(?)ものである。

ブラームスのピアノ四重奏曲は、彼のヴァイオリン・ソナタ、ピアノ三重奏曲、あるいは弦楽四重奏曲と同様やはり三曲のこざれていて、室内楽全体に占める比重は決して小さいものではないけれども、一般にきかれる機会はたしかに多くないかもしれない。しかし、ピアノ四重奏ならではの魅力ということも別にしても、前記のアンダンテをはじめ、美しく印象的な楽想はどうしてなかなか豊富なのである。

ここに取り上げた第一番ト短調は三曲の中ではおそらく最もよく知られた作品で、一八六一年の秋、すなわちハンブルク時代の終わり近くに完成されている。この時期のブラームスの作品にしばしば現われる悲劇的な気分が全曲の基調になっているが、それを払いのけようとする勇壮な楽想、さらには漂うような神秘性といったさまざまな感情表現があつて、作品は実質よりさらに大きく感じられるものになっている。

レコードはまったく寂しい限りで、「室内楽全集」のような大きなセットの中に収められているものを別にすると、カタログにはたった二種類しかない。それでもギリリスとアマデウス弦楽四重奏団員による好演が辛うじて残っているのが救いだ。ギリリスのピアノは一見ひどく冷静な精密さに終始しているように見えるが、ききこむとそうでない。しかもアマデウス四重奏団のアンサンブルはいつもの例よりも音響的に引き締まり、かつ内容を大きく強く表出している。明らかに顔合わせの効である。もう一枚はゼルキンとプッシュユ弦楽四重奏団員によるモノラル盤。プッシュユ最後の吹き込みで、彼らとしては淡々とした味を持つ演奏だ。なおデムスとバリリ四重奏団員の名盤は目下廃盤。



◀ギリリス(p)アマデウスSQ…G-15MG3062 ●ゼルキン(p)プッシュYSQ…@A-GR2238(廃盤) ●デムス(p)バリリスQ…@W-(廃盤)

# ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833-1897)

## 弦楽五重奏曲第1番へ長調

Quintet for Strings No.1 in F, Op.88

二曲のこざれている弦楽五重奏曲は、ヴァイオリン・ソナタとともにブラームスの室内楽の頂点に立つ不朽の傑作である。いずれもかつてモーツァルトが愛用した弦楽四重奏プラス第二ヴァイオラの楽器編成で、内声部を充実させることによって得られるその渋く重厚な響きは、彼がいち早く手を引いてしまった弦楽四重奏の透明感の強いそれよりもいつそうこの作曲家の音楽性にふさわしかったように思われる。なおブラームスはシューベルト流儀のチェロ二挺の五重奏曲を試みたこともあったが、それは結局はピアノ五重奏曲に姿を変えてしまった。

この第一番へ長調はブラームス四十九歳の一八八二年、つまり第二ピアノ協奏曲と第三交響曲の中間の年の春から初夏にかけて、イシユル美しい環境の中で心楽しく作曲されたらしい。音楽には消ゴムを使いつぎたあととはみえないし、感情の停滞もなく、湧き出る楽しい気持がそのまま五線と音符の中を流れている。そしてブラームスの音響的な趣味は、ヴァイオラの充実した使い方にはつきり現われている。

二曲の弦楽五重奏曲の代表としてここでは第一番を取り上げたが、その八年後に作曲された第二番へ長調も内容的には第一番に勝るとも劣ら

ぬ名作中の名作である。幸いレコードはこれら二曲を一枚に収めているのが普通（手許の目録にある四点はすべてそうなっている）なので、さまざまの角度からききくらべてみるのも楽しいだろう。さてその四点の中では、まずブダペスト弦楽四重奏団とトランプラーの第二ヴァイオラによる名演奏を挙げておこう。例によって峻厳な形式観を持ち、どんな詮索も忍び入る隙をみせないが、決して形式主義の冷やかな表現ではない。それどころか強い表情には四重奏曲の場合よりもっと熟したものがある。充実した響きの美感も独特で、第一楽章のあの牧歌的な安らぎを持つ第一主題が何と格調高く、感動的にきこえることか。このクワルテットのブラームスは本当に立派である。次にアマデウス弦楽四重奏団とアロノウイツの演奏だが、これははるかにつややかな表情を持っている。音もブダペスト四重奏団よりは美麗で、音楽が全体に親しみやすい。ただ響きも表現もときに明るすぎて、興味を外面に分散させられることがある。バルトーク弦楽四重奏団とコンラードは最も新しい（一九七四年）吹き込みで、演奏もみずみずしい。彼らとしても会心の出来である。第二ヴァイオリンのデヴィイチが言っていた。

◀ブダペストSQ, トランプラー (va) [全2曲]…C  
S-23A C639 ●アマデウスSQ, アロノウイツ  
(va) [全2曲]…G-15MG3045●バルトークSQ,  
コンラード(va) [全2曲]…Hun-K17C9340



## ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833—1897)

### ピアノ五重奏曲へ短調

Quintet for Piano & Strings in f, Op.34

心にふと楽想や作品の構想が思い浮かんだとき、それに最もふさわしい楽器ないしは楽器の組み合わせを直感的に選ぶことにかけては、さしずめモーツァルトあたりがその天才ぶりを遺憾なく発揮した第一人者であろうが、わがブラームスは反対にその辺でだいぶ苦心した形跡がある。たとえば、弦楽五重奏曲第二番やいわゆる「二重協奏曲」が本来は交響曲として作曲するつもりだったといわれるのはともかくとしても、第一ピアノ協奏曲などはこれはたしかに初めは交響曲として想が練られ、その一種の下書きとしていったん二台のピアノ用にまとめられた。ところがその段階でブラームスは、どうやらこの曲とピアノの響きとを切り離しては考えられなくなってしまうたようで、いわば苦し紛れの折衷案としてピアノ協奏曲という形が案出されたのである。

ブラームス唯一のピアノ五重奏曲もそのような回り道作品の典型で、これはまず一八六二年に、チェロ二挺の弦楽五重奏曲として作曲された。ところが親友のヨアヒムが響きの具合について感心せず、ブラームス自身も弦の表現に問題があると考えて、一転して二台のピアノのためのソナタに改作する。そしてその形では初演（一八六四年）まで行なわれ

たが、今度はクララ・シューマンから二台ピアノは不適切という鶴の一声が入ったためまたしても書き直しが行なわれ、一八六四年秋にようやくピアノ五重奏曲に落ち着いたのだった。このように演奏家の側から音楽の本質とその表現手段との関係について多くの指摘が介入するのは、ブラームスの理念家としての性格と、その時代の演奏家たちの勢力台頭を如実に示すものである。それはともかく、この曲の楽想はピアノ五重奏という表現の形を得て本当に輝くもので、きいていてこの編成が模範のあげくに行き当たったものとは思えないほどである。

昔からすぐれたレコードの多い曲だが、過去の名盤が一樣にかすんでしまいそうな決定盤的存在がある。一九七九年録音のポリニーとイタリア弦楽四重奏団の共演盤がそれだ。詳述は避けるが本当にすごい演奏である。むしろそうは言っても、デムスとウィーン・コンツェルトハウス四重奏団、あるいはゼルキンのピアノによる二種のレコードもその価値は不変のものではあるが。さらに筆者の好みではレーゼルトとブラームス弦楽四重奏団にも心を惹かれる。楽譜の読みが実に誠実であると同時



- ◀ポリニー(p) イタリアS Q…G-MG1261 ●デムス  
(p) ウィーン・コンツェルトハウス…@W-G5901  
●レーゼルト(p) ブラームスS Q…DS-E T5142

ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833-1897)

## クラリネット五重奏曲口短調

Quintet for Clarinet & Strings in b, Op.115

ブラームスが生前に世に出した室内楽曲は二重奏曲から六重奏曲まで多種多様な作品が総計二十四曲、うち本書で取り上げられているのは十五曲で、この数字はベートーヴェンに次ぎ、モーツァルトにほぼ匹敵する。さらに二十四分の十五すなわち実に六割二分五厘という驚異的なハイ・アヴェレージは、ベートーヴェンの概算三割五分、モーツァルトの同じく二割をはるかにしのぐものである。時代の違いはもちろん考えなければならぬが、作品全体の水準の高さという点からみれば、ブラームスこそ史上最大の室内楽作曲家と呼ぶにふさわしい。

ところで、ある音楽雑誌で室内楽曲の人気投票のようなことをやったとき、ベートーヴェンのイ長調チェロ・ソナタやモーツァルトのト短調弦楽五重奏曲などを押さえてブラームスのクラリネット五重奏曲がトップにランクされているのを見たことがあるが、実際この曲は、名作ひしめく彼の室内楽団の中でも名実ともに一、二を争う大傑作である。音楽的構造の面からみればバロック、前古典期の様式からロマンの変奏までを包括して独自の綿密な配慮に貫かれ、碩学ブラームスの面目が全曲に現われているが、またクラリネットの持つ独特の表出力を存分に活用し

て情緒の深さにおいても彼の到達点を示しており、とくにラフソディックなアダージョ楽章が有名である。しかし、一番凝った音楽は終楽章で、技巧面でも感情面でも全曲を強く収斂している。作曲は一八九一年、クラリネット三重奏曲に続いて行なわれ、初演にはミュールフエルト（クラリネット・ソナタの項参照）が参加した。

たくさんのすぐれたレコードがあるが、その中でもプリンツとウィーン室内合奏団の演奏はとくに目をひくものひとつである。プリンツのクラリネットはまさしく天才の輝きをみせると同時に、室内楽のなかなかな気分をもその響きの中に秘めており、しかもブラームスへの共感が音楽ににじみ出ている。弦も美しい。さらにごく最近、ライスターとウィーン弦楽四重奏団の名盤が登場した。この演奏の格調の高さは無類である。ライスターは例によって舌を巻くうまさだが、技巧のおごりのようなものはなく、弦の隙のないアンサンブルの中に見事に一体化している。ほかに挙げておきたいレコードはいろいろあるが、その代表として少なくともウラッハとウィーン・コンツェルトハウス弦楽四重奏団のモノラル盤だけは絶対に書き落とすわけにはゆかない。

◀ライスター (cl) ウィーンSQ...CT-CMT 1505 ●  
プリンツ (cl) ウィーン室内合奏団 (cl 三重奏曲)...  
Eu-(廃盤) ●ウラッハ (cl) ウィーン・コンツェルト  
ハウスSQ...⊗W-G10519



# ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms (1833-1897)

## 弦楽六重奏曲第1番変口長調

Sextet for Strings No.1 in B $\flat$ , Op.18

ブラームスの弦のみによる室内楽曲は弦楽四重奏曲が三曲、五重奏曲と六重奏曲がそれぞれ二曲ずつで、四重奏曲の作品数は全体の半数に満たない。彼の出発点が古典的な弦楽四重奏曲にあったことは、みずから破棄したもののごく若いころにおびただしい数のそれを作曲したことにもうかがえるが、ブラームスは結局そこに留まることなく、より大きな編成の室内楽へと手を伸ばしていったのである。その原因は二つあるだろう。ひとつはロマン的な響きを求めるとき弦楽四重奏では透明すぎることに、もうひとつは弦の表現力をベートーヴェン後期の作品より増大させようとすれば無理が生ずることで、この二つの問題は表裏の関係にある。

弦楽六重奏曲は五重奏曲と反対に二曲とも比較的初期の作品で、一八六〇年作の第一番は最初のピアノ三重奏曲に次ぐ室内楽曲第二作である。この曲のお厚い響きには、頑固に自己の室内楽の場を確保しようとするブラームスの室内楽人的体質と、同時に当時オーケストラに向かつて手を差し伸べてみたくて、協奏曲やセレナードで苦心している彼とが共存している。しかし楽想は平明で、構造は非常に明確、ブラームスの

本当の苦労はまだこの作品には現われていない。なお、第二楽章の変奏曲は映画のテーマ音楽に使われたことからわりわけ有名になったが、この曲の親しみやすい美しさは、そのようことがなくとも広い層の人気を獲得するに十分である。

長く親しまれてきたレコードが二点ある。とくにアマデウス弦楽四重奏団とアロノウィッツらによるものは非常に豊熟感を持った名演奏で、ほとんどオーケストラに近いような響きの多様さがあり、重奏としてはどのパートも最大限の表情を押し出していて、曲全体がたいへん大きく感じられる。ロマン派の作品を多く手がけるようになってからのアマデウス四重奏団の最大の長所をみせた演奏といえよう。もうひとつのメニューインらの演奏は粘りのある深い音色が持ち味。ただ一面にこの曲全部はやや詰め込みすぎのきらいがある。一方、最近二つの対照的な新盤が登場した。ひとつはクリーヴランド弦楽四重奏団とズーカーマンらによる一九七七年の録音で、これは低音部が非常に充実した重厚な演奏である。それに対してフランスのレ・ミュジシャン盤は曲のイメージを覆すようなざらりとした軽いタッチが特徴。これも決して悪くない。

◀アマデウスSQ、アロノウィッツ(va)ブリス(vc)  
…G-15MG3018 ● クリーヴランドSQ、ズーカーマン(va)グリーンハウス(vc)…R-RC L8330 ●  
レ・ミュジシャン…HM-V I C4520



# アレクサンドル・ボロディン

Alexander Borodin (1833-1887)

## 弦楽四重奏曲第2番ニ長調

String Quartet No.2 in D

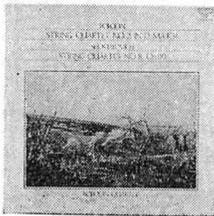
いわゆる「ロシア五人組」もしくは「力強い仲間」と呼ばれるグループの顔ぶれの中でも、ボロディンはキエイトともに最もディレッタント的な性格の強かったひとりである。「砒素と燐酸の類似性について」という論文で博士号をとったこの著名な化学者は、本職がいつも多忙で、音楽の方は自他ともに許す「日曜作曲家」にすぎなかった。当時のロシアのインテリの常で西欧文化に通暁し、音楽家としてはなるほど国民主義の立場に立ちましたものの、必ずしも自作の上で全面的にそれを実践したわけではなく、かなりヨーロッパの伝統に即した器楽曲を書いている。ことに自身チェロをひき、学生時代から室内楽を楽しんでいた彼には、室内楽曲がかなり多い。

このニ長調の弦楽四重奏曲は一八八一年、速筆で書き上げられた。佳作とは言えぬがたいへん有名な「中央アジアの草原で」の翌年である。仲間のムソルグスキーが手づかみでロシアをめぐり出しているのにくらべると、いつもそうであるようにボロディンはこの曲でもオリエンタリズムの夢想の中におり、それがこの作品の魅力として受けとられるのであろう。曲の構成は特別立派なものではないが楽想はロマン的な香りを

持ち、とくに「ノットウルノ」の第三章は広く知られていて、単独にアンコール曲などにも使われる。なお曲はハイデルベルク大学留学中に知り合って結婚したエカテリーナに捧げられており、その若き日のロマンスの思い出がここにこめられているとも言われる。

名前にこだわる気持は毛頭ないが、レコードはやはりボロディン弦楽四重奏団が出色の出来だ。このクワルテットは非常な洗練度を持ち、それがときに音楽を真新しい洗濯もののような味気ないものにする場合もあるのだが、この演奏は存分に温かく、色彩の変化もたいへん柔らかな。こういう最も高い意味でのくつろぎの気分は、ウィーンの室内楽奏者たちのモーツァルトやシューベルトと同様のものである。プラハ弦楽四重奏団の細い銀線を縫り合わせるようなアンサンブルもとても美しい。全体に色彩は淡いが、表現は極度に洗練されていて、この曲に秘められたしやれた味わいを浮き彫りにしている。来日時に録音されたもので音質は最高。イタリア弦楽四重奏団の演奏は音色のみずみずしさが魅力的である。歌はいつもくつきりした表情を持ち、実演でもそうだったが内声部がたいへんしつかりしている。

◀ボロディンSQ [ショスタコーヴィチ/第8番]…  
L-K18C8268 ●ブラハSQ [プロコフィエフ/第  
2番]…De-OX7131 ●イタリアSQ [ドヴォルザ  
ーク/第12番]…Ph-13PC114



## ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

Peter Ilyich Tchaikovsky (1840—1893)

### ピアノ三重奏曲イ短調《偉大な芸術家の思い出のために》

Piano Trio in a "A la mémoire d'un Grand Artiste", Op.50

チャイコフスキーの音楽にとって室内楽という器はいかにも小さすぎたのか、学生時代の習作を別にするこの分野の作品数はごく少ない。しかもとくにピアノ三重奏に関しては、彼はその響きを毛嫌いし、ほとんど生理的に受けつけないとまで言明したことがあった。にもかかわらず、チャイコフスキー随一の名作家室内楽曲としてのこされたのがほかならぬこのピアノ三重奏曲であったのは皮肉な出来事である。この曲は副題にある《偉大な芸術家》、すなわちニコライ・ルービンシテインの死を悼んで作曲された。チャイコフスキーより五歳年長のニコライは、実兄アントン・ルービンシテイン（チャイコフスキーの直接の師）とともにロシア音楽の発展と紹介に大きな功績をあげた人物で、チャイコフスキーも彼にモスクワ音楽院の教師として招かれて以来親しく付き合い、よく知られているようにあのピアノ協奏曲の試演をめぐって大喧嘩をしたこともあったけれども、その後は友情を回復して交際を続けた。そのルービンシテインがパリで客死したのは一八八一年、三重奏曲は翌年の完成である。ピアノ・パートに大きな比重が置かれているのは、当時有数の名ピアニストだったルービンシテインを偲んでのことだろう。この曲にみられ

る濃厚な感情表出は、同じ作曲家の交響曲などにきくものとまったく同質で、ピアノ、ヴァイオリン、チェロの三楽器に託されたものとしては異常なほどごつてりと盛りだくさんであり、形の上では西歐式を写しながら、まさにロシアにしか生まれ得べくもないピアノ三重奏曲になっている。非常な大曲で、ピアノ三重奏曲としては異例のふくらみを持つが、楽章の数は二つにすぎない。ただし第二楽章は主題と変奏、および変奏終曲とコーダの二つの部分に分かれており、実質的には三楽章構成の変型とみることができる。

レコードはスーク・トリオの新録音がすばらしい。ふつくらとした、きめこまかなアンサンブルで、その控え目な表現は一見この曲を小ぢんまりとしたものにみせている。だが、この演奏にはピアノ・トリオの実にさまざまな奥の手をききとることができる。アシケケナージ、パールマン、ハレルの演奏は対照的に豪華な趣を持つ。室内楽の呼吸も決して悪くない。しかし欲を言えば音楽の含蓄がもうひと息で、その意味ではいっそうさりげない語り口のうちに作曲者の思いを深く共有するボロディン・トリオの演奏に心を惹かれるものがある。

◀スーク・トリオ'76年録音…De-OS7194 ●アシケケナージ(p)パールマン(vn)ハレル(vc)…A-EA C90039 ●ボロディン・トリオ…Cds-OF7028 (楽盤)



# アントニン・ドヴォルザーク

Antonin Dvořák (1841–1904)

## ピアノ三重奏曲第4番ホ短調《ドゥムキー》

Piano Trio No.4 in e "Dumky", Op.90

ロマン主義時代の作曲家の多くがそうであったように、ドヴォルザークもまた響きや表現の多様性を求めてピアノ入りの室内楽曲を積極的に行きつめた。ピアノ三重奏曲も失われたものを除いても四曲ある。《ドゥムキー》の名で呼ばれるこのホ短調の曲はその最後の曲で、一八九〇年から翌九一年にかけて作曲され、同じ年の春に作曲家自身のピアノを含むプラハ音楽院の教授たちの手で初演された。それはちょうど、ドヴォルザークに例のニューヨークのナショナル音楽院からの誘いの手紙が舞い込んだころである。ところで、ドヴォルザークはピアノ三重奏曲の分野でもやはりドイツ音楽の強い影響のもとに出発したが、その終着点であるこの曲では、彼は形の上でもまた精神においても、もう国民主義に深く身を沈めている。この曲の最大の特徴も、ウクライナに起こりボヘミアまで伝わってきたスラヴ系の民謡ドゥムカ(ドゥムキーはその複数形)の、その独特の気分が全曲を強く支配しているところにあると言えよう。そのほか全六楽章——つまり六つのドゥムカ。従ってソナタ形式の楽章は皆無である——という構成、あるいはチェロが大きな比重を占めていることなど、この曲にはユニークな点が少なくない。しかし

この異色作も、独自の気分的なまとまりはさすがにしっかりと保有しており、ドヴォルザークの並々ならぬ造型センスをそこにかがうことができる。

さて、スーク・トリオがドヴォルザークのピアノ三重奏曲全四曲をレコーディングしており、この《ドゥムキー》も彼らのレコード(一九七八年の新録音)が傑出した存在である。音楽的な純度のすこぶる高い名演奏で、民俗的要素が極度に洗練された表現を通して実に美しく、すっきりと処理されており、かぐわしい香りが立ちのぼるようなえも言われぬ気分である。室内樂的美感もこの曲としては最上。スーク、パネンカいずれもまったく達人なものだが、ここではとくにフツフロのチェロの強い表現力も印象深い。チェコ・トリオの演奏も悪くないが、ヴァイオリンがやや線が細く、またピアノには一種の弾き馴れからくる事務的なところがあって、感銘の大きさはスーク・トリオ盤には及ばない。しかしそれでも、もう一点のボザール・トリオとききくらべてみると、チェコ・トリオの演奏にはこの国の演奏家特有の一種の誇り高い語り口がありありとみとることができるだろう。



◀スーク・トリオ [スーク/エレジール]…De-OS7193

●チェコ・トリオ [弦楽四重奏曲第12番]…Sup-OZ7136 ●ボザール・トリオ [ハイドン/ト長調]…Ph-13P C56 (廃盤)

## アントニン・ドヴォルザーク

Antonin Dvořák (1841-1904)

### 弦楽四重奏曲第12番へ長調《アメリカ》

String Quartet No.12 in F "American", Op.96

ドヴォルザークの弦楽四重奏曲は作品番号を持たないものまで含めると計十四曲が知られており、作曲は二十代初めの最初から五十代半ばにまで広く及んでいる。十四という作品数はベートーヴェンやシューベルトにはほぼ匹敵するもので、この時代の作曲家としてははなはだ異例の数字と言わなければならぬ。もともと、初期の作品はもろろん、全般的にみてもごく一部の例外を除いて演奏される機会は決して多くないのが現状で、その点ではベートーヴェンと同列に論じるのはしよせん乱暴というものだろう。それにしても、円熟期の何曲かはもっと広くきかれたいのではあるまいか。

《アメリカ》のニックネームを持つこのへ長調の曲はしかし室内楽曲はもとよりドヴォルザークの全作品の中でもとりわけ名高いもののひとつで、作曲者五十二歳の一八九三年、滞在中のアメリカ合衆国アイオワ州スピルヴェイルできわめて短時間（三日間とも伝えられる）のうちに書き上げられた。交響曲《新世界より》のそれは直後のことで、精神的にはこの曲は《新世界》の室内楽版と言えるが、しかし構想は著しく簡素で透明である。そして概ねいつもそうであるように発想は根から室内楽的

で、弦四重奏の表現形式は必要不可欠のものと受け取れる。これに先立つへ長調弦楽四重奏曲（作品六一）がかなりベートーヴェンを意識した形跡があることを考えれば、この作品はドヴォルザークのこの分野でのきわめて身軽になった飛躍であった。

名盤がたくさんあるが、厳選すればチェコスロヴァキアの団体の天下ということになりそうだ。とくにスメタナ弦楽四重奏団の成果は著しい。彼らはこの曲を四たび録音しており、そのうち一九七八年と八〇年のものはどちらも来日公演のライブ盤で、演奏もそして音質も一点非のうちどころがない。どちらかと言えば後者の方が表情がくつきりとして、各楽器の発言もより積極的であるようにきこえるが、いづれにしてもこの四重奏団ならではの驚異的な名演奏である。なお後者はこの曲だけをLP一枚にしたその意味では贅沢なレコードだ。ヤナーチェク弦楽四重奏団の演奏にはスメタナ四重奏団よりも多少の土俗臭が漂う。それはしかし野暮というような種類のものではなく、鋭く表現的なものをとどき示すこのクワルテットの演奏から光るように放射される独特の魅力である。そのほかプラハ、ターリヒ、パノハ各四重奏団も好演。

◀スメタナSQ '80年録音…De-OW7407 ●同'78年録音 [p五重奏曲]…De-O S7179 ●ヤナーチェクSQ [第9番]…L-K18C8267 ●プラハSQ [p三重奏曲第4番]…Sup-O Z7136 ●ターリヒSQ [第11番]…Cal-V I C2282(廃盤) ●パノハSQ [第14番]…Sup-OF7132



# アントニン・ドヴォルザーク

Antonin Dvořák (1841-1904)

## ピアノ五重奏曲イ長調

Quintet for Piano & Strings in A, Op.81

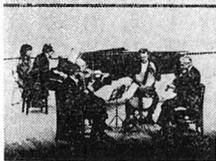
古今のヴァイオリン協奏曲の冠たるものにベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームス、それにチャイコフスキの計四曲があるが、奇しくもこの四人のヴァイオリン協奏曲は、こんにち一般に演奏されるものとなるとそれぞれ一曲ずつしかない。ピアノ五重奏曲の場合にもそれによく似た事情がある。すなわち、その最大の書き手はおそらくシューマンとブラームスだろうが、彼らもこの曲種はたった一曲のこしただけだった。しかもそれらは、二人の個性のたいへんわかりやすい肖像として広い人気を得ていることでも共通しているのである。

ドヴォルザークは比較的若いころにもピアノ五重奏曲を一曲(作品五)作りはしたが、それはほとんど忘れ去られ、現在取り上げられるのは一八八七年作のこれ一曲にすぎない。そしてこの五重奏曲もやはり、ドヴォルザークの音楽の美質を集約的に表わし出して、彼屈指の人気作となっているのである。こんなと湧き出る楽想の豊かさはまさに独特のものであり、さらに楽器用法も非凡で、ピアノと弦との対話の妙、音色の精細な使い分けがすばらしい。楽章の数は四つだが、第二楽章と第三楽章はそれぞれへドゥムカ、へフリアントとなっていて、つまり中間の

二つの楽章に民俗色を開け広げにしておき、両端楽章は古典的形式のうちにその民俗感の裾野が楽想に浸透して広がっているという具合にできている。これはほかの曲にも見受ける手法で、ドヴォルザークの室内楽的課題のひとつの解決法とみることができよう。

レコードはあまり豊富とは言えないが、幸いハハラとスメタナ弦楽四重奏団の決定盤的な一枚がある。これは「ヘアメリカ」でもふれた一九七八年の来日公演の実況録音盤で、冒頭から柔らかな気分が覆われていてそれこそ夢みるように美しい。いかにもドヴォルザークの音楽の魅力を知り尽くし、心からそれを楽しむことのできる人たちの演奏である。音もこの団体にふさわしい適度なシャープさで録音されている。同じくワルテットとシュテパンによるレコードも、音の鮮度はだいぶ落ちるが演奏そのものは申し分ない。ほかに目につくのはフィルクスニーとシュリアード弦楽四重奏団の共演だが、これはアンサンブルの求心力こそ非常に強いものの、気分までがやや固く凝ってしまっ、スメタナ四重奏団のように開放されない。そのため表情がときに作りごとのようにきえることがある。それにピアノの主導性も存外弱い。

DVOŘÁK  
STRING QUARTET IN F MAJOR  
"AMÉRICAIN"  
PIANO QUINTET IN A MAJOR  
SMEĀNA QUARTET JOSEF BALÁ



◀ハハラ (p) スメタナSQ (弦楽四重奏曲第12番) ...  
De-OS7179 ●シュテパン(p) スメタナSQ (シュー  
マン/p五重奏曲) ...A-EAC50100 ●フィルクスニ  
ー(p) シュリアードSQ (バガテルOp.47) ...CS-  
25AC231

## ガブリエル・フォーレ

Gabriel Fauré (1845–1924)

### ヴァイオリン・ソナタ第1番イ長調

Violin Sonata No.1 in A, Op.13

フォーレは三十歳のころから文字どおりの最晩年に至るまで五十年間近くにわたって室内楽に取り組み、チェロとピアノのための〈エレジー〉をはじめとするさまざまな小品を別にしても、この分野にちょうど十曲の本格的な作品を書きこした。その中には駄作がひとつもない、と言うよりもすべてが傑作と呼ぶに価するもので、ロマン派としては、フォーレはブラームスに次ぐ偉大な室内楽作曲家であったと断言することができる。

その十曲の最初を飾るのがイ長調のヴァイオリン・ソナタで、フォーレはそれまでに声楽曲とピアノ曲だけを公にし、一回演奏した〈管弦楽のための組曲〉は引つ込めてしまった。作曲は一八七五年に大部分行なわれ完成はその翌年、三十歳を過ぎたときである。フランスにフランクのヴァイオリン・ソナタが出るまでにまだちょうど十年かかる。フォーレはこの曲を作ったころ美しい恋愛の中にいた。それは結局結果はしなかったが、この曲はそんな不吉な予感など一片もないころの彼の心を映し出しており、むせるような若さの匂い、優しさ、情熱、悦楽といったものが渦巻いて交錯している。実際、この曲ほど青春のほてりの立ちこ

めたヴァイオリン・ソナタは珍しいだろう。しかし、当時この曲は不評で、わずかにサン＝サーンスだけが高く評価したといわれる。

ヴァイオリン・ソナタはフォーレの室内楽曲としてはレコードの多い分野で、とくにこの第一番は手許の目録をみると十二種類もの録音がある。ガロワ・モンブランとユボアの演奏は中でもすばらしく、やや愛想がないと思われるほどに俗臭を厳しく退けて、曲の高貴な詩情を気品高く表出することに成功している。とくにピアノは実にしっかりしたものだ。グリュミオーの新しい録音（ピアノはクロスリー）は持前のつややかな音色美をいっばいに活用して全曲をどこまでもなめらかに歌い上げたもの。もちろんこの曲はそれだけで表現し尽くせるわけではないが、やはりこのヴァイオリンの魅力は非凡である。フランチェスカッティとカサドシュの演奏は芸がこまかい。前者の楽器操作術はさすがに大したものだ。このほかのレコードは一長一短で、たとえばボベスコは例によって上品だが音楽が少しおとなしすぎ、ゴトコフスキーもたっぷりした美音を持ちながら表現にしばをつかみきれぬもどかしさがある。カントロフ盤は音のよいレコードだが、演奏はいかにも線が細い。

◀ガロワ・モンブラン(vn)ユボア(p) [第2番]…E-R E L3148 ●グリュミオー(vn)クロスリー(p) [第2番]…Ph-X7943 (廃盤) ●フランチェスカッティ(vn)カサドシュ(p) [第2番]…◎CS-SOCU58 ●ボベスコ(vn)ジャンティ(p) [第2番、アンダンテ、子守歌]…Ph-25PC150 ●ゴトコフスキー(vn)ハイドシュック(p) [第2番]…R-RC L8043 (廃盤) ●カントロフ(vn)ブラネス(p) [第2番、子守歌]…De-OX7085



## ガブリエル・フォーレ

Gabriel Fauré (1845–1924)

### ピアノ四重奏曲第1番ハ短調

Piano Quartet No.1 in c, Op.15

フォーレの室内楽曲十曲の中にはブラームスのようにクラリネット、ホルンなどの管を使った作品はなく（小品にはあるが）、また弦のみのものは最晩年の四重奏曲がわずかに一曲だけ、あとはすべてピアノと弦との組み合わせである。しかしその中身はきわめて多種多様で、ヴァイオリン・ソナタ（二曲）、チェロ・ソナタ（二曲）、ピアノ三重奏曲（二曲）、ピアノ四重奏曲（二曲）、そしてピアノ五重奏曲（二曲）という具合に、ロマン派室内楽の主要な曲種をほぼ網羅している。

このピアノ四重奏曲第一番は一八七九年、最初のヴァイオリン・ソナタの三年後の作品で、フォーレの室内楽第二作である。演奏される機会が多いことでもこの曲はヴァイオリン・ソナタに次ぐが、それは楽想の性格がはつきりしており、感情表現が豊富なせいだろう。またピアノと弦との処理の仕方が比較的效果に富んでいて、音響的に快く出来ているためもある。その点ではドイツのロマン派作曲家たちがピアノ入りの多重奏曲を書くときの最初の課題が、フォーレのフランス的センスの中で繰り返されているようにもみえる。なお、この第二作以後のフォーレの室内楽曲九曲がすべて短調で書かれているのはおもしろい。

レコードはピアノのユボー以下、ガロワ・モンブラン、ルキアン、ナヴァラとフランスのヴェテランたちを集めて吹き込まれたものが立派な出来である。ふつくと広がる網の目のようなアンサンブルの中に、音楽の表情も、響きの色彩も、そして内面の訴えも、どれも実にさまざまにニュアンスを含みながら豊かに盛られている。造型も一本ぴんと筋が通っていて、その主知的なアプローチのたしかなさと、そのもたらず高い格調もただならぬものだ。ティッサン・ヴァランタンとORTF弦楽四重奏団員の演奏はそれにくらべると少しく平板な印象がある。しかしこれもセンスは悪くない。サンローマとブダペスト弦楽四重奏団員のレコードは一九五六年のライヴ。弦の語り口には例によってどこかぶっきらぼうなところがあるが、それでいてほのかな雅味がおのずから立ちのぼってくるあたりに独特の味わいが生じている。またカサドシュとカルヴェ弦楽四重奏団員は気迫のこもった熱演で、これも音の古さを忍べばききこたえ十分だ。なおジャン・フィリップ・コラルルらによる新しい、しかもすぐれた演奏があるが、これは「室内楽全集」という大きなセットの中に入っていて現在のところ単独には入手できない模様。

◀ユボー(p)ガロワ=モンブラン(vn)ルキアン(va)ナヴァラ(vc) [第2番]…E-EX2327 ●ティッサン=ヴァランタン(p) ORTF-SQ [組曲「ドリー」]…Cha-PAC18019 (廃盤) ●サンローマ(p)ブダペストSQ員 [フランク/p五重奏曲]…◎CS-SOCU44 ●カサドシュ(p)カルヴェSQ員 [F.シュミット/p五重奏曲～第2楽章、ラヴェル/序奏とアレグロ]…◎A-GR2226 (廃盤) ●J-P.コラルル(p)デュメイ(vn)パスキエ(va)ロデオン(vc)…A-EAC50126



## ガブリエル・フォーレ

Gabriel Fauré (1845–1924)

### ピアノ四重奏曲第2番ト短調

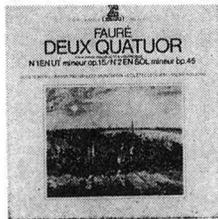
Piano Quartet No.2 in g, Op.45

第一番ハ短調の七年後、フォーレ四十一歳の一八八六年の作。あのヘルクイエムとそれは同時期だが、その年に最愛の父を失った悲しみの直接の表現はこのピアノ四重奏曲の中には映し出されていない。曲の核心をなすすばらしく詩的なアダージョ楽章は、幼年期を過ごした土地アリエージュへの思い出から生まれた。全体の構想は第一番よりだいぶ大きく、強い緊張感を備えた名作であるが、演奏される頻度はむしろこちらの方が低いようである。

ところでこの曲はフォーレの室内楽第三作で、つまり本書では十曲のうち初めの三曲だけにしか一項を設けなかったわけだが、これは主として知名度で選抜した結果であって、残る七曲がこれらよりも作品として劣るわけでは絶対ない。とくにフォーレの場合、七十歳を過ぎてからの仕事ぶりがものすごく、十曲のうち実に六曲までが一九一七年以降に書かれていて、しかもそれらの水準の高さたるや驚くべきものなのである。そのうち筆者の最大のお勧め品はピアノ三重奏曲だが、最高傑作の誉れが高いピアノ五重奏曲第二番も決して親しみにくい作品ではないのにポピュラリティの点ではばつとしないのが不思議だし、また二曲のチ

エロ・ソナタや弦楽四重奏曲も、これらはいわゆる通俗名曲とはなり得ないにしても本当に熟した筆致をみせる傑作で、おそらく本書の読者なら真価を十分に納得されるものと思う。話が少々脱線したが、フォーレ後期の室内楽曲がいまなお過小評価されているのをつねづねもどかしく思っているひとりとして、この機会に私見を述べた次第。

さてピアノ四重奏曲第二番のレコードだがこれもユボー、ガロワモンブランらによる名盤がある。第一番にもまさるすばらしい演奏で、必ずしも広く知られてはいないこの曲の美点をあますところなく掘り起こしたたいへん貴重な一枚である。フォーレ独特の弾力に富んだ音の流れがすこぶる自然に処理されており、しかもその中に第一番同様さまざまな滋味が湛えられている。中でもひっそりとした響きの奥に痛切な思いを秘めた第三楽章は、この名手たちによる一連のフォーレ録音の中でも最も美しい一ページではなからうか。ジャン・フィリップ・コラールらによる録音(弦の顔ぶれは第一番と異なる)はやはり「室内楽全集」の中に入っているもので、ピアノは好演の部類に属する。ただし弦は若干張り切りすぎで、表現にくだいところが出ている。



◀ユボー(p) ガロワ=モンブラン(vn)ルキアン(va)  
ナヴェラ(vc) (第1番)…E-E X 2327 ● コラール  
(p)ゲスタン(vn)コセ(va)ベスナー(vc)…A-E A  
C50127

レオシュ・ヤナーチェク

Leoš Janacek (1854—1928)

弦楽四重奏曲第2番《ないしょの手紙》

String Quartet No.2 "Intime Briefe"

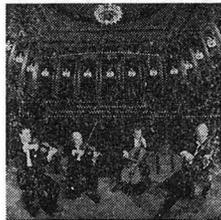
元気もののヤナーチェク老があっけなくこの世を去ってしまったのは、ある人妻とその子供とを連れてピクニックに出かけ、そのとき迷子になった子供を雨の中を周囲がとめるのを振り切って探しに行つて、それがもとで肺炎になったからだと言われている。だがこれはどうやら作られた美談であるようだ。いい年をして女性ばかり追い回していた彼にはあまり上等なエピソードがなく、それを気の毒に思った誰かが、せめて死に際ぐらいはとそんな話を捏造したらしいのである。実際ヤナーチェクにとつて女性というのは人生の大問題だったようで、彼が書いた二曲の弦楽四重奏曲さえもがどちらも男女人間の情愛に関わりのある内容を持つている。そしてその第一番の曲でトルストイの小説《クロイツェル・ソナタ》の思想に抗議した作曲者は、それを身をもって示すかのように、実生活の上でも晩年の十年あまりの間、れっきとした妻がありながら三十八歳も年下の人妻カミラ・シュテツスロヴァーに熱をあげ、懇ろな付き合いを続けていたのである。ピクニックの人妻というのももちろんそのカミラだった。

弦楽四重奏曲第二番は第一番から五年をへた一九二八年、ヤナーチェク

クの死の年に書かれた。彼はカミラに宛てて何と六百通をこえる手紙を書き送っているが、この曲はそれらに綴られた彼の想いを音楽に託して表現したものらしい。標題の《ないしょの手紙》とはつまりラヴ・レターにほかならないのである。弦楽四重奏曲としての書き方は第一番よりもいっそう自由で、既成の何物にもこだわらない。ほとんど天衣無縫の、それでいて実に引き締まったまとまりを持つ作品である。

レコードは現在のところスメタナおよびヤナーチェク両弦楽四重奏団によるものしかないし、またそれで十分だろう。まずスメタナ四重奏団はこの曲を四たび録音しているが、その最後のもの、すなわち一九七九年のライヴ盤が最高の名演。いつもながらの完成度の高さに加えてただならぬ気迫を感じる。ヤナーチェク四重奏団もこの曲では一步も譲らない。表現的な強いひきぶりにこの作曲者の音の選び方の直截さがいきいきと出ている。なお日本で発売される可能性は低いと思うが、筆者はハヴラーク四重奏団というチェコの若いクワルテットの非常にすぐれたライヴ録音をきいたことがある。やや先物買いのきらいはあるが、必ず頭角を現わしてくるに違いない有望団体なのであえて紹介した次第。

◀スメタナSQ '79年録音 [第1番]…De-OX7192●  
ヤナーチェクSQ [第1番]…Sup-OZ7139





## クロード・アシル・ドビュッシー

Claude Achille Debussy (1862—1918)

### ヴァイオリン・ソナタ

Violin Sonata

ドビュッシーが完成した室内楽作品は小品を除くと四曲しかない。その第一作は別掲の弦楽四重奏曲でそれだけは若いころの作であるが、残る三曲はいずれも晩年を迎えてから書かれている。周知のようにドビュッシーは、その最後の時期にさまざまな楽器の組み合わせによるソナタを実は全部で六曲計画したのだが、運命は無情にもその折り返し点にたどり着いたところで彼の生命を奪ってしまったのである。ヴァイオリンとピアノのためのソナタはその三番目の曲で、この作曲家の全作品の中でも最後のものにはかならない。着手されたのは一九一六年、そのあと癌の手術をくりくり抜けて作曲が続けられ、翌一七年二月にひととおり完成にこぎつけたが、ドビュッシーはなおも気力を振り絞って終楽章に手を入れ、さらに同年五月十五日の初演ではみずからピアノを弾いた。それは彼がパリの聴衆の前に姿を現わした最後の機会で、翌一九一八年三月にはもう死が待っている。

このヴァイオリン・ソナタは、少なくとも本書の中に取り上げてきた同種の曲の系列には編入することができない。まったくユニークで、徹底的にドビュッシー個人の作品である。演奏時間も思いきり短い、饒

舌からは完全に遠のき、この作曲者流儀で煎じ詰められた表現しか使われていない。叙情も高揚も極限まで洗練され、強く瞬間的に訴えて消散してゆく。

新しいレコードがたくさん出ているが、それでもなおティボーとコルトーによるものは、いまでも感動をもつてきける最大の名盤のひとつである。コルトーのピアノの豊潤さもティボーのヴァイオリンのうつろいやすい美しさも、いまの多くのドビュッシー的イメーシには温暖すぎるかもしれないが、やはりセンスの高さは争えない。音質もこの二人のレコードとしては比較的良好に入る。それとは反対にごく新しい録音では、鄭京和とルプーの共演盤がまず目につく。ピアノの表現にはもうひとつぴんとこないところもあるが、このデュオはときおりはつとずるほど美しい表情をみせることがある。このほかモノラル盤のフランチェスカッティとカサドシュ、ステレオのグリユミオーとハイデューの演奏が、やや対照的なひきぶりながらどちらのヴァイオリンもとびきり達者なところをみせている。さらにシルーニックとユボーのレコードもその趣味のよさが光る貴重な一枚だ。



◀ティボー(vn)コルトー(p)〔シュベルト/ソナチネ、モーツァルト/セレナード第7番〜ロンド他〕  
●A-GR70010●鄭京和(vn)ルプー(p)〔フラメンコ/vnソナタ〕…L-L20C2084●フランチェスカッティ(vn)カサドシュ(p)〔フランク&ラヴェル/vnソナタ〕…●CS-20AC1901●グリユミオー(vn)ハイデュー(p)〔フォーレ/vnソナタ第1番、フラメンコ/vnソナタ〕…Ph-13PC243●シルーニック(vn)ユボー(p)〔神聖な舞曲と世俗的な舞曲, fl,va & hpソナタ, vcソナタ〕…E-EX2309

## クロード・アシル・ドビュッシー

Claude Achille Debussy (1862—1918)

### フルート、ヴィオラとハープのためのソナタ

Sonata for Flute, Viola & Harp

ヴァイオリン・ソナタのところでふれた晩年の六曲のソナタ（実際は三曲）の第二作で、テロ・ソナタに引き続いて着手され、それと同じ一九一五年に完成された。フルート、ヴィオラ、ハープのためのソナタ（三重奏曲）というのはいへん珍しく、少なくとも現在よく演奏される室内楽曲の中にはほかにはまったく例をみない楽器編成だが、ドビュッシーのそもその音楽的発想がそれと分かち難く結びついたものであったことは、この曲を実際にきけば誰しもが納得し得るところだろう。ちなみに、惜しくも幻のソナタとなつてしまった三曲はそれぞれハオーボエ、ホルン、クラヴサン、ヘトランペット、クラリネット、フアゴット、ピアノ、ヘコントラバスを含むいくつかの楽器という組み合わせで、もし完成されていれば、それらもまた独特の美しさを誇るものになつていたに違いない。

実際このソナタの楽想の美しさと色彩のあでやかさは類をみないもので、そのために人気も高く、ことに日本人の感性に訴えるところが多いようである。しばしば少し甘く味わわれすぎるくらいがなくなさそうではあるが。

この曲にはランパル、バスキエ、ラスキースによる早くから定評のあった名盤がある。これだけの名手が揃つて悪かるうはずがない。ともかく非凡な音の美感である。解放的な色調を持つフルートに対してバスキエの深い官能性を秘めたヴィオラが鎮静的な役割を果たし、ラスキースのハープはさすがに長年ひきこんで余分な装飾的気取りなど完全に引こめて、ひとつひとつの音の粒にセンスの結晶が輝いている。ただ致し方のないことではあるけれども、絶えずきこえてくる鼻息は若干耳につく。これ以外にもレコードは豊富で、みなそれぞれに美しい。ブルダン、ルキアン、シャランのトリオは非常に丹念な語り口をみせており、気分が流されず、楽想をひとつひとつきりと描いていてすがすがしい。デボスト、メニューイン、ラスキースは後二者がさすがに大物ぶりをみせる。とくにメニューインのヴィオラは強い訴えを持っていて、しばしばフルートがかすむほどだ。ヴァルターら珍しくドレスデンの演奏家たちによるレコードもあり、表情にはたしかにはかにはないまじめさはあつるものの、どうしてこれも垢抜けした柔らかな演奏ぶりである。それにこのレコードは音がよい。



●ランパル(fl)バスキエ(va)ラスキース(hp)〔神聖な舞曲と世俗的な舞曲、vnソナタ、vcソナタ〕…E-E X 2309 ●ブルダン(fl)ルキアン(va)シャラン(hp)〔vnソナタ、vaソナタ、シラungkス〕…Ph-13 PC 49 ●デボスト(fl)メニューイン(va)ラスキース(hp)〔vnソナタ、vcソナタ、シラungkス〕…A-EAC 40140 ●ヴァルター(fl)ウルブリヒト(va)ツ★フ(hp)…〔vnソナタ、vaソナタ、シラungkス〕…DS-E T 5123

## クロード・アシル・ドビュッシー

Claude Achille Debussy (1862-1918)

### 弦楽四重奏曲

String Quartet

ドビュッシーの弦楽四重奏曲はこれ一曲しかない。作曲は一八九二年から翌年にかけて、彼が三十歳を迎えたころに行なわれた。それまでに書いた作品はもうかなりの量に達してはいたが、彼の名を一躍高めた〈牧神の午後への前奏曲〉はまだ完成をみていない。つまりドビュッシーの名作時代はこの弦楽四重奏曲をもって始まるのである。

この曲が発表されたのがフランクが最後の年に弦楽四重奏曲を世に問うたわずか三年後であることを思えば、ここで作曲者がどんなに大胆なことを行ない表明したか、驚くべきものがあると言わざるを得ない。もともとこの作品にはおそらくフランクの遺産と考えられる精密な循環形式の作法があるが、しかし旋律も和声も完全にドビュッシーその人のユニークな感受性で満たされていて、つまり誰もが決して弦楽四重奏で意図もせず実現もしなかつたものが出現したのである。弦楽四重奏曲という曲種は、これまで多かれ少なかれベートーヴェンの傘下に置かれることを余儀なくされていたのだが、その引力圏外にここで初めて飛び出したのだ。後期の室内楽曲の簡明さや潔癖さはこの曲にはないが、四挺の弦によって描かれるまるで霧のヴェールのような肌ざわりには、

作曲者の若い甘美な心情が宿っている。

レコードはまずパルナン弦楽四重奏団盤を挙げておきたい。音の質が独自の透明感を持ち、わずかに甘さへの憧れのようなものが漂う。各声部のこまやかな織り合わせに、微妙なものに触れているときめきを感じられるのも美しい。やや月並なイマジネーションであるかもしれないが、この演奏をきくたびに思い出すのは、パリのオランジュリでモネの〈睡蓮〉をみたときの感動である。次にラサール弦楽四重奏団の演奏は、パルナン四重奏団のそれから趣味性をすっかり払拭したような明澄なもの。しかしどんなに精細でも機械的な冷やかさには傾かない。色彩は前者にくらべてやや少ない。東京クワルテットの演奏も非常に立派なもので、これはこの四重奏団の若き日の記念盤である。技術はもとより、全曲の見通しのよさと表現の緻密さにもどの団体にもひけをとらないだけのものがあるばかりでなく、弾むような若くはつらつとしたアンサンブルがすばらしい。もう一点、イタリア弦楽四重奏団盤も悪くない。一九六五年の録音で、表現に最近の彼らほどの厳しさと成熟感はないが、豊麗な音色美と甘い香りが独特である。

◀パルナンSQ [ラヴェル/弦楽四重奏曲]…A-EA C50134 ●ラサールSQ [ラヴェル/弦楽四重奏曲] …G-MG2388 ●イタリアSQ [ラヴェル/弦楽四重奏曲]…Ph-18P C5547



## アルノルト・シェーンベルク

Arnold Schönberg (1874—1951)

### 弦楽六重奏曲《浄められた夜》

Sextet for Strings "Verklärte Nacht", Op.4

シェーンベルクには室内楽曲が多く、それらを彼の作品系列の中にみて技法を中心にたどってゆけば、それぞれに意図するところを浮き彫りにして、大きっぱに優劣などを言うのは無意味に近くなる。ことに彼のように音楽の書き方の根源のところで思考を重ね、その実践としての作品を積み上げていった人の場合、ひとつひとつの曲はその成果の里程標としての意義が強く、また作品を論ずる側にしてもその点に焦点を当てて語るのには避けられぬところで、普通の意味での芸術的成果を問うのとは少し趣が違ったものになるのはやむを得ないことだろう。

とは言え作品のポピュラリティという面からみる限りでは、明らかにこの《浄められた夜》が断然他を引き離す存在である。音楽の質がいかにそのようなものだし、合わせて標題が大きくものを言っている。デーメル詩集《女と世界》の中の詩を忠実に音詩化した曲で、楽器編成はブラームスの弦楽六重奏曲と同様ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ各二挺である。のちにこれは再度弦楽合奏用に編曲され、オーケストラの演奏会でその合奏用の曲としてきくことが多かった。実演ではいまも室内楽形態では取り上げられにくい。しかし原曲の弦楽六重奏の方が繊細

微妙な線の動きはもちろん、官能的な音色の魅力も豊かに楽しめ、合奏の場合はよほど指揮者にその辺の配慮が徹底していないと、やたらにぼてぼてとだぶつき、線のなものが失われておもしろくない。

曲の完成は一八九九年、シェーンベルクはまだ二十五歳で、いわゆる十二音音楽の技法にたどりつくのははるかに先のことである。ドイツ・ロマン主義のもろもろの表現法、あるいはフランスの印象主義など、この曲のさまざまな源流を尋ねることはもちろん容易だが、何よりもシェーンベルクの個性の美しさに私たちは虜になってしまう。

弦楽六重奏版による録音にはブーレーズ指揮ドメヌ・ミュージカル・アンサンブル盤がある。シャープな弦の線の織地がすばらしく、叙情はひんやりとした肌ざわりで透明感が強い。もちろんもつとほのぼのとした表現も可能だろうが、これはこれでひとつの極限的な美しさである。もうひとつ、巖本真理弦楽四重奏団ら邦人によるレコードがある。繊細でしかも表情的な響きを持つすぐれた演奏で、この四重奏団のこした貴重な成果のひとつである。なお弦楽合奏版にはブーレーズ指揮ニューヨーク・フィルの演奏をはじめ、レコードが少なくない。

◀ブーレーズ/ドメヌ・ミュージカルEns.〔セレナー  
ド〕…C-OW7572 ●巖本真理SQ、江戸純子(va)  
藤田隆雄(vc)〔巖本真理弦楽四重奏団の芸術〕…A  
-EA C60199~211

ARNOLD SCHÖNBERG  
VERKLÄRTE NACHT, Op.4  
SERENADE, Op.24  
J.-F. RONDELEUX  
DOMAINE MUSICAL  
ENSEMBLE  
CONDUCTED BY  
PIERRE BOULEZ

## モーリス・ジョセフ・ラヴェル

Maurice Joseph Ravel (1875-1937)

### ヴァイオリン・ソナタ

Violin Sonata

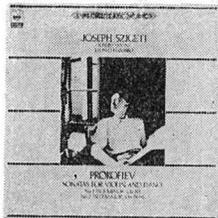
ラヴェルの室内楽曲は決して多くない。二重奏曲は三曲、しかもそのうちの一曲はごく最近になって発見された単一楽章（未完？）の習作的なヴァイオリン・ソナタで、本格的な作品はつまり二曲ということになる。そのひとつはヴァイオリンとチェロというまったく異例の組み合わせのためのソナタ、そしてもう一曲がこのヴァイオリン・ソナタで、これら二曲は二重奏の中での大胆な試みという点で共通した精神の上に立っている。実際ヴァイオリンとチェロのためのソナタが一九二二年（四十七歳）に出来上がると、翌年にはこのヴァイオリン・ソナタが着想された。しかし、オペラ《子供と魔法》の仕事に追われてそれはあとまわしになり、結局一九二七年まで完成は延びてしまう。このあとの名作としては《ホレロ》、二曲のピアノ協奏曲などしかない。

ラヴェルはヴァイオリンとチェロのためのソナタで二つの旋律楽器をことさらにおつけ合わせたのが、このヴァイオリン・ソナタでもやはり別の意味で相容れない二つの楽器の対立をもくろんだ。その典型は第二楽章の《ブルーズ》である。ここでは二つの楽器はまるで背中を向け合ったように演奏する。ここにブルーズ（いわゆるブルース）が飛び込んだの

は第一次大戦後パリでも流行したアメリカの音楽の投影で、手法的にはブルー・ノーツや鋭いシンコペーションが用いられており、さらにヴァイオリンはバンジョーの音やサクソスのグリッサンドを模倣したりもする。

なおこの曲の初演は、完成の年にエネスコとラヴェルによって行なわれている。おもしろい二重奏であったろう。

モノラル録音だがシゲティとブソツティのレコードが、いかにもこのヴァイオリンにふさわしい硬質な演奏でおもしろい。通常の意味での美感は放棄して、ラヴェルの真剣な好奇心と知的な遊戯性とを端的にえぐり出している。ヴァイオリンもピアノも背を向け合いのしり合っているような表現がある。これに対してフランチェスカツティのヴァイオリンは官能性を秘めたその音色と歌い回しがさすがに美しい。バルサムのはピアノも好演。これもモノラルだが音質は申し分ない。新しい録音にデュメイとコラルの共演盤があり、やや一本調子ながら若者らしいまっすぐなアプローチに好感が持てる。さらにカラシリとバルダが、わが国では無名の人たちだがいっそう熟したデュオを展開している。



◀シゲティ(vn)ブソツティ(p)〔ヒンデミット/vnソナタ第3番、プロコフィエフ/無伴奏vnソナタ、5つのメロディ〕…◎CS-20AC1909●フランチェスカツティ(vn)バルサム(p)〔フランク&ドビュシー/ソナタ〕…◎CS-20AC1901●デュメイ(vn)J-P.コラル(p)〔p三重奏曲、vnソナタ(遺作)〕…A-EAC90013(魔盤)●カラシリ(vn)バルダ(p)〔ヴィガース、p三重奏曲〕…Cal-V I C2168(魔盤)

## モーリス・ジョセフ・ラヴェル

Maurice Joseph Ravel (1875-1937)

### ピアノ三重奏曲イ短調

Piano Trio in a

ラヴェル唯一のピアノ三重奏曲で、演奏される機会は多くないがこの作曲家の書いたすぐれた作品のひとつである。ラヴェル三十九歳の一九一四年の作で、これを書いている最中に第一次世界大戦が勃発した。愛国心に燃える彼は居ても立ってもいられず兵役に志願したものの、健康上の理由で不採用となる。しかしそれでもあきらめきれない彼は、いく度も軍当局に足を運ぶとともに、いつの日か前線に立つ自分の姿を胸に思い描くのである。そのような状況の中で書かれただけに、ラヴェルはおそらく、この曲が自分の遺言になるかもしれないと覚悟していたに違いない。実際このピアノ三重奏曲では、彼はそれまでの総決算とも言うべき成熟した書法を繰り広げるとともに、芸術家としての激しい情熱をまさしく完全燃焼させるのである。初演は一九一五年一月二十八日にエネスコのヴァイオリンそのほかによって行なわれた。なおラヴェルはその後、トラックの運転手として本場に飛び出してゆく。

曲は全四楽章の整ったしかも堂々たるたたずまいを持ち、パッサカリアの手法による第三楽章の高貴さと終楽章の華麗さとは中でも見事である。同じころ、すでに肉体を冒されていたドビュッシーは彼なりに音楽

での戦いを義務と感じ、最後期の一連の室内楽曲にとりかかると、ラヴェルもまた彼とは違った個性で、やはり祖国の文化に奉仕したのであった。

昔からこの曲はレコードがあまりなく、一九八三年版のカタログにも三点が載っているにすぎない。その中では、このところ室内楽録音にすこぶる積極的なところをみせているフランスの若手グループ、ジャン・フィリップ・コラル、デュメイ、ロデオンの三人による新しい吹き込みがすぐれた出来栄である。ピアノに若干硬い、メカニカルな感触はあるが、気迫に満ちた、しかもセンスのよい演奏だ。バルダ、カラシリ、ハイツのトリオによるレコードは、録音は一九七二年となっているが、日本で紹介されたのは比較的最近のことである。とくに強い個性の輝きはみえないものの、アンサンブルの呼吸や響きの質、あるいはちょっとした表情の端々に、品のよいエスプリを感じる。プリュデルマシエ、ジャリ、トゥルニユの演奏は三点の中では最も早くから親しまれていたもの。ピアノにはもう少しがっちりしたところがほしいが、ヴァイオリンとチェロは感情表現がしっかりしていて見事である。



◀J-P. コラル (p) デュメイ (vn) ロデオン (vn)  
[vnソナタ, vnソナタ (遺作)]…A-EAC90013●  
バルダ (p) カラシリ (vn) ハイツ (vc) [ツィガ  
ス, vnソナタ]…Cal-VIC2168 (廃盤)●プリュ  
デルマシエ (p) ジャリ (vn) トゥルニユ (vc) [vnソ  
ナタ, vnとvcのためのソナタ]…A-EAC40141

## モーリス・ジョセフ・ラヴェル

Maurice Joseph Ravel (1875—1937)

### 弦楽四重奏曲へ長調

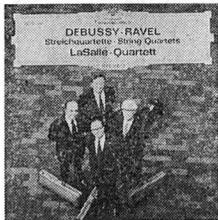
String Quartet in F

ラヴェルもドビュッシーと同様、弦楽四重奏曲は一曲書いただけだった。ついであるがフランクとフォーレにもこの曲種はやはり一曲しかなく、しかもこの二人の先輩がともに最晩年に曲を発表したのとは対照的に、ドビュッシーもラヴェルもそれぞれの作曲家生活の初期に弦楽四重奏曲を手がけたのは興味深い事実である。ちなみに四曲を完成順に並べれば、フランクが一八九〇年（六十八歳）、ドビュッシーが一八九三年（三十一歳）、ラヴェルが一九〇三年（二十八歳）、フォーレがずっと遅れて一九二四年（七十九歳）となる。ラヴェルの師に当たるフォーレが一番遅くこの分野を取り上げ、しかもラヴェルの弦楽四重奏曲がほかならぬそのフォーレに捧げられているのもおもしろい。

それはともかく、ラヴェルのこの曲は本当にすばらしい。感覚は新鮮だし、まとまりはきちんとしており、弦の用法は巧妙をきわめ、しかもそれらを総合して無類の生氣と安定感を持っている。音楽のどんな隅っこにもラヴェルがさまざまな顔つきで立っていないところは無いし、全体がまた実にスマートなラヴェルなのだ。形からみても内容からみても、彼が十年前のドビュッシーの作品を強く意識したことは疑う余地が

ないが、曲の出来栄えはそれをさえ凌ぐものである。なおドビュッシーはこの曲を絶賛し、それ以上手を加えぬよう忠告したが、出版された楽譜にはかなりの改訂の跡があったということだ。

レコードはかなり豊富で、そのほとんどがドビュッシーの弦楽四重奏曲と組み合わせて一枚になっている。そのドビュッシーのところで挙げたパルナン弦楽四重奏団の演奏がここでも独特の響きの美感とエスプリできき手の心を奪うが、ラヴェルの場合はラサル弦楽四重奏団の演奏がむしろそれにもましてすばらしい。造型の美しさ、研ぎすまされた感性、そしてきりりと引き締まったアンサンブルが、ラヴェルの音楽の美質をもの見事に描き尽くしている。東京クワルテットのラヴェルも悪くない。技巧の切れ味と単刀直入に物を言うような語り口がきわめて強い説得力に結晶している。このほかにも、曲の構成面での美しさを浮き彫りにしたメロス弦楽四重奏団盤、例によって音色と歌の美しさを誇るイタリア弦楽四重奏団盤など、一聴に価するレコードは少なくない。なお、ヴィア・ノヴァ四重奏団盤は復活したが、ブダペスト四重奏団の記念的なレコードは目下廃盤の様様。



◀ラサルSQ [ドビュッシー/弦楽四重奏曲]…G-MG2388 ●パルナンSQ [ドビュッシー/弦楽四重奏曲]…A-EAC 50134 ●東京SQ [ドビュッシー/弦楽四重奏曲]…CS-25AC692 ●メロスSQ [ドビュッシー/弦楽四重奏曲]…G-MG1233 (廃盤) ●ヴィア・ノヴァSQ [ドビュッシー/弦楽四重奏曲]…E-REL3539

ベラ・バルトーク

Béla Bartók (1881—1945)

## ヴァイオリン・ソナタ(全2曲)

Violin Sonata: No.1, Sz.75: No.2, Sz.76

バルトークはヴァイオリンとピアノのためのソナタを三曲書いているが、うち一曲は学生時代の習作で、よく演奏されるのは残りの二曲、いわゆる第一番と第二番である。作曲は前者がバルトーク四十歳の一九二一年、後者がその翌年と踵を接して行なわれた。时期的にみるとこれは彼が民俗的な素材をそのままの形で使うことをやめ、より広い視野から絶対音楽をもう一度みつめ直すところで、ヴァイオリン・ソナタもその意味で大きな意義を持つ作品となっている。歌う楽器としてのヴァイオリンの独特の性格と、ピアノの打楽器的な用法を深く追究し、それらを対比的に扱って見事な効果をあげているのがひとつの特徴である。少し遅れるがラヴェルがやや異なるセンスで同様のことを考えた。しかし彼のヴァイオリン・ソナタの新鮮さがあくまでも西欧の中でのものであるのに対して、バルトークの場合もっと広大な視点に立つ。事の優劣はどのような条件によってだけでは決められないが、バルトークの方がはるかにシヨッキングな仕事とみえるのは当然である。第一番は通常の三楽章構成だが、第二番は切れ目なしの二楽章という独特の形態で、音楽内容もいっそう手がこんだものになっている。バルトーク本人としても第

二番の方に強い自負を抱いていたようだ。

レコードは二曲を表裏にしたものが一九八三年版のカタログに二種類あり、いずれも名盤と呼ぶに価する。とくにスターンとザークンの演奏は圧倒的な定評を誇るもので、強靱な技巧、気迫に満ちた表現、感情の濃密さ、説得力の鋭さ、どれをとっても見事である。普通このようにさまざまの技巧を陳列して作品を料理してゆく作業には、どこか解説的なわだかまりが残って愉快でないことが多いのだが、スターンのバルトークはそうでない。まるでバルトークの音楽的創造欲のアジテーターのようである。もう一枚はクレメールとスミルノフのデュオで、このヴァイオリンも超凡。すこぶる繊細でシャープな感触を備えた演奏だが、音楽が表現するところのものはみかけよりもよほどたくましく、鍛えに鍛えた名刀のような切れ味と硬度を持っている。なお第一番単独ではオイストラフとリヒテルのライヴ録音(一九七二年)もある。オイストラフのヴァイオリンにはかけがえのないものがここで燃え尽きるのではないかと心配したくなるほどの内的高揚があり、リヒテルのピアノはとくに響きの造出に異例の没入ぶりだ。



◀スターン(vn)ザークン(p)…CS-18AC774●クレメール(vn)スミルノフ(p)…Hun-SLA1121 (魔盤) ●オイストラフ(vn)リヒテル(p) [1番とブラームス第2番, プロコフィエフ第1番]…Me-V I C5311~2 (魔盤)

## ベラ・バルトーク

Béla Bartók (1881–1945)

### 2台のピアノと打楽器のためのソナタ

Sonata for 2 Pianos & Percussion, Sz.110

バルトーク五十六歳の一九三七年の作で、弦楽四重奏曲の第五番と第六番との間に位置している。このあたりは室内楽に限らず名作続出の時期で、あたかもヒマラヤの連峰をみるようである。この曲ももちろんその連峰を構成する高峰のひとつである。

曲題にあるようにこの曲の楽器編成はおよそ類例をみない特異なもので、ピアノ二台を室内楽に持ち込むのも異例の試みだが、そこへさらにティンパニ(3)、木琴、二種類の小太鼓、二種類のシンバル、大太鼓、トライアングル、それにタムタムの実に九種類もの打楽器が加わる。そして打楽器は(少なくとも)二人の奏者が分担して演奏する。しかしこのアイディアは好奇実験でも試行でもなく、まったく純粹に音楽的な要求に根ざしている。のちにバルトークはこれを二台のピアノとオーケストラのための協奏曲に作り変えたが、魅力は絶対にこのきりつめた室内楽の方が上である。

バルトーク自身によればこの着想はだいたい以前からのものだったらしい。打楽器の音のイメージ、その表現力を考慮してピアノは二台用いられることになったという。そしてピアノに対し、打楽器は響きのニュア

ンスを付加し、アクセントを強め、ときには対位的なモティーフを加えるよう考えた。第一楽章は異常に大きく、演奏時間はそれだけで半分を費し、終楽章は喜びの気分をいっばいに表わしたのち、空しい終わりを方をする。前途はたしかに予感されていたようだ。

レコードはアルゲリッチ、ビショップ・コワセヴィチ、ハウドスワールト、デ・ルーの四人による名盤が復活している。完成度の非常に高い演奏だが、表現に作爲的な臭いはおよそなく、あくまで自然な音楽の起伏が大切にされていて、いったん気分が盛り上がると文字どおり火花を散らすようなアンサンブルが繰り広げられる。ピアノのいつもいきいきした、表情的な弾きぶりも印象的だ。コンタルスキー兄弟らの演奏もうまいことはまったくうまい。リズムや音色の、硬直したところのない精妙さには感服するばかりだ。しかし、互いに触発し合いながら音楽を作ってゆくアルゲリッチ盤にくらべると、あらかじめ作製された設計図の上で高い技巧を楽しみ合っているような風情があるのが少し不満である。また、人気者のラベック姉妹による鮮烈な演奏も捨てがたい魅力を持っている。

◀アルゲリッチ、ビショップ・コワセヴィチ(p)・ハウドスワールト、デ・ルー(perc)〔モーツァルト/アンダンテと5つの変奏曲、ドビュッシー/白と黒で〕…Ph-20P C1035 ●コンタルスキー兄弟(p)カスケル、ケーニヒ(perc)〔ストラヴァンスキー/2台のソロ協奏曲、1合のpのためのソナタ〕…G-M G1115 (魔盤) ●ラベック姉妹(p), グァルダ, G-P・ドルーエ(perc)…E-REL3196



ベラ・バルトーク

Béla Bartók (1881—1945)

## 弦楽四重奏曲第4番

String Quartet No.4, Sz.91

バルトークはさまざまな室内楽曲を手がけたが、最も重要なのは言うまでもなく六曲を数える弦楽四重奏曲で、これらは彼の全創作の頂点に立つ名作群であると同時に、音楽史上ベートーヴェンの弦楽四重奏曲と並び立つ偉大な室内楽の体系である。音楽家としての問題と、人間的な生き方のしるしを、そこに全面的に、かつ最も誠実、厳粛に刻み込んでいることで、それらは共通している。そしてまたいずれの作曲家にとっても、弦楽四重奏曲は技術的、形式的な課題ではなく、真にそれにふさわしい内的な必然性から取り上げられた。だからこれらの体系は意識に樹立されたものではなく、精神の足跡そのものである。体系を意識したのはむしろブラームスなどであろう。

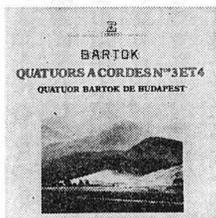
この第四番は第三番とともに中期に属する作品で、第二番からちょうど十年をへて誕生した第三番に引き続き、翌一九二八年に作曲された。その十年間にバルトークは具象的な民謡探究者からその生命感の顕揚者に、そしてさらにその精神的価値を創作の源泉のひとつとする抽象的音楽の創造に向かった。その結論としてこの中期の二曲が登場する。精緻な書法はすでに第二番でも卓越したものであったが、ここでの精緻さは

鋭さ、潔癖をその質とし、研ぎすまされた英知に貫かれている。しかも作品はそれゆえにいっそうふつふつと音楽的意欲をたぎらせて、生命の熱さを感じさせる。

第四番は二つの楽章を切れ目なく続けただけの第三番とは対照的に構想が大きく、五つの楽章からなる。第三楽章を中心にその前後をシンメトリカルに配置したバルトーク得意の書法である。

さてバルトークの弦楽四重奏曲の場合、曲を個別に取り上げた録音はごく少なく、吹き込みはほとんど全集の形で行なわれる。そして計三枚のレコードは、ひとまとめのセットとして発売されるか、二曲ずつに分売されるかのどちらかである。前者にジュリアード四重奏団の新旧二種と東京クワルテット、後者にバルトーク四重奏団とハンガリー四重奏団の録音があり、そのどれもが名盤であるが、それらについては次項で少し詳しくふれることにしよう。この第四番のレコードを一点だけと言われればバルトーク四重奏団を挙げることになろうか。作品への共感がまったく素直に現われ出た演奏で、デリケートな室内楽的美感の中にも随所に激しい気分の高揚をみせて非凡である。

▶バルトークSQ (第3番)…E-REL3151



## ベラ・バルトーク

Béla Bartók (1881-1945)

### 弦楽四重奏曲第5番

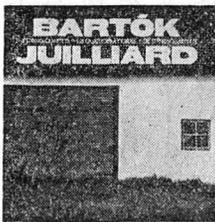
String Quartet No.5, Sz.102

この第五番でバルトークの弦楽四重奏曲はいよいよ頂上に登りつめる。中期の二作にくらべると明快な古典的書法を顕著に表わし、表現は整理されていちだんと簡潔なものになった。各楽器の用法もいっそう熟達を加え、さらに民俗的要素の処理も巧妙きわまりない。疑いなくこの曲は、今世紀の生んだ室内楽の最高傑作のひとつである。作曲者五十三歳の一九三四年の夏、彼の名作時代の幕を切って落とすように一気に書き上げられた。全五楽章のこれもシンメトリカルな構成。

ここで五種類ほどあるバルトークの弦楽四重奏曲全集（現役盤のみ）について包括的に述べておこう。まずジュリアード弦楽四重奏団は三たび全曲録音を行なっている（最古のモノラル盤は魔盤）が、そのうち一九一一年の最新録音が近來稀にみる名演奏である。計器盤をにらみながら進めてゆくような旧盤の恐ろしく精緻な演奏も、一般のバルトーク理解に大きく貢献したことは確実だし、しかも音楽の奥には熱く燃えるものがある、この団体の演奏の中でもとくに目立つ存在だった。しかし今回の十八年ぶりの新録音では表現に柔らかみやふくらみ、あるいは自然さが加わって、むしろ精度の高さが表面にのさばり出ないところに彼ら

の芸の深まりを感じる。音楽の妙味というものにはどうしても割り切れぬ部分もあることを納得したが、この名演奏の背景にあったかもしれない。次にハンガリー弦楽四重奏団はまったく練達の極をゆくアンサンブルである。気負いも誇張もおよそなく、絶妙な語り口には深い含蓄がある。内に秘めた気分の濃密さはジュリアード旧盤の比ではない。バルトーク弦楽四重奏団もおしなべて好演である。このクワルテットは来日公演でももちろんバルトークを演奏したが、それは実に緻密であるとともに気分的なゆとりさえ持っていて、錯雑した表現をきれいに整理し、書かれたものの本当のおもしろさをのこりなく引き出していた。こういう作品に対する演奏者側の親密感のようなものは、少し前の時代には絶対に見ることのできなかったものである。さらに東京クワルテットの全曲盤も、冴えわたった重奏の中に、鋭いセンスに支えられた生命感漲る音楽をいっばいに展開した彼らの最大傑作だ。

第五番単独ではとくにハンガリー四重奏団盤を推薦しておこう。このあたりの作品になるとさすがに格別の風格で、きき手は知らず知らずのうちその演奏に引き込まれてしまう。



◀ジュリアードSQ [全集]…CS-75 AC 1659~61

●ハンガリーSQ [第6番]…G-MGX7027●バル

トークSQ [第6番]…E-REL3152 ●東京SQ

[全集]…G-78MG5110~12

ベラ・バルトーク

Béla Bartók (1881—1945)

## 弦楽四重奏曲第6番

String Quartet No.6, Sz.114

筆者がバルトークの弦楽四重奏曲に初めて心を打たれたのは、実は演奏会場でもなく、わが家のレコードを通じてでもなかった。それはずいぶん遅く、大学時代に、学部校舎の地下にあった暗くてうす汚ない喫茶店でのことである。何番の曲だったかはもうすっかり忘れてしまったがたまたまレコードが鳴っていて、そのような場所で大きくバルトークがなぜか妙に新鮮だった。そのときの自分の心に痛いほど鋭く響いてくるのを感じて、ほとんど胸をときめかせたのをはつきり記憶している。どうにも説明しようのないそのような不思議な音楽体験は、多かれ少なかれ誰にもあるものではないだろうか。

それにしてもバルトークの弦楽四重奏曲は本当にすばらしい音楽である。筆者の独断では、この時代の作品としては断然傑出した魅力を持つものであると考える。ことに全六曲を通してきくことのおもしろさ樂しさはまさに抜群である。

さて、この分野の最後を飾る第六番は前作から五年が経過した一九三九年、すなわちバルトークがアメリカ合衆国へ亡命する前の年に書かれた。内容的にもこの作品は彼の祖国ハンガリーとの別れの音楽である。

第一楽章の冒頭でヴィオラが歌うメスト(悲しげに)の主題は続く二つの楽章の初めの部分でも繰り返され、さらに終楽章はほかならぬそのメスト主題を中心楽想とするのである。全曲を貫くその痛切な訴えは大きく者の胸を強く打たずにはいない。さながらベートーヴェンの後期弦楽四重奏曲の世界である。

レコードはここでも第五番のところに書いた四団体いずれも見事である。分売盤としてはハンガリー弦楽四重奏団ももちろん申し分ないが、この第六番ではバルトーク弦楽四重奏団の演奏がまことにすばらしい。特別なものらしく構えず、ひたすらていねいに、しかも柔らかいつかみ方で表現しながら、実に痛切な悲しみがある。そしてそれは弦楽器以外にはどうしても出せないものを語り尽くしている。一方、単独のレコードはないがジュリアード弦楽四重奏団の最新録音はこの曲でも感動的な名演をきかせる。技術的な興味よりもむしろ、音楽の表現しようとするものの核心に向かって四人の心がびったりとひとつになっているのを感じる。とくに最後に残る余韻の美しさなど、これはもう計測的にこしらえ上げることなど絶対に不可能なものであるはずだ。



▶バルトークSQ [第5番]…E-REL3152●ジュリアードSQ'81年録音〔全集〕…CS-75AC1659〜61  
●ハンガリーSQ [第5番]…G-MGX7027

## イーゴル・ストラヴィンスキー

Igor Stravinsky (1882—1971)

### 《兵士の物語》

“L'Histoire du soldat”

ストラヴィンスキーの室内楽曲はまたひときわ多種多様で、しかも作品のひとつひとつがすこぶる個性的である。どの作品を取り上げるべきかそれだけに判断のむずかしいところだが、ここでは《兵士の物語》を選んだ。これは通常の分類ではバレエ音楽であるわけだが、演奏形態からみれば、きわめて異色ながれつきとした室内楽曲である。音楽を受け持つ室内オーケストラの編成はクラリネット、ファゴット、ホルネット、トロンボーン、ヴァイオリン、コントラバス、打楽器群それぞれひとりずつ、それにレコードでは声のみの出演となる語り手、兵士、悪魔の三人が加わる。作曲者によればこれは「読まれ、演じられ、踊られる《兵士の物語》」ということになる。

バレエはアフナー・シエフのロシア民話に素材を求め、スイスの作家シャルル・フェルディナン・ラミューズが台本（フランス語）を執筆して、一九一八年に完成、初演されている。第一次世界大戦の勃発でひどい困窮に見舞われていたストラヴィンスキーは、どこでも手軽に上演できるようなという配慮から、この小人数の作品を着想しつらしい。時期的には一九一四年の《交響四重奏のための三つの小品》などとともにい

わゆる新古典主義の入口に位置するものだが、ストラヴィンスキーの手法はここでも独特で、当時の流行音楽だったラグタイムやタンゴ、あるいはジプシー音楽、スペインの舞曲、ウィーンのワルツなど、実にさまざまな要素を取り入れ、しかも全体を見事にまとめ上げている。

レコードはすぐれた全曲盤が二種類ある。新しい方はブルーレーズ指揮アンサンブル・アントルコンタンポランのソリストたちによる一九八〇年の録音。ほとんどシンフォニックな広がりを持つ演奏で、ひとつひとつの表情がくつきりと大きく、響きも豊かで、しかもそれでいてアンサンブルの縮まりも十分である。しばしば感覚的に鋭いものをみせるのも特徴。一方シルヴァースタイン以下ポストン交響楽団の主力メンバーによる演奏は、どちらかと言えば室内乐的なまとまりと柔らかな響きを持つもので、その淡々とした表現に成熟した深い味わいを秘めている。これは一九七二年のレコーディング。なお、この曲はヴァイオリン、クラリネット、ピアノの三重奏のための組曲、さらに原曲と同じ楽器編成による演奏会用組曲の二種類の編曲版（ストラヴィンスキー自身による）があり、そのどちらでもレコードできくことができる。



◀ブルーレーズ/Ens. アンテルコンタンポランのソリスト、ブランション（語り）シュロー（兵士）ウィテーズ（悪魔）…E-REL8316 ●ポストン響室内Ens. カタン（語り）ペリエ（兵士）クレ（悪魔）…G-MG2514

## ゾルタン・コダーイ

Zoltán Kodály (1882–1967)

### 無伴奏チェロ・ソナタ

Sonata for Cello Unaccompanied, Op. 8

コダーイの室内楽曲の大部分は一九〇五年から一九二〇年の間、すなわち彼の前半生に集中している。一方この作曲家の創作活動を支えるひとつの基盤となったものに民謡蒐集の仕事があったが、それが本格的に始められたのが折りしも一九〇五年だった。これらの事実が暗示するように、彼はほかならぬ室内楽の創作を通じて、民俗音楽の語法を純粹器楽の中に消化する技法に習熟してゆき、それが後半生のいつそう大がかりな作品における偉大な成果に結びつくのである。従ってコダーイの一連の室内楽曲は、それ自体の価値はむろん軽くないにしても、大きな目でみれば一種の習作的な意味を持つ存在でもあると言えよう。

この無伴奏のチェロ・ソナタはコダーイ三十三歳の一九一五年に書かれたもので、彼の室内楽曲の中では最も有名、かつ最大の傑作である。バッハが六曲の組曲を書いて以来およそ二世紀の間、無伴奏チェロのための作品は不毛であった。その理由をひとことで片付けてしまふなら、チェロ一挺による限定された表現力の枠の中でバッハを乗り越えることが困難だったためだろう。しかしコダーイはきわめて斬新な、ということはつまり非常に高度なチェロ技巧を開拓し、さらに民俗的語法を大幅

に持ち込むことによつて、この分野に新たな展望を開いたのである。バルトークはこの曲を「コダーイはこの上なく簡潔な技法を用いて、真に独創的なイデーを表現している。驚くべき声楽的效果を持つ独自の様式がここに展開されているが、しかしそうした効果を別にしても、この作品の価値がすこぶる高いことは疑う余地がない」と絶讃した。

この難曲をそれこそ得意中の得意としているチェリストがいる。作曲家と祖国を同じくするシュタルケルだ。彼はこの曲を一九四八年の世界初録音以来たびたび吹き込んでいるが、そのうちの二種類の録音が手許のカタログにある。ひとつは一九五〇年前後のモノラル盤で、これは当時としては驚異的にシャープな音質でも話題になつたもの。もうひとつは一九七〇年の日本録音でもちろんステレオ盤である。演奏はどちらもまったく見事なもので、少なくともこの曲に関する限り、シュタルケルの持前の比類ないメカニックが音楽の圧倒的なスケールと生命感に直結している点が強みである。ペレーニ盤もよい。現在の彼の力量はもつと上をゆくだろうが、この演奏にも非凡な才能が顔を出している。総合力ではいずれシュタルケルを超える大物とみる。

◀シュタルケル (vc) [バッハ/組曲第3番]…C-OW7712 ● 同 [ポタームント/バガニニ変奏曲]…V-VIC3085 ●ペレーニ (vc) [チェロ・ソナタ Op. 4]…Hun-SLA6332 (廃盤)



## アントン・ウェーベルン

Anton Webern (1883—1945)

### 弦楽四重奏のための五楽章

Five Movements for String Quartet, Op.5

ウェーベルンの創作に占める室内楽の比重は、師シェーンベルクの場合よりもいっそう大きい。弦楽四重奏のための種々の作品のほか、《弦楽三重奏曲》作品二〇などの傑作があるばかりでなく、《交響曲》作品二一や《協奏曲》作品二四もその実体は室内楽曲なのである。とする

と、彼の器楽曲の大半は事実上このジャンルに含まれてしまっただけだ。この《弦楽四重奏のための五楽章》は一九〇九年、ウェーベルン二十六歳の年の作曲である。シェーンベルクはその前年に例の声楽入りの弦楽四重奏曲第二番を書き上げた。新ウィーン楽派の動きは大きくなる。

この曲はのちに弦楽合奏用に編曲され、その形でときどきオーケストラ演奏会のプログラムにのぼる。むしろ一般にはそちらの方がなじみが深いだろう。それにしてもこの作品はウェーベルンの音楽の中では比較的大きな機会に恵まれ、ポピュラリティでは他を圧する気配になった。事実そういう結果をもたらすべき美感をこの作品は持っている。書き方は無調でその意味ではシェーンベルクの弦楽四重奏曲第二番よりも半歩進んでおり、ウェーベルン特有の微細な変化による徹底した圧縮の音楽になっている。それはのちにもっと先まで進むが、この作品でも五楽章で

十分ほどの時間しかからない。四つの弦楽器はこの小さな時間の枠の中で、きわめて高い緊張状態に置かれ、その上技術的には実にさまざまな奏法をたて続けに使用しなければならない。それによってこの曲の表現に欠くことのできない音質や音色が生まれ、音楽の形も生命も創造される。弦楽合奏で演奏される場合と原曲どおりの室内楽とでは従ってその鋭敏さが違う。弦楽合奏版ももちろん美しくはない。だがもう別の曲と言った方がよいくらい違ってくる。

この曲にはアルバン・ベルク弦楽四重奏団の名盤がある。アンサンブルもまた個々の技術も例によって恐ろしく精密であるが、表現は完全にこなれてとげとげしたところがなく、響きも表情も実に多彩でしかもいきいきしている。おもしろいことに、このクワルテットが演奏する古典の一部にときみられる固くややか細い感触はここに顔を出さない。このアルバン・ベルク四重奏団の師匠に当たるラサール弦楽四重奏団もこのあたりは得意の領域で、早くから定評のあったすばらしい演奏がある。彼らの《新ウィーン楽派の弦楽四重奏曲全集》については次頁でふれるが、この《五楽章》には少し録音の古い単独のレコードもある。

ALBAN BERG QUARTETT WIEN  
WEBERN, HÄGERSTOCK, SAMATI, URBANOFFER



▶アルバン・ベルクSQ [6つのバガテル Op. 9, 弦楽四重奏曲, ハウペンストラック・ラマティ/弦楽四重奏曲第1番, ウルバンナー/同第3番]…T-K17 C8328 ●ラサールSQ [新ウィーン楽派の弦楽四重奏曲全集]…G-MG8101~5 ●同 [弦楽四重奏曲, ペンデルツキ/弦楽四重奏曲, ルストワフスキ/弦楽四重奏曲]…C-OW7575

アルバン・ベルク

Alban Berg (1885—1935)

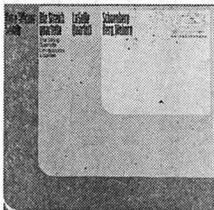
弦楽四重奏のための《叙情組曲》  
"Lyric Suite" for String Quartet

ベルクには一九一〇年完成の《弦楽四重奏曲》作品三もある（後述のラサール四重奏団のセット、さらにアルバン・ベルク四重奏団のレコードにも入っている）が、はるかに広く親しまれ、曲としても魅力に富むのはこの《叙情組曲》の方だろう。シェーンベルクの《浄められた夜》同様タイトルの存在も普及の一因かも知れないが、音楽そのものもよく書けていてベルクの実質が全曲に出ている。名作オペラ《ヴォツェック》完成のころに着手され、翌一九二六年に完成された。曲は組曲という語が示すとおり古典的な四重奏曲の形を離れて、六つの楽章を持っている。しかしその中に四重奏曲を構成する正規の楽章の痕跡は残されている。すでにこれ以前の器楽曲で用いられていた十二音の技法はここにも入り込んでいるが、全曲を厳しく支配してはいない。おもしろいのは各楽章の標語で、ジョヴィアーレ（陽気な）、アモローソ（愛らしい）、ミステリオソ（神秘的な）、アッパッシオナート（情熱的な）、デリランド（忘我的な）、デソラート（悲しみに打ちひしがれた）といった言葉がテンポ指示語のあとに付いている。ちなみにベルクは、一九二五年にプラハで夫も子もあたる女性ハンナ・フークスを知り、やがて深く愛するようになるが、《叙

情組曲》はそのハンナへのしよせんかなわぬ想いをひそかに託した作品であるらしい。

ラサール弦楽四重奏団が《新ウィーン楽派の弦楽四重奏曲全集》という類例をみないきわめて意欲的なレコードを出しており、ベルクの《叙情組曲》もその五枚組のセットの中でできくことができる。シェーンベルク、ウェーベルンの諸作品いずれもすばらしい出来栄であるが、この《叙情組曲》はまたことのほか美しい演奏だ。前記のベルクの書き込んだ標語が何と微妙に感じ取られていることだろう。この演奏をきくと、あれだけの標語しか与え得なかった作曲者の音楽家らしい寂しさまでが感じさせられてしまう。単独のレコードがないのは不便だが、この五枚組は愛好家なら手許に置いて決して損のないセットである。アルバン・ベルク弦楽四重奏団盤はしかしラサール四重奏団のさらに上をゆく名演奏だ。響きがいっそうつややかで、表現も実にのびのびしており、どの部分を切ってもその切り口から熱い人間の血が吹き出てきそうな充実感がある。別に名前がそうだからと言うのでなく、これはいかにも自分たちの音楽だと言わんばかりの自信に満ちた音楽の運びも印象深い。

◀ラサール弦楽四重奏団（新ウィーン楽派の弦楽四重奏曲全集）…G-MG8101〜5 ●アルバン・ベルクS Q（弦楽四重奏曲）…T-K17C 8327



# セルゲイ・セルゲイエヴィチ・プロコフィエフ

Sergey Sergeyevich Prokofiev (1891—1953)

## ヴァイオリン・ソナタ第1番へ短調

Violin Sonata No.1 in f, Op.80

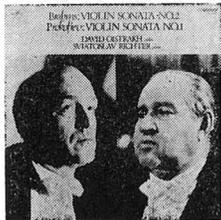
室内楽曲はプロコフィエフの創作の中では必ずしも重要な地位を占めるものではなく、作品の数も少ないし評価も一般に高くない。しかし二曲のヴァイオリン・ソナタはまったくの例外で、このあたりの曲としては演奏される機会は飛び抜けて多くなっている。プロコフィエフにとつて最も身近な楽器は言うまでもなくピアノだったが、この二曲のほかヴァイオリンとピアノ二重奏のためのソナタ、〈無伴奏ソナタ〉、さらにヘヴァイオリンとピアノのための五つのメロデーなどの諸作があることから明らかのように、ヴァイオリンに対する彼の関心も決して低くない。

〈第一番〉の番号を付されたこのへ短調のソナタは一九四六年、作曲者五十五歳の年に完成されているが、着手は遠く一九三八年で、第二次世界大戦をくぐり抜けて仕上がったものである、完成が延引したのはヘアレクサンドル・ネフスキー、そのほかの大作のため作曲を中絶してまじめにくくなったことが主因で、出来上がったときにはとうに〈第二番〉の方が発表されてしまっていた。

この曲は重く暗い雰囲気を持っている。形の明晰さよりは幻想の方が優位を占めている。第一楽章はその性格をはっきり示して全曲の序奏の

役割を果たし、終楽章でそれは回想される。その暗い気分は戦争の陰であるかもしれない。なおこの作品の献呈はオイストラフに対して行なわれ、もちろん彼が初演した。ピアノはオボーリンであった。

初演のコンビによるレコードはないが、オイストラフがリヒテルと組んですごい演奏を吹き込んでいる。ブラームスの第二やバルトークの第一ソナタのところでもふれた一九七二年のライヴ録音で、美しいと言うより、湧き上がる音楽的な感動の厚さと高さに押え込まれるような演奏である。調子は完璧ではなさそうである。しかし、音楽を作り上げてゆく壮烈な場面は作られた完璧さよりも強い。そしてその作り方の独特の推進力はリヒテル固有のものである。シゲティには二種の録音があり、そのうちレヴィーンのピアノによるモノラル盤がLP初期を飾った名盤のひとつ。シゲティ得意の曲でさすがに迫力がある。乾いた端的な言葉だけでプロコフィエフの硬質な音楽性を見事に語り尽くしている。比較的新しい録音のものにクレイメルとマイセンベルクのレコードがあり、これも名演である。ヴァイオリンの表現は驚くほどきめがこまかく、技術の高さとデリカシーとが見事に共存している。



◀オイストラフ(vn)リヒテル(p) [ブラームス/第2番]…Me-V IC3114 ●シゲティ(vn)レヴィーン(p) [第2番]…CS-20AC1910 ●クレイメル(vn)マイセンベルク(p) [2つのvnのためのソナタ]…Me-V IC5319

## セルゲイ・セルゲイエヴィチ・プロコフィエフ

Sergey Sergeevich Prokofiev (1891—1953)

### ヴァイオリン・ソナタ第2番ニ長調(フルート・ソナタ)

Violin Sonata No.2 in D, Op.94 (Flute Sonata)

このヴァイオリン・ソナタは元来はフルートとピアノのためのソナタとして作曲され、一九四三年八月にその形で完成したが、同年十二月初演(ピアノは当時二十八歳のリヒテル)をきいたオイストラフの勧めがあつてヴァイオリンとピアノ用に書き直すことになり、プロコフィエフはそのオイストラフの協力を得て編曲版を作った。ヴァイオリン・ソナタとしての完成も一九四四年の春だから第一番へ短調よりも早い。初演はその年の六月十七日、のちに第一番のそれも手がけるオイストラフとオボエのコンピで行なわれている。編曲は大がかりなものでは決してなく、技術上の問題を処理する範囲内にとどめているが、オイストラフが目ざとく見抜いたとおりまるで初めからヴァイオリンのために書かれていたかのようにこの楽器の特性に適い、しかも表現力の点ではもとよりフルートの比ではないことから、編曲版の方がはるかに有名になつてしまつた。

この曲はへ短調のソナタとはまるで性格が違う。前者が幻想味を強く盛る曲であつたのに対してこれは透明感があり、形式がきつちりと見通しよく、古典的なスタイルである。楽想は平明だし、叙情は清冽だ。お

そらくへへ短調ヴァイオリン・ソナタの完成に手間取っているうちに、フルートの明るい音色でまったく別の性格を持つもう一曲のソナタを書かずにはいられない気持になつたのだろう。

この曲は合衆国にいたシゲティに捧げられており、レコードも彼の手になるものがやはり二種類あるが、演奏は第一番同様古い方のモノラル盤がよい。この時期(一九四五年録音)のシゲティは本当に見事であつた。たくましく強靱な音楽性になつぷり脂が乗っており、彼の誇つた強い音性も輝かしい。のちには実際にひくことよりも、観念の方がいつも先行してしまつて、美感には目もくれないぎすぎすした表現に変わつてしまつたが、このころの演奏では高い見識がそのまま音になつている。

なおこの第二番のピアノはレオニード・ハンプロである。ヴァイオリン・ソナタとしてのレコードはこのほかには目下ミラノヴァ盤わずかに一点しかない。これは日本で録音されたもので、部分的には非常に美しいところもあるが、全体に表現の腰の弱いのが難点である。フルート版はゴールウェイとアルゲリッチのデュオでできる。温和な親しみやすい雰囲気を持つ演奏で、ピアノがさすがにきかせる。

◀シゲティ(vn)ハンプロ(p)〔第1番〕…◎CS-20A  
C1910●ミラノヴァ(vn)D. ミラノヴァ(p)〔ドビ  
ュッシー/vnソナタ, ラヴェル/ツイガース〕…De  
-OX7070 (原盤)●ゴールウェイ(fl)アルゲリッ  
チ(p)〔フランク/flソナタ〕…R-RX2381



# ドミトリ・ショスタコーヴィチ

Dmitry Shostakovich (1906—1975)

## ピアノ五重奏曲ト短調

Quintet for Piano & Strings in g, Op.57

ショスタコーヴィチが今世紀最大の、いやその名に侷する大家としてはほとんど唯一の、交響曲作曲家であったことは疑い得ない。しかし室内楽も彼が交響曲に勝るとも劣らぬ愛着と意欲を示した重要なジャンルで、この作曲家の個人的な感情あるいは精神と密着し、その内面をなまましく映し出しているという点では、むしろ交響曲を凌ぐように思われる。それらの中で量的に圧倒的な重みを持つのは作品数実に十五を数える弦楽四重奏曲だが、しかし早くから傑作と認められ、演奏会にもよく取り上げられてきたものとなると、何と言ってもまずこのピアノ五重奏曲を指名しなければならぬ。この作品に関しては、彼の交響曲などに共感しにくいものを感じず人も納得しないわけにはゆかないものがあるだろう。実際この五重奏曲はインスピレーションの豊富さと、楽曲構成の熟達で群を抜くもので、ピアノ五重奏曲の系列に久しぶりに加えられた美しい一ページである。弦楽四重奏曲のあるものを除けば、ショスタコーヴィチの室内楽の最も大きな成果と言つてよい。

作曲は一九四〇年で、第六交響曲や最初の弦楽四重奏曲のすぐあとである。第五交響曲の輝かしい精神的高揚も、第六交響曲や第一弦楽四重

奏曲の晴れやかさや明快さも、いっしょになってここに流入しており、しかも表現には感情がいきいきと表われて少しも誇張の気張りが無い。それが曲を気品高いものにしていく。

この曲の初演はショスタコーヴィチ自身のピアノとベートーヴェン弦楽四重奏団によって行なわれており、レコードも同じ顔ぶれによるものがあつたが、現在のところそれは廃盤になっている。カタログに一点辛うじて残っているのはエドリーナとボロディン弦楽四重奏団であるが、幸いこれは作品の深い味わいを楽しむに十分なすばらしい演奏だ。そのスマートな音のバランスは第二楽章などでは見事な効果を示し、作曲家の誠実な音の組み立てをくつきりとみせてくれる。弦とピアノのきびきびした調和の妙も独特のもの。この四重奏団の第一ヴァイオリン奏者ドゥビンスキーはほかならぬエドリーナの夫君で、現在二人は西側へ出てボロディン・トリオを結成し、新たな活動を展開している。このショスタコーヴィチは彼らにとつてなつかしい記念盤のひとつだろう。なおお白にはストラヴィンスキーの《弦楽四重奏のための三つの小品》が入っている。本書では一項を設け得なかつたが佳曲であり、演奏もよい。

◀エドリーナ(p) ボロディンSQ [ストラヴィンスキー  
—/3つの小品]…Me-V IC5095



## オリヴィエ・メシアン

Olivier Messiaen (1908—)

### 世の終わりのための四重奏曲

Quatuor pour la fin du temps

メシアンには室内楽曲はごく少ない。よく知られている作品としてはこの世の終わりのための四重奏曲が唯一のものである。周知のようにこの曲は、第二次世界大戦のさなかに捕虜収容所の中で作曲、初演された異色の作品で、そのことでもたいへん有名になった。場所はポーランドとの国境に近いザクセンのゲルリツ。一九四〇年六月にドイツ軍に捕えられた三十一歳のメシアンは、連行された収容所にたまたまヴァイオリン奏者のジャン・ル・ブーレル、クラリネットのアンリ・アコカ、さらにパスキエ兄弟の長兄で名チェリストのエティエンヌ・パスキエの三人が居合わせたことから、彼らのためにごく短い三重奏曲を書いた。洗面所でささやかに演奏されたというその曲は、この四重奏曲の第四楽章〈間奏曲〉である。こうして小さな芽を吹いたメシアンの構想はみるみる大きくふくらみ、彼自身のピアノを加えた四重奏のための、全八楽章からなる雄大な作品に結晶する。初演は一九四一年一月十五日、収容所のバラックの零下三〇度という寒さの中で、五千人の捕虜を聴衆とし、ありあわせのおんぼろ楽器を持ち寄って行なわれたという。

ヴァイオリン、クラリネット、チェロ、ピアノという特異な編成は従

ってまったくの偶然から生まれたものだが、楽章の八という数字には理由があるのだそうで、安息日を示す七という数の延長として、つまり永遠の光と不変の平和を象徴するものらしい。さらに作曲者は、この曲に關して「ヨハネ黙示録」の第十章を引用したり、また作曲技法などについてこまごまと注釈を加えたりしている。しかしそれらを手がかりに、この作品の思想を正しく理解し、あるいは技法を検討するのは必ずしも容易なことではない。むしろそのようなことを離れても、異色の楽器編成の生む響きの色あい、メシアン特有の精緻なリズムがもたらすアンサンブルの微妙な呼吸など、室内楽のさまざまな妙味を十分に味わうことができるところにこの四重奏曲の魅力があると言えよう。

目録には現在四種類のレコードがあり、当然のことながらどの演奏もリズムにこまかく神経を使っているのが目につく。とくにガヴリロフらによる演奏は実に精妙で緊張感が漲っており、音色に対するセンスも鋭い。対照的に柔らかなみのあるのはフェルナンデスらのレコードで、これはメシアン監修となっている。グルーエンベルクらの演奏もよく、とくに若いベロフの鮮烈なピアノが印象深い。



- ◀ガヴリロフ(vn) ダイソツター(cl) パルム(vc) フロイス・コンタルスキー(p)…HM-ULS3290 (廃盤)  
●フェルナンデス(vn) ドブリュ(cl) ネイルス(vc) プティ(p)…E-REL5513 (廃盤) ●グルーエンベルク(vn) ベイエ(cl) ブリース(vc) ベロフ(p)…Ser-EAC30347

- ・提剛 (vc) トゥリニ (p) CS-69AC1159~61
- ・ロストロポーヴィチ (vc) リヒテル (p) Ph-X8582~83
- ピアノ三重奏曲全集 [全7曲他]
- ・イストミン (p) スターン (vn) ローズ (vc) CS-SOCZ438~42
- 弦楽四重奏曲全集 [全16曲, 大フーガ]
- ・ジュリアードSQ CS-00AC1344~53
- ・スメタナSQ Sup-OB7185~95
- ・バリリスQ ⑩W-VIC5218~27
- ・ブダベストSQ CS-00AC1136~45
- CS-SOCZ455~64
- 初期弦楽四重奏曲集 [第1~6番]
- ・アルバン・ベルクSQ A-EAC87004~06
- ・ジュリアードSQ CS-SOCZ357~59
- 中期弦楽四重奏曲集 [第7~11番]
- ・アルバン・ベルクSQ A-EAC77305~07
- ・ジュリアードSQ CS-SOCZ360~62
- ・ブダベストSQ CS-SOCZ398~400
- 後期弦楽四重奏曲集 [第12~16番, 大フーガ]
- ・ジュリアードSQ CS-SOCZ363~66
- ・スメタナSQ Sup-OP7230~33
- ・ラザールSQ G-MG8278~71
- <シューベルト>
- 弦楽四重奏曲全集 [第1~15番]
- ・ウィーン・コンツェルトハウスSQ ⑩W-VIC5228~35
- <シューマン>
- 室内楽全集 [vn ソナタ全2曲, p 三重奏曲全3曲, p 四重奏曲, p 五重奏曲, 弦楽四重奏曲全3曲他]
- ・ユボー (p) ヴィア・ノヴァSQ, ムイエル (vn) ロデオ (vc) オヴォラ (p) ヴェスコーフ (hrn) コセ (va) ビエルロ (ob) ベイケンズ (cl) E-REL5004~10
- <ブラームス>
- ブラームス大全集/室内楽曲篇 [vn ソナタ全3曲, vc ソナタ全2曲, cl ソナタ全2曲, p 三重奏曲全3曲, cl 三重奏曲, hrn 三重奏曲, p 四重奏曲全3曲, 弦楽五重奏曲全2曲, 弦楽六重奏曲全2曲, p 五重奏曲, cl 五重奏曲]
- ・ゾーカーマン, ブランディス (vn) クリスト, アロノウィッツ (va) ロストロポーヴィチ, フリース (vc) ライスター (cl) ハウプトマン (hrn), バレンボイム, ボリーニ, ゼルキン, ヴァンシャリー (p) アマデウスSQ, イタリアSQ, ラザールSQ G-00MG0516~30
- <フォーレ>
- フォーレ室内楽曲全集 [vn ソナタ全2曲, p 四重奏曲全2曲, vc ソナ

タ全2曲, 弦楽四重奏曲, p 三重奏曲, p 五重奏曲全2曲他]

- ・J-P. コラール (p) デュメイ, ゲスタン (vn) B. パスキエ, コセ (va) ロデオ, ベスナー (vc) デポスト (fl) パルナンSQ A-EAC77308~13

- <バルトーク>
- 弦楽四重奏曲全集 [全6曲]
- ・ジュリアードSQ CS-75AC1659~61
- ・東京SQ G-78MG0110~12
- <新ウィーン楽派>
- 新ウィーン楽派の弦楽四重奏曲全集 [シェーンベルク, ベルク, ウェーベルン]
- ・ラザールSQ G-MG8101~05
- <ショスタコーヴィチ>
- 弦楽四重奏曲全集 [全15曲]
- ・タネーエフSQ Me-VICX36~42
- <オムニバス>
- カザルスの遺産 [ハイドン/vc 協奏曲第2番, ボッケリーニ/vc 協奏曲, ベートーヴェン/vc ソナタ第1, 2, 5番, p 三重奏曲第5, 7番, シューベルト/弦楽五重奏曲, フェレ/エレジー他]
- ・カザルス (vc, 指揮) コンセル・ラムルー管弦楽団, エンゲル, ケンプ (p) ヴェーグ (vn) 他 Ph-15PC226~32
- 巨匠カザルスの芸術 [バッハ/無伴奏 vc 組曲第1~6番, ボッケリーニ/vc 協奏曲, ベートーヴェン/vc ソナタ全5曲, p 三重奏曲第7番, ハイドン/p 三重奏曲, シューベルト/p 三重奏曲, メンデルスゾーン/p 三重奏曲, ブラームス/vc ソナタ第2番他]
- ・カザルス (vc) コルトー, シュルホフ, ホルショフスキー (p) ティボー (vn) セル指揮 チェコ・フィル, ロナルド指揮 ロンドン響, ボールト指揮 BBC響他 ⑩A-EAC60138~49
- ローラ・ボベスコの芸術 [モーツァルト/vn ソナタ第28, 34, 40番, ベートーヴェン/vn ソナタ第5, 9番, フランク/vn ソナタ, プーランク/vn ソナタ, ルクー/vn ソナタ, ドビュッシー/vn ソナタ他]
- ・ボベスコ (vn) ジャンティ (p) Ph-28PC22~26
- 巖本真理弦楽四重奏団の芸術 [ハイドン/弦楽四重奏曲第78, 79番, モーツァルト/同第14, 17番, ベートーヴェン/同第10, 15, 16番, 大フーガ, 弦楽三重奏曲第1~4番, 弦楽五重奏のためのフーガ, エレジー, シューベルト/弦楽四重奏曲第10, 13, 14番, メンデルスゾーン/同第4番, ヴェルディ, プッチーニ, シベリウス, グリークの弦楽四重奏曲, シェーンベルク/浄められた夜他]
- ・巖本真理SQ, 江戸純子 (va) 藤田隆雄 (vc) 他 A-EAC60199~211

室内楽名曲名盤 100

製本 印刷  
谷合製本 太陽印刷

発行所 東京都新宿区神楽坂六十三  
株式会社音楽之友社  
電話(235)二二一(代)  
受注専用(235)四二九  
振替東京七一九六二五〇  
郵便番号 一六二

発行者 浅香 淳  
著者 大木正興  
大木正純  
定価 七五〇円

昭和五十八年八月十日 第一刷発行  
昭和六十二年三月二十日 第五刷発行

この著作物の全部または一部を権利者に無断で複製(コピー)することは、著作権の侵害にあたり、著作権法により罰せられます。

ISBN 4-276-35047-6 C0273 ¥750E

【全集・選集などの主なセットものレコード】

(1983年8月現在)

<ハイドン>

ピアノ三重奏全集 [第1~7, 10~45番]

・ボザール・トリオ

Ph-15PC284~97

<モーツァルト>

ヴァイオリン・ソナタ集 [第24~30, 32~36, 40~43番]

・シェリング (vn) ヘプラー (p)

Ph-PC5614~19

弦楽四重奏曲全集 [全23曲]

・バリリSQ, ウィーン・コンツェルトハウスSQ, アマデウスSQ

ⓂW-VIC5208~17

弦楽四重奏曲 <ハイドン・セット> [第14~19番]

・アルバン・ベルクSQ

T-K17C9277~79

・イタリアSQ

Ph-15PC110~12

・ジュリアードSQ

CS-SOCZ415-17

・スメタナSQ

De-OS7168~70

弦楽五重奏曲全集 [全6曲]

・アマデウスSQ, アロノウィッツ (va)

G-MG8140~42

・ジュリアードSQ, グラハム (va)

CS-69AC845~47

・タートライSQ, マウトゥネル (va)

Hun-SLE6017~19

・ブダペストSQ, トランブラー (va)

CS-45AC1341~43

<ベートーヴェン>

ヴァイオリン・ソナタ全集 [全10曲]

・浦川宜也 (vn) ルップ (p)

Fon-FONX20001~5

・オイストラフ (vn) オポーリン (p)

Ph-15PC7~10

・グッリ (vn) カヴァッロ (p)

Tr-PAC2017~21

・クライスラー (vn) ルップ (p)

A-GR2055~59

・グリュミオー (vn) ハスキル (p)

Ph-15PC209~12

・シェリング (vn) ヘプラー (p)

Ph-20PC7~11

・パールマン (vn) アシュケナージ (p)

L-L00C1041~45

チェロとピアノのための作品 [チェロ・ソナタ全5曲, 「マカベウスのユダ」の主題による12の変奏曲, 「魔笛」の主題による7つの変奏曲, 「魔笛」の主題による12の変奏曲]

・シュタルケル (vc) ブッフピンダー (p)

T-SLE1122~24

・フルニエ (vc) ケンプ (p)

G-MG8115~17

・ペレーニ (vc) ラーンキ (p)

Hun-SLE1127~29

チェロ・ソナタ全集 [全5曲]

・カザルス (vc) ホルショフスキー, シュルホフ (p)

ⓂA-EAC60039~40